

# 鳴門秘帖

江戸の巻

吉川英治

青空文庫



## お千絵様

みぞれ模様の冬空になった。明和二年のその年も十一月の中旬を過ぎて。

ここは江戸表——お茶の水の南添いに起伏している駿河台の丘。日ごとに葉をもがれてゆく裸木は、女が抜毛を傷むように、寒々と風に泣いている。

虱しぼりの半手拭を月代に掛けて、継の当った千種の股引を穿き、背中へ鉄砲箆をかついだ男が、

「屑ウーイ。屑ウーイ」

馴れない声で、鈴木町の裏を流していた。

「エエ寒い。こいつが関東の空ツ風か……」

と、胴ぶるいをした屑屋の肩へ、パラパラと落葉の雨が舞いかかった。

「寒いのはとにかくだが、さつぱり呼んでくれねえのは心細い。せめてこの近所に馴染ができれば、ちツたあ様子も聞かれるだろうと思うが……なにしろすること、なすことはずれてきやがる。考えてみると俺は三十六、今年は大厄だったんだなア」

愚痴をこぼしてフラフラと一、二町、うつむいたまま歩いて来ると、頭の上の窓口から、

「屑屋さん」

と、女の声で呼び込まれた。

呼ばれたので急に思い出したように、

「屑ウーイ」と、商売声を出したから、呼んだ女もおかしくなれば、屑屋も自分ながらそれ臭そうにあおむいた。

「屑屋でございですが……」と、もう一度、窓に見える女の顔へ頭を下げると、

「あツちへ廻つて下さいな」

「へ、お勝手口へ？」

「そこに潜り戸があるだろう」

「ございませす、ございませす」ガラリと開けた水口の戸も開けつ放しに、鉄砲筧と一緒に入り込んだ。

「たいそうお寒うございませすな」

「縁側のほうへお廻りよ、少しばかり古反古を払いますから」

打ち見たところ、五人扶持ぐらいな御小人の住居でもあろうか。勝手つづきの庭も手狭

で、気のよさそうな木綿着の御新造が払い物を出してきた。

煙草の火を借りて話し込んだ屑屋、さつきからこの界限の噂ばなしをしきりに聞きたがつて、

「時に御新造様……、この駿河台にある甲賀組というのは、たしか、この前の囲いの中にある、真つ黒なお屋敷のことじゃございませんでしたか」

「そうだよ、墨屋敷といつてね、二十七家の隠密役の方は、この一つ所にお住まいになっている」

「二十七軒もありますか。フーム、ずいぶん広いものでございますなア」とわざとらしく感心して、ちよつと相手の容子をみたが、その眸の底に鋭い光が潜んでいた。

「申しちや失礼でございますが、隠密役なんていう方は、平常は何の御用もねえでしょうに、これだけの家筋をそれぞれ立てておく將軍様の世帯も、大きなもんじゃありませんか」

「だからだんだんとその家筋を、お上でも減らすようにしているという話だね」

「そうでしょう。権現様の時代には、戦もあれば敵も多い、そこで自然と甲賀組だの伊賀者だのも、大勢お召し抱えになる必要がありましたろうが、今じゃ天下泰平だ。なんとか

口実をつけて減らす算段もするでしょうさ」

「現にツイ先頃も、また一軒のお古い屋敷が絶家ぜっけになって潰れたつぶという話だよ」

「そうそう、それは甲賀世阿弥様こうがよあみという、二十七軒の中でも、宗家そうけといわれた家筋でございましょう」

「オヤ、お前よく知っておいでじゃないか」

「実は、御新造様……」と屑屋はあたりへ気配りして、にわかにか声を低くした。

「わつしの不馴れな様子でもお分りでしょうが、まったくは、これは本業じゃございませぬので」

「えっ……」と内儀ないぎは少し後あとずさつて、「まあ、気味の悪い屑屋さんだ。毎日この辺ばかり歩いているし、それに稼業かぎよう馴れないふうだから、可哀そうに思つて呼んでやったのに……、じゃ、屑屋は世間態せけんていだけなのね」

「もし、御新造様。そうお驚きなすツちや困ります」

「困るのは私のほう、そんな仮面めんをかぶつて世渡りするような者なら、迷惑ですから、サツサと帰つて下さいまし」

「決して、盗ぬすツ人や騙かたりじゃございませぬ。どうかご安心なすつて、その甲賀家のことに

ついでにご存じだけ、お聞かせなすつて下さいませんか」

「いいえ、素姓すじょうの知れない者などと、めつたな話はできません」

「じゃ、その身柄を正直に明かします。もし……御新造様、わっしはこれが本業なのでございます」と、内懐うちぶとこから抜いた紺房の十手を、そつと内儀の前に出して、虱しらみしぼりの手拭をとつた。

「まあ」と、内儀は十手を見て、いつそう気味悪そうな面持おももちをした。とんだ屑屋を呼び入れてしまったと、今になって後悔する色がありありとみえる。

「ですが、決してこちらさまへ、ご迷惑をおかけ申しは致しません」と、鬚まげからはずした手拭を折り畳んで、縁先へ腰を入れた男は、目明し万吉まんきち、彼であつた。

「深い事情は申されませんが、わっしは大坂東奉行所の手先です。といつても内々ないないは、少し道楽半分の目的めあてに憂うき身みをやつしておるので……」出された茶を啜すすつて、素姓を明かした目明し万吉。後は程のいいこしらえごとを口実に、近頃、絶家になつてしまったという甲賀家の消息を根掘り葉掘り訊ききはじめた。

禅定寺ぜんじょうじ峠つたの上から、弦之丞げんのじょうと西東に立ち別れ、一足先に江戸へ入つた万吉は、まだ

何かの都合で、お千絵様にも会ってはいないらしかった。

という次第は。

彼が江戸へ入ると真つ先に、この駿河台の墨屋敷、甲賀家の門を訪れたのは無論だったが、ひよいと見ると門札の名が変つてゐる。その門札には、甲賀世阿弥の代りに「旅川周馬」という文字が書かれてあつた。

しまつた！ 遂に間に合わなかつたのである。つまり第一に阿波へ立つた銀五郎がああいうはめとなり、何の便りもなく半年以上の日が過ぎたため、隠密組の法規通り、満十年帰らぬ甲賀世阿弥は、客死したものとお上に見なされ、そのお家は断絶の命が下されてしまつたのだ。

ああ、何もかも鶻の喙——と落胆したが、とにかく、その代がわりになつてゐる旅川周馬という者に会い、絶家したお千絵様が、どこに身を落ちつけたか、それを尋ねてみるにしかずと門をくぐつた。

ところが、玄関はピツタリ釘付け、庭口も錠を下ろしてある様子。呼べど出てくる人はなく、昼だというのにすべての雨戸も閉じきつてある。

黒い板塀の周りを巡つてみると、十年も主がいなかつた甲賀宗家。この附近の墨屋敷

の中では、最も宏壯な構えだが、広いだけに荒れ方も甚だしく、雑草離々として古社  
 中でもあるような相だ。

と——瓦腰の隅座敷、その窓だけが細目に一カ所開いていた。万吉がふと目をつ  
 けて、塀の穴から差し覗いてみると、ヤツぱり人の気配はない。シーンとして狐狸の棲家  
 かと思われるくらい。

だが——ここに必ず誰か棲んでいることを、その時、万吉に教えてくれたものがあつた。  
 何かといえば、その部屋の腰壁と垣の間に落ちていた丸い紙屑だ——雨に打たれた様  
 子もなく、フワリと草の上に浮いているのは、捨てたばかりの手拭紙に相違ない。

いつか俵一八郎に、今度のことは目的が大きい、必ずケチな目明し根性を出すなよ、と  
 いわれてもいたが、こんな物が目に触れると検査心がムラムラする。万吉はそこらの棒  
 切れを拾って、塀の穴から腕を伸ばし、その紙屑の玉をかきよせて手に取った。

嗅いでみると、プーンと伽羅油のにおいがする。そして皺をのばした紙の中からもつれ  
 た髪の毛が四、五本出た。その一本を指に伸ばして見て、彼は女の毛だということを知つ  
 た。

「してみるとこの屋敷は、お千絵様が立ち退いた後へ、旅川周馬とかいう奴や、女も住ん

でいるらしい。とすると、おかしいなあ……なんだって、こう草茫ぼうぼう々々としたまま方々釘付けにしてあるんだろう？」

耳をつねって考えても、どうもはつきりした見当がつかないふう。

で、今度はこの一廓かくの、ほかの墨屋敷を訪れて尋ね廻った。ところが、誰の答えも一致して、

「アア、お千絵様でございますか。お気の毒でございますねえ。ですけど、手前方では、あのお方のことについて、何の存じ寄りもございませぬ」と、ことに話を避けるのみか、姿を見たこともないという家ばかりだ。

毎日、同じ姿で聞き歩くのも変なので、俄屑屋にわかくすやを思いついた。これならどこの横丁へでも自由に入れる。日に一度ずつ墨屋敷の近所を歩き廻ったところで怪しまれる気づかいはない。

そうしてようよう今日呼びこまれた家の内儀が、どうやら甲賀家や墨屋敷の事情に詳しい口ぶりなので、万吉は、わざと生地きじをはいでみせて、この手がかりを遁のがすまいとしたのである。

万吉が上手に口裏くちうらを探つてみると、その主は元甲賀組とも多少由縁ゆかりのあつた者らしく、初めは気をすくませていた内儀も、だんだん隙すきを緩ゆるめてしゃべりだした。

「では何でございますか、そのお千絵様の居所いどころさえ、お分りになればよろしいので」

「ええ、それさえ知れば、こんな寒空に鉄砲てっぽう箆ざるを担かついで、毎日歩き廻ることもねえんです。で御新造様、一体お千絵様は、どこへ立ち退いてしまったものでしょうね？」

「さあ、そこには深い事情があるようでして……」

「な、なるほど。わつしもちつとばかり小耳に挟んでおりましたが、同じ甲賀組の中の者で、あのお方の縹きりよう織ようと、世阿弥よあみの残した財宝に目をつけて、つきまどっている奴もあるそうですね」

「それなんですよ。あのお千絵様のお苦しみはね」

「して、そいつの名は？」

「旅川周馬というお人……。ア、うっかりよそで、私がしゃべつたなどというて下さいますなえ」

「ええ、おっしゃるまでもございません」

「その周馬が、あの滅亡したお屋敷を、お代地かえちとしてお上かみからいただいたのをよいことに

して、世間へはお千絵様が他へ立ち退いたように言いふらし、その実、門も戸も釘付けにしたまま、あの屋敷の奥に押しこめてあるのでございます。ええ、それは組仲間の者でもうすうす知っている人もあるでしょうが、なにしろ悪智にたけた周馬に仇あだをされるのが恐ろしさに、誰も、知らぬ顔をよそおっているのでございます」

「へえ？　じやお千絵様は、やつぱりあの屋敷にいるんですか。ナンだ、それじゃいくら屑籠くずかごを背負しよつて、世間を嗅かぎ歩いても知れねえ訳だ。……イヤ、大きにどうもありません。どう存ぞんじました、それだけ教えていただければ、後は商売商売というやつで、どんなことをしてもきつとお目にかかります」

と万吉は礼をいって、また虱しらみじぼりの手拭を頭にのせ、鉄砲てつぱう箆ざるを背中へ廻して往来へ出た。

やがてその姿は、出た所から遠くない墨屋敷の堤どてがこ 囲いへ入り、甲賀家の古い黒堀に浴つて、ピタ、ピタと藁草履わらぞうりの音をすりながら、

「屑ウーイ。屑ウーイ」

張りしまっている心とは反対に、わざと間の抜けた濁だみ声を流していった。

と——万吉は立ち止まって、ズウと後ろを見廻した。あっちこっちに黒い屋敷の堀や樹

木が見えるのみで、この囲い内は人通りのない所だ。

万吉が立ち止まった所は、いつか初めてここを訪れた時、細目にあいている小窓を見たあの辺である。そこへ立つと目明し万吉、耳みみたぶをつねつねちよつと何か考えこむ。

そして塀の節穴へ目を当てた。のぞ覗いてみると屋敷の中、相変らず森しんかん閑とはしているが、今日もあの窓の戸が四、五寸ほど開あいている。

「ははあ、ヤツぱりここだな。ここより外に人臭い様子がねえ。いつか草の中に、髪の毛のついた手拭紙てふきがみが捨ててあったのもこの辺だ。ほかに女気もないという話、きつと座敷牢とでもいう按配あんばいになつていられるのかも知れねえ、一つ当ってみようか……」

何の造作ぞうさくもなく、万吉は塀へいの朽ちた穴を探して犬のように這い込んだ。どうせ犬の真似まねをしたついでだ、と思ったのでもなかるうが、そのまま膝すみで歩き寄つて、隅座敷すみの窓の下へ屈かがみ込む。

そして、ややしばらく、じつと耳を澄すましていたが、時折黄色い銀杏いちじょうの葉はが、廂ひさしを打つてハラハラと落ちてくるほか、物音ものねらしい音はない。

はてな、やっぱり誰もいないのかしら？ ……と思つていると、家の中でごく密ひそやかに袋戸棚あでも開あけたようなすべ迂ねり音がした。そして柔ならかい絹きぬずれが窓の近くへ寄よつてきた。

窓を開けて、お千絵様が顔でも出してくれるような都合になれば、まことにありがたい偶然だが、なかなかそう願って叶う訳には行かない。

で、万吉。遂に痺れがきれてしまったので、試みに羽目板をコツンコツンと指の尖で叩いてみた。だがやはり、いつまでたっても、中からあけて覗く気配がなかった。

しかしそれにあせて、もし人違いな旅川周馬しゅうまとでも、面と向ってしまった際には、それこそだいぶこと面倒になるだろう。としばらく我慢してみたが、どうもこつちから当りをつけるより仕方がなくなつて、万吉は、いざといえ、半分逃げ支度の気構えを取つて、

「お千絵様……」と、聞き取れぬほど低い声をかけてみた。窓は屋敷作りなので背が届かぬほど高目にあつた。

「お千絵さま」

二度目に呼ぶと、

「誰……?」

すぐ低い答えが洩れてきた。しかもきわめて優しい女の返辞へんじ！万吉はドキンと胸を躍らすと一緒に思わず「ありがてえ」と心の奥で呟つぶやいたことである。

「そうおっしゃるのは、お千絵様でございましょうか」

姿は隠して、眼だけを白く上うわずらせながら、も一度こう呼んでみると、今度はしばらく何の答えいらいもなかったが、やがてよほど間まをおいてから、

「誰……?」

かすかな女の声が前と同じに繰り返された。

「その私は、お目にかかった上でなければ申されませぬが」

万吉はソロソロ身を伸ばして、

「あなたは、甲賀世阿弥よあみ様の御息女、あの、お千絵様でございましょうな」

くどいようだが、なお念を押すと、

「エエ」

とはばかりようなうなずきが、万吉の耳へやつと届いてきた。その声を聞くと、一遍ぺんに重荷が下りた心地がして、彼は、初めてのびのびと腰を立てて、雨戸の隙すきが四、五寸ほど障子になっていゝ高窓の口を見上げたが、背が足らないので隙見すきみをすることができない。

だが、まアこれで安心というもの。やはりここがお千絵様の部屋だったものと見える。

とかく、目明しなどという者は、八ツ当りに当たった時と慢心の味に狎れて、いつでも物の裏を覗よう、裏を行こうとする癖があるから、正直に、表が表で来たり、白が白で目の前に存在していたりすると、かえって己れの小智慧にからかわれて、神楽堂の外で神楽舞をやっているような、お話にならない骨折損をやるものだ——ということを、この時万吉、悟ったかどうか。

「では、お千絵様でいらつしやいますな。さようなら申しあげますが……」と閉まっている窓の下から頭を下げて、

「実はわつしは、大阪表からまいりましたもので、はい、是非折り入って内密にお目にかかりたいと存じますが」こういつて、彼はまた向うの声を待っていた。しかし、こつちでさんざん疑心を抱いたように、先でも多少の警戒をもつとみえて、待てど容易に返辞がない。

で万吉は、その疑惑を先に解いて貰うために、

「決して、お案じなさる者じやございません。あなた様のよくご承知な、法月弦之丞様からの使いで、大事な用をおびてまいった者でございますから」

「えっ……」と驚く声。

「はい」

応えがあつたと万吉は固唾をのむ。

「法月さんから？」

「ご存じでございましょうが」と、その図に乗って、何の気もなく爪先立ちになり、上の窓框へ手をかけると、不意に！窓の隙からその手をグイとつかみ取りに引き込まれて、格子へ絡みつけるように、強く捻じつけられてしまった。

「あッ」

と彼は羽目板へ足を踏んがけたが、もがけばもがくほど窓の角に手が縊れてしまうばかりだ。

ちえッ、不覚！優しい女の声であつたばかりに、油断しぬいていたのは俺にも似げなかつたと、万吉は齒を食いしばつて振りほどこうと試みたが、窓縁を力に両手で抑えつけている家の中の者と、爪尖立ちをして締木にかけられている下の者とは、地の利において大変な相違がある。

こういう結果になつてみると、やはり世の中には二一天作の五ばかりには行かず、二四が九であつたり、三五十九である場合も常に心得ておかなければならないかも知れぬ。

そんなことは釈迦しやかが経きようもん文もんをそらんじているより、百も千も合点がてんしている万吉にしてこの失策は遺憾いかんしよく至極しよくといわねばならぬ。彼は、懸命に力をしぼってもがき遁のがれようとじれながらも、対手あいてはそも何者であろうかと、必死に考えずにおられなかつた。

噂に聞いていた旅川周馬か？ イヤそれにしてはたしかにさっきの答いえが女の音おん声しょうであつた。声ばかりでなく、ひしとつかまれている手の触感でも、それはあきらかに柔らかく温ぬくい女の手だと知れる、だが女にしてはなんと粘ねばり強い指の力だ。

「ちツ、畜生ツ……」と目明し万吉、腕が抜けるか離すかとばかり、再度の強引ごういんを試みると、家の中の女は憎いほど落ちつきすまして、

「あぶないよ」

と静かにいつたものである。

「——騒ぐのはおよしなさい。わたしの側には手頃な小刀こづかがありますからね、じたばたすると掌てのひらを窓板うなぎへ、鰻うなぎの首を刺とめるように、プツンと縫ぬってしまいますよ……」

小刀で掌を刺し止められては堪らない。万吉はひやりとして、その女の手を羅生門らしやうもんの鬼かとも強く感じた。

だが、それが旅川周馬でなく、お千絵様でもないとするれば、一体誰と判じていいか。この甲賀世阿弥よあみの廃家になった跡には、周馬が入れ代り、周馬はお千絵様をとりこにして、密ひそかに監禁しているのだと、あの内儀がまことしやかに話したではないか。

するとあの女の話はうそだったかしら。いやいや、万吉の眼では、そんな虚言きよげんを吐く人間とは思われなかった。

彼は頭の昏迷こんめいと無駄力に疲れてしまった。

「静かにおしよ、騒ぐとかえってお前のほうの不為ふためだからね」

家の中でそういう声の裡うちに笑いが含んでいた。万吉はいまいましさに唇を噛みしめたが、所詮ムダだと知ったので、もういたずらに逆らわなかった。

「なにも、こんなにいじめることはないのだけど、逃げようとするからこつちも捕まえる気になるというもの……。実は少しお前さんに、訊きたいことがあるのだけれど、この屋敷では都合が悪いから、改めて私の宅うちまで来てくれないかえ」

万吉はオヤツと思つた。

こう落ちついて聞くと、女の語調にどこか聞き覚えがあるばかりでなく、いう注文がいよいよ出いでていよいよ不思議に聞かれたのである。

「じゃ、お前は、この屋敷の者じゃねえんだね」

「誰がこんな、草茫茫とした化け物屋敷に住んでいるものかね。万吉さん」

「えっ……?」

「ぜひ、頼みますから私の宅へ来て下さいな。そつちは捕縄を持つ渡世、私は裏の闇に棲む人間だけれど、思案に余っていることがあるんだから、渡世を捨てて会ってくれる訳には行きませんか。そういうこの私の家は本郷妻恋一丁目——」

「あつ、お綱!」

「——分つたでしょう」

不意に手を離されたのと、意外なおどろきにうたれたのとで、万吉はヨロリと後ろへ足を踏み乱しながら、窓の細目へ睜目した。と、白い手が嫺やかに動いて、雨戸の障子を二尺ばかり押し開けた。

急に流れこむ外の光線をうけてまぶしげな微笑を含んでいる女の半身——見ると蔵前風な丸鬚くずしに被布を着て、琴か茶か挿花の師匠でもありそうな身装、姿はまるで変っているが、それは見返りお綱に違いなかった。

万吉はただ呆れ顔である。

家違いでもしたのではないかと見廻したが、やはりここは元の甲賀家、今では旅川周馬の門標が打つてあるその屋敷には相違ないのである。そこに見返りお綱がいる！あの妖艶うえんなお嬢様姿や、粹いきな引っかけ帯とは、また打つて変つた被布姿でいるのが、いよいよ不思議にたえぬのであつた。

お綱は片えくぼに万吉の気振りけぶを見ながら、

「とんだ人の声色こわいろを使つて、定めし胆きもを潰つぶしたでしようね」

「さすがの俺もびつくりしたよ。おまけに人の腕首をねじつけて、ひでえ真似まねをするじゃねえか」

「堪忍しておくんなさい。半分は私のいたずら、半分はお前さんを逃がすまいと思つてね……」

「だが、どうしてこんな所にいたのだ」

「貸したお金の催促さいそくに来ておりますのさ。ところがこの通りな荒屋敷あれやしき、いつ来てみても釘付けなので、業腹ごうはらだから今日は向うをコジ開けて、この部屋へ上がり込んで周馬の戻りを待つていたところが、たいそう草双紙くさそうしが積んであるから、肘ひじまぐら枕まくらをして読んでみると、窓の外からお前さんの見当違い……まったく妙な所で会いましたねえ」

「じゃ、ここの旅川周馬という者とお前とは、ずっと以前から懇意こんいなのか」

「いいえ、時々賭場どばで落ちあうので、懇意こんいというのでもないけれど、二、三百両ほどの立て替えがあるんですよ……あ、こんな話は目明しさんには禁句だっけ、ご免なさいよ、ホ、ホ、ホ、ホ」

「なに、目明しは目明しでも、この万吉はほかに大きな望みを賭かけている体だ。ケチな十手をピカつかせることはしねえつもりだから、お上かみの者とひがまねえで、何なりと明けすけに話してくれ」

「じゃ、女掏摸すりでも捕つかまえませんか」

「さア、そいつは、どうともいえねえが、見返りお綱つなという人には、住吉村で助けられた恩義おんぎがある。そいつを忘れちやすまねえからな……」

「恩へちまも糸瓜へちまもありませんが、どうか、さつきもいった通り、一度妻恋の私の家へ来て下さいな」

「そして何だか相談があるといったが」

「エエ、法月さんのその後の様子を、よくご存じのようですから、それやこれやも聞きたいし……また私の思い余っていることも……」

口くちごもつて、お綱は、フイと心に何ものかをえがく様子である——打出うちでヶ浜の夜寒よさむから、月夜の風邪かぜはいつそう根深いものとなつたらしい。

## 旅川周馬

「ではお千絵様、エエ違つた！ お綱さん。どういふ話か知らないが、お前のほうの相談はいずれ場所を改めて、ゆっくり聞くとしようじゃないか」

「そう、では妻恋の私の家へ」

「日を改めて訪ねましょう」

「必ずね。固く約束しましたよ」

「万吉、義理は固いつもりです」

「ああ、それは私も見込んでいる……掬すり摸と目明し、オランダ骨牌カルタで結べましたね」

「一つ仲好くやりましょうぜ」

「え、待っていますよ」と、お綱は蠱惑こわくにニツコリ笑つて、すうと障子を閉しめかけた。

驚いたのは目明し万吉。尋ねてきた者は尋ね当てないで、尋ねもしないお綱から口約束

を取られた上に、窓を閉められてしまつては、あぶはら 虻蜂とらずな訳である。

「オット!」と、あわてて背伸びをした。

「こう、お綱さん、自分の用だけはすんだからといって、俺の頼みをきいてくれねえのは酷過ぎるだろう」  
ひどす

「オヤ、何か私にも頼みがあるの?」

「あるからこそ、かりそめにも、目明したる者の万吉が、チボのお前めえと手を握ろうといふんじやねえか」

「ほんに、これはわたしが現金過ぎたね。なるほど誰かがいったつけ……。恋こい飛脚びきやくの梅川うめがわにしろ、河庄かわしょうの小春こはるにしろ、月夜の風邪をひいた女は、他人ひとの都合はお構いなしで、みんな自分だけの世間のように、勝手な気持ちになるものだって」

「冗談じゃねえ、そんな手前勝手な奴らには、この万吉はつきあえねえ」

「私だつて、今にどうなるか知れないよ。自分で自分の心が少し変に思えてきたからね」

「そこで、チボの足でも洗いなせえ」

「とんだ所でご意見でした。そのうち、ゆっくり考えましよう」

「エエ、また話がそれちまつた。お綱さん——」と万吉、今度はいよいよ真剣に、窓の格

子へつかまつた。

「この屋敷の奥かどこかに、まだ誰か人がいやしねえか」

「イイエ誰もいないようだね……どこの部屋も真つ暗だし、第一鼠ねずみがいないのは、食い物なしの証拠だから、時々、旅川たびがわ周馬しゅうまが帰ってくるくらいなものに違いない」

「おかしいなア……？ たしかに、お千絵様という、前の世阿弥よあみ様の御息女が、ここに押し込められているという話なんだが」

「アアその御息女と私を間違えて呼んだのだね。お綱もはすっぱな姿を見せないと、これでも武家のお娘様に買いかぶられるのかしら」

「どうだろう、お綱さん」

「なに？」

「お前の相談はまだ聞いていねえが、この万吉が、命にかけてもきつとひきうけるから、現在俺の弱っている一つの大事へ、ウンと片肌かたはだをぬいでくれないか」

「ほんとにかい」

気味の悪いほど真味しんみな顔色で、お綱がトンと肘掛ひじかけへ身を凭もたせてきたので、万吉は目の前へタラリと下がった被布ひふの色地をみつめながら、ちよつと後の言葉を絶句した。

彼の推量では、お綱の頼みごとを、奉行所筋のことか、手先仲間の扱い事か、くらいに考えていたのである。

まさか、のりづきげんのじょう法月弦之丞からに絡まる、だて伊達の女の初心うぶな恋とは——露ほども気がつかかなかつた。

彼が、お綱をここで利用しようとしたのは賢明だが、この時、フイと頼みごとの交換をした一事のため、後々、万吉がどれほどの艱難かんなん苦勞をし、どれほど骨を削りけず髓ずいを抉えくられる原因となつたか知れない。

これが近世かたぎ人氣質なら、頼んだことはやらしておいて、頼まれたことはケロリと忘れてしまうだろうが、そうでない時代、また、そうでない気性の万吉。

「誰が嘘をいうものですか」

キツパリと言つてしまった。

お綱は、ほつと嬉しそうな顔をする。

江戸へ帰つて以来、いよいよはかなきものと悩んでいた、弦之丞への接近へ、いちぢる一縷の望みがつな繋がれて——。

「話してごらん、万吉さん」と、吾から頼まれたがる。

「ほかじやねえが、お前が懇意こんいなのは何より倖しあわせ。旅川周馬のやつを欺だまして、お千絵様をこの屋敷から誘い出してくれねえか」

「いいとも」

一も二もなくのみ込んだ。と——お綱がフイと眼をそらし、ジツと神経を耳に澄ます様子。  
子。

悪い所へ、旅川周馬が戻ってきたのではないか、その時、塀へいの向うに忍びやかに、チャラリ、チャラリ……と雪踏せったの音。

「周馬だろう！」

万吉は、ペタリと羽目板へ背中をつけてしまった。

そして、逃げ口を探めくするような眼配めくばりして、

「ちえツ、悪い所へ帰けえってきやがった」

「そうじゃないよ……」お綱は少し身を退ひいて、半分窓障子の蔭ひに隠れながら、

「あの足音は別な者らしい……」

「そうですか」と、ホツとしたらしい首をもたげて、「まだ一言話ひとことし残りがあるんです。

それは、幾ら周馬に押し込められているお千絵様でも、ただ、屋敷から逃げだせといったところで、お綱さんを疑って、出る気きづかいはございませぬ」

「それは大きにもつともだね」

「ですから、こういつておくんなさい。——近いうちに法月様が江戸へきて、ぜひいろいろなご相談がある、それには旅川周馬なんて、亀の子だか泥すっぱん亀だか分らねえ奴の屋敷では工合が悪い——と、ようがすか」

「才才、それじゃ何かい、弦之丞様もお近いうちに」

「へえ、わつしの後から来る筈なんです」

「まア……」

牡丹ぼたんが花を開き切つたように、お綱の顔が明るく笑つた。

「いいよ、いいよ。お千絵様とかいうお女ひと、きつと、私が周馬をうまく欺だまして、誘いだして上げるから」

「じゃ、吉報は妻恋へ」

「アア、四、五日うちに聞きにおいで」

「ありがとう！」

と万吉は、八ツ手の葉蔭から、もう一度お綱へ頭を下げて、前の穴からズルズルと堀の外へ這いだした。ヒューツと寒い空からかぜ風が目に砂を入れて行った。

堀の穴から出てみると、もう夕暮に近そうだ。

渡世道具のてっぽうびる。チャンとそこに待っていた。

箆もし人間なれば、怒っている。

「エエ寒い」

すぐ水ツばな凍すすを啜すすったのは、目明し万吉、屑屋に早変りの心支度が、自然にそうさせたものなのだ。膝たもとや袂たもとの土を払って、鉄砲箆を斜めにかつき、

「屑ウーイ」

濁だみ声を淋しくひいて、二足三足あるきだしたのである。すると——すぐ。

万吉は水でも足へ掛けられたように、ハツと驚いて道を避けた。

墨すみ洩しぶを塗った黒堀へ、一人の男、守宮やもりのように貼りついて、じつと、横目でこつちを

睨にらんでいる。

向う側を廻りながら、万吉もグイと横目で睨んだ……。

黒縮緬くろぢりめんの頭巾、鉄漿染おはぐろぞめの羽織。

黒い塀の所へ黒い人間が、ジツと立っていたのだから、ウツカリ気がつかなくつたのも当然で、茶柄ちやつかの大小、銀鑑ぎんこじり、骨太だがスラリとして、鮫緒さめおの雪踏せつたをはいている背せかっ恰好こうこう。

お 十夜孫兵衛じゆうやまごべえ！

きやつだ！ まぎれもなき十夜頭巾。

——野郎、どうしてこの江戸表へ来たのかしら？ と万吉、鋭い眼をくれながら、ソロリ、ソロリ、と草履を摺すつて廻ると、お十夜もまた同じ気構え、同じ敵意。

岡ツ引きめ。

来おつたナ、命を捨てに。

どうしても、おれの差している助広すけひろの錆さびになれと、三世相ぜそうに書いてあるような奴だ。大阪以来ここしばらく、そぼろ助広にもうまい生血いきちを舐なめさせない。

斬ツてやろうか！ バツサリと。

「だが待てよ……ここは俺にや大事な瀬戸際せとぎわだ。せつかく今日、お綱を見かけてこれまで突きとめてきたものを、また関の山の時のように、とち狂われちゃ堪らねえ。まア、向うでそしらぬ顔をするなら、こつちも横を向いていよう」

こういう腹で見ているのだ。

万吉は腕がムズムズしてきた。

彼の心もまた叫ぶ。

けだもの  
獣め！

見ていろよ。見ていろよ。

ほうえんりゆう 方円流 二丈の捕縄が、今に、てめえの喉首をお見舞い申して、その五体を俵ぐ

くりに締めあげるぞ。

ああ、腕が唸って堪らねえ。

だが、当分は見遁してやら。おれにや別の大望があるからよ。けッ！ それさえなけり

や、汝なんぞ、半日だッてこの人間界へおくもんけえッ！

とは思いながら——思わず十手の柄を握ってブルブルツとふるえた。

殺気を感じて、お十夜の手も、雷光のように刀の柄へ飛ぶ。

あわや！ とみえた。

と。堀の中から、お綱であろう、周馬を待つ間の退屈しのぎに、探し出した三味線の糸をなおして、菌八節か隆達か、こッそりと爪で気まぐれな水調子を洩らしている。

水調子の三味の音が、フツと万吉と孫兵衛の殺気を消して、二人を理性に返らせた。殊に万吉は、

「大事な体だ、おれの体は」

一八郎の訓戒くんがいを思いだし、目をつぶるように気を持って、バラバラツと、早足に駈けだしてしまった。

駈ける背中を凧こがらしが吹き掻すくつて、てっぼうせりの紙屑せりを、蝶か千鳥かと、黄昏たそがれの空へ吹き散らした。やがて高く舞ったのが、どこかの屋敷の屋根瓦やねがわらへ、気永にヒラ——と白く落ちてくる。

一方は、お十夜孫兵衛。

相変らずりゆうとして、縮緬ちりめんぞツきの懐ふところ手だ。それは万吉とあべこべのほうへ、黒塀に添って歩きだした。歩きださぬときやつつの眼が、またうるさくつけてくるだろうと、それをまぎらす足どりである。だから、いたって悠々としたもの、雪踏せったの裏金うらがねも鳴らぬ程に。

ここに、お十夜の姿をみるのは、大津以来のことであるが、困れば、相変らず持病の辻

斬りを稼ぐとみえて、身装持物、穿物に至るまで、どうしてなかなかこつている。

帯も流行の伝九郎好み、羽織の紐とておろそかではない。だいで江戸ふうにかぶれたところがある。お綱好みの迎合をやらかし、これでお綱が参らなければ、また一工夫という腹だろうが、さりとはお十夜、どこまで根のいい男だろう。

しかしながら孫兵衛自身は、決してさまで精根を費やしている様子もなく、むしろ、精根のやり場に困っている姿だ。

そうだろう、あの好色なお十夜が、お綱を見てから禁慾同然、ボロ買いをせず辻斬りも無駄にはせず、かつ、職業というものがない。すべての精と力と時間とを、お綱を手に入れることだけに懸っている。無論、妻恋にあるお綱の家も、執念くうかがっていたのであるが、遂に今日までいい折がなかった。

そのうちに、お綱が時々、挿花の外稽古に出るような姿をして、紀州屋敷の仲間部屋に、賭博ごとをしに行くという話。今日も、紫被布を着たその女が来ていると聞いて、お十夜はただちに向いて行つた。

ところが、その日お綱に酷い落ち目が続いたため、金の工面をしに行くといつて帰つてしまつた、という後であつた。その金の工面の行き先を糺すと、同じく、ここへしばしば

来たことのある甲賀組の旅川周馬。お綱が前に貸しがあるので、今日はどうでも取つてくるといつて出たから、あの女のことだ、多分、居催促いざいそくをしているだろう。——こういう道筋を辿たどつて、お十夜孫兵衛、ここへゆらりと現れたものである。

そこで様子をうかがえば、お綱はたしかにこの荒屋敷あれやしきの中にいる。さつき、チラと洩れてきた爪弾つまびきの音ねでも知れる。だが、旅川周馬とかいう奴、一体留守なのか、いるのだろうか。留守とすればいい都合だがな……と孫兵衛は、獐どうもう猛もうな猫が鶏かひの籠かごを巡るように、心の爪を研とぎ澄とました。

そして、いつか懐ふところ手てのまま、広い屋敷の外廓まわを、ブラブラ一週まわり廻まわつてしまう。

さて、ヤツぱり妙みょうさく策さくもない。

自体、はつきりと、女のほうからご免をこうむられているお十夜だ。どう懐手ふところをしてみたところで、妙案のある筈はずもなし、にわかには、お綱の心を惹ひく手段しゅげんのあろう理由わけもない。

だがお十夜は、ないとは決して考えていない。あると固く信じている。まだまだお綱をなびかせる方法は山ほどある！ 金かねずく。腕うでずく。根気ねきずく。あるいは脅おどし。あるいはホロりとさせる泣き落し。でなければ迫害わいせつだ、呪のろい廻まわす助広すけひろだ。

「ふうん……いくらでもあるじゃねえか」

独り語を洩らした孫兵衛、ひよいと気がついてみると、いつかグルリと廻つて表門の前に来ていた。

「旅川周馬」という門札は掛かっていたが、草茫々として無住寺のような寂寞さ。

ドンと一つ押してみたが、門も潜戸も開く様子がない。お綱はどこから入ったか知らぬが、孫兵衛、縮緬ぞツきの風采で、塀の中からは潜りかねた。

折からあたりもたそがれてきたし、人の見る眼もない様子なので、彼は門前の捨て石を足がかりとし、塀の見越へ片手をかけて、ヒラリと上へ攀じ登った。

そして。

ポンと囲いの中へ、身軽に跳び下りようとすると、疾走してきた人影が、

「待てッ」

と、お十夜の片足を捕つて、ズルツ——と外へ引きずり下ろしてしまった。

驚くまに、お十夜の体、何者かに足を取られて、ズルツと、塀の上から這り落ちてしまった。

「こやつッ」

と、跳びかかかってきた男は、小泥棒でもあしらうように、ムズと孫兵衛の襟えりがみを引つつかむ。

好きにつかませておいて、お十夜は、ゆるりと右の足を前へ出し、暗い地面を爪つまさき先で探っていたかと思うと、脱げていた雪踏に足を突ツこんで、固くはきなおした。

いかにも凶々しい落ちつきよう。そして、ギラリと凄うわめい上目を射た。

己おのれの襟えりがみをつかんでいるのは、二十七、八の小男であった。若い侍のくせに、髪うはつを総そ髪にして後ろへ垂れ、イヤにもつたいぶつた風采ふうさい。ハハア、こいつだな、旅川周馬と  
いう男は——と孫兵衛、わざと力も出さずにいる。

丹石たんせき流りゅうの、据物すえもの斬りの達人、お十夜孫兵衛の襟えりがみをとって、どう料理する気か。  
こいつは面白い、一つ、彼の好きに任せておいて、周馬の腕をみてやろうと、お十夜は、おとなしく身を屈かがませて様子を見た。

さて、あぶない話になった。

周馬は孫兵衛の襟えりがみをつかんでいるが、右手めでが使えず。孫兵衛は、相手に襟を取られているが、右手めでは早くも助広の柄つかを握つかって、胴たね払い！ 横一文字の抜打ちを気構えている。  
この竦すくみあいはいはあきらかにお十夜の利だ。

旅川周馬なるものが、かりにも剣道に眼があるなら、今は危険な瀬戸際と知るところである。襟がみを離して悪し、引いて悪し、押して悪し、どう行っても変る途端に抜けてくる。胴払いの殺剣をのがれて抜きあわせる工夫はない。

「はッはッはははは」

不意に笑いだしたのは周馬である。

何の気だか分らないが、また、

「はははは……」と笑いつづけ、かつ、笑いながら手を離して、いかにも軽快な言葉づかい、

「いや、これはこれは」といったものである。

「お見うけ申すところ、どなたかは知らぬが、ご風采も賤しからぬ様子。まさか、空巢狙いでござるまい。何で拙者の屋敷へ、無断でお踏みこみなさるか、仔細がござろう、それをお聞かせ願いたい」

こう真面目になられると孫兵衛も弱った。

「いや……」と襟を掻き合せながら、「武士にあるまじき無作法をして、慇懃な武士扱いをなされては、なんと面目もない次第で」

「いやいや、拙者は常に外出勝そとでち、事情によってはお咎とがめも致すまい。何かこのほうの屋敷内に、急な御用事でもありませんかな」

若いけれど旅川周馬、総髪で納まっているだけに、なかなか能弁で如才がない。お十夜の腕と殺念の燃えた気ぶりを、巧みにかわした上、こういいながら、おもむろに相手の真意を讀もうとする眼まなざし。ここに猫をかぶった悪玉と悪玉とが、双方、微妙な腹探りをやりだした。

「されば」

と孫兵衛、まことに神妙な様子でいう。

「実は手前の女房が、お屋敷のうちにおりますので、それを訪ねてまいりました」

「ほほう……これは異いなことを」

旅川周馬、いかにも恍とぼ呆けた返辞をして、

「そこもとの女房といわつしやるのは？」

「貴殿は前からご承知のある筈。見返りお綱と申す女で……。いや、まことにお恥かしいわがまま者。無断で国表を出しゅっぱん奔して、この江戸表に遊び暮らしているというのを聞き、はるばる尋ねてまいりましたような訳……。ところが、今日、何かそこもとに用事があつ

て、昼からお屋敷内で待つているとか承ります。はなはだ恐れ入りますが、ここへ呼び出していただきたいものでござるが」

「やあ、ではお綱が来ておりますか」

「たしかに、中にいる様子」

「これは困った」

と周馬は頭をかいて、

「あのお綱には、少し借財がござってな。それを取りに来ているのでござろう」

「いや、借<sup>かり</sup>貸<sup>かし</sup>などのことはどうでも。とにかくちよつと、お綱を呼んで下さらぬか」

「承知いたしました。して貴公のお名前は？」

「拙者は」グツと詰まったが孫兵衛、「藤田三四郎と申す者……」口から出まかせにいつてみた。

「アア藤田殿で？ 心得ました、しばらくそこでお待ち願いたい」

いたつて気軽に領<sup>うなず</sup>いた旅川周馬、腰から鍵<sup>かぎ</sup>をだして潜<sup>くぐ</sup>り門を開け、中へ入つてお十夜にちよつと笑つてみせたが、門を閉めてスウとどこかへ消えてしまうと、半刻<sup>ととき</sup>、一刻、二刻あまり、待てど暮らせどそれツきり出てこない。

## 鏡の裏

いくら待つても出てこない筈。旅川周馬は荒屋敷の庭を素通りに裏門の戸をコツソリ開けて、どこともなく立ち去ってしまった。

家の中に待ちうけているお綱と、門の外に待ちぼけているお十夜とを捨てて、彼は、その夜も翌日も、とうとう、この荒屋敷へ帰つてこなかった。

お十夜が、それと知った時には、既に喧嘩相手の周馬がそこにいない時で、さすがの孫兵衛も、もう一度塀へいを躍り越えてみる勇氣も失せうせ、また後日の策を描いて、その夜はむなしく引き揚げて行つた。

がしかし、お綱はすっかり腰をすえて、その屋敷を当分の住居のように心得ている。

女だけに居い催促さいそくも要領がよい。一間まどころをこぎれいに掃除して、納戸なんどの隅から見つけてきた置炬燵おきこたつ、赤い友禪の蒲団ふとんをかけてその中にうずくまり、側には持ち出した草双紙を、より取り勝手に見散らかしていた。

なるほど、居催促もこういう按配あんばいに行けば、三日はおろか一月が百日でも続くわけ。

ただ不便なのは食事だが、これもいつか当座だけの用意を求めてきたらしく、呉須ごすの急きゆう須すに茶を入れて、栗くり饅まん頭じゆうまで添えたのが、読み本の側そばにおいてある。

緋ひ友ゆう禅ぜんの炬燵蒲団きゆうとぼたんに、草双紙くさふしと三味線さんまいせんに、玉露ぎよくろと栗饅頭くりまんじゆう。そこに蔵前風くらまえふうな丸鬻まるまげの美女めいこが、冬の陽ひざしを戸閉とぎしていたら、誰たれが目めにも、この屋敷やしきの若奥わかく様さまか或あるいはお妾めかけ様さま、

——まさかに掬す摸りの見返みかへりが居い催促そそめとは見えなからう。

だが、華はやかなお側そばめ女によ様の生活せいかつにも、人知ひとしれない苦く勞らうがあるごとく、今いまのお綱つなの腹はらの中なかも、なかなかのんきな置お炬燵きゆうとではない。

旅川周馬りくせんしうまが帰かへつてきたら、どういてう手段てだてで、お千ち絵え様の居い所ところを聞きき出でそうか、というこことも一つの心配しんぱいなら、また、今日けふあたりは万吉まんきちが、妻恋つまこいの方かたへ吉報きちほうを聞ききに来きていやしまいいか、というのも氣きが氣きではない苦く勞らうである。

そうかと思おもうと、お綱つなはまた、お伽草子とぎぞうしの拾ひろい読よみに、はかない女によの恋物語こいものごとなどを見み出でして、弦げん之の丞のじようのここに思おもいくらべ、思おもわず知しらず一日いちにちを暮くらしてしまいうここもある。

——こうしてここの空屋敷あきやしきに、七日しちにちばかり落おちついてしまいった。

八日やっぴちとたつても、まだ旅川周馬りくせんしうまは帰かへつてここない。

「どうしたののだらう？」

お綱も少しあきあきしてきた。

「こんなにつまで戻らないところをみると、この屋敷に門標は打ってあるが、ここには住んでいないのかしら？」とも考えられてくるのである。

「第一に、お千絵様——」お綱はそれをしきりに思索した、「万吉はああいうけれど、この屋敷のどこにもいる気配はない。七日の間に奥の座敷から女中部屋まで、くまなく探していないのだから、きつと、周馬のやつがどこかほかへお千絵様の身を隠し、そこへ行っているに違いない……。とすると、根よくここにいるのも、何だかばかばかしい話だが」あしたは一度妻恋の家へ帰ろうと思った。

そして、万吉にこの事を話そう。

この先とも、お千絵様の居所を尋ねるについて、自分も、どこまで骨身を砕くかわりに、弦之丞様のこともあの人に頼んでおこう。

そう思いながら、お綱はいつか、炬燵こたつの上に横顔をのせて、トロトロとうたた寝していった。

お綱は何を夢みるのであろうか、寝顔に笑くぼがういている。その耳には、川かわ長の座敷で聞いた一節切ひとよぎり、その眼には打出ヶ浜の月の色がみえるのであろう。

このあたりは、みな軒のきのかけ離れた隠密屋敷。ましてや広い家の中には、お綱のほかに  
 人気ひとけとてなく、まだ宵らしいが、うたた寝をさますカタンという物音もしない。

と——氷へ物の辻すべつたように、部屋の襖ふすまが音なく開いた。

又ツと立った男がある。

行燈あんどんの明りを、顎あごから逆にうけたのが怖ろしい容貌ようぼうにみえた。しばらく、黙然とし

て、うたた寝の美しい寝顔を見下ろしている……。

それはお十夜孫兵衛だった。

この間は、周馬のためにさえぎられたが、今夜は、念入りに忍びこんで来たものとみえる。

「お綱！」

と呼ぼうとしたが、孫兵衛は、この美しい寝顔をさましてしまうのは惜しいと思った。

関の山の月見草の崖に、うつとりと寝転んでいた時のお綱も凄艶せいえんにみえたが、緋の友  
 禅に寝顔をつけて、埋うずみ火のほてりに上気している今のお綱は、お十夜の眼を眩惑げんわくする  
 にありあまる濃艶のうえんさである。

孫兵衛は、静かに坐つて、蒲団ふとんの中へ手を入れる。

そして、お綱の髪の毛の香をかぐように、炬燵の縁へ顎をのせた。

炬燵に蒸れる伽羅油の匂いに、孫兵衛、もう恍惚となつて、

「どんなことがあるうとも、おそらく、俺には、この女だけは殺し得まい……」

十夜頭中にくるんだ顔を、炬燵にのせ、こんなことを思うらしい。

そして、頬へ冷たく触ってきたお綱の鬘のほつれ毛を、一筋、自分の唇にくわえながら、目は、ほれぼれと、寝伸びた女の襟あしに燃えついていた。

と、お綱は。

うたた寝の耳へ、人の呼吸が冷たくふれてきたのに、

「おや」

パチリと、棗形に眼を見ひらいた。

そののみか、炬燵の中の自分の手に、誰かの大きな掌が重なっていたのに驚いて、思わず蒲団から飛び離れた。

「驚くことはなからう、お十夜だ」

「アア……」とお綱は後ろへ手を支えて、黒猫に似た孫兵衛の姿をみつめながら、

「……とうとうここまでやってきたね」

さすがに、胸は少し動悸を打ったが、語気にひるみは見せなかった。

「なんで来ずにいるものか」と孫兵衛は、凄くニヤリとしてみせながら、

「てめえが江戸へ来れば江戸表へ、北へ逃げれば北の果てまで、我を折って俺の心に従うまで、付きまとしてやるということは、オオ、いつか関の明神でも、たしかに言い渡してある筈だ」

「ご苦労さまだねエ」

お綱はツンと横を向いて、

「道理でこの間うちから、妻恋坂の私の家やこの辺を、きぎな雪踏がチャラついていると思つたら……」

「じやうすうすは、おれの真意を感じていたろうに、ずいぶんてめえも薄情けな、血の冷てえ女だの」

「ホ、ホ、ホ……」お綱は鼻であしらうように、

「うす情けだなんていう言葉は、お十夜さん、お前の柄にはまらない文句だよ。私の血の冷たいのは生れつき——そう育ってきたのだからしかたがないやね。嫌いな者には氷のよ

う、その代りにまた、好きな人へは火よりも熱い心になるのさ」

「そんな熱に浮かされてる年頃には、どこの女も、みんなてめえと似たようなたわごとをいつてるものなのさ。それがだんだん、世の中を知り、苦労の味を噛みしめると、実意のある男を嫌ったことが後じやもつたいなくなるものだ」

「ご親切さま。はるばる上<sup>かみがた</sup>方くんだりから、そんな月並をいいに来るのは、まったく、お前さんでもなければできない芸だよ」

「おれもいつまで血なまぐさい、辻斬り稼<sup>かせ</sup>ぎをしているのは嫌だし、お前も、いつまで指先の危ねえ世渡りでもなかるうが。のうお綱、ここらで一つ気を締めて、二人で大きな仕事を最後に、堅気な世帯でも持とうじやねえか」

「ほんとに、私もいつもそう思いますよ……。だがね、お十夜さん、お前とだけは嫌ですとさ」

「なぜ!?!」

「だって、それは気持だもの」

「じゃ、誰かほかに思う男が」

「お綱にもあるんですよ」

「ウム、誰だ、そいつは」

「聞きたいの……」

「才、聞いておこう！」と孫兵衛。

助広の鯉口をつかんで、凄<sup>けつ</sup>い血相、一膝前へすりだしてきた。

お綱は、冷えた茶をグツとすすつて、苦<sup>にが</sup>つぽい笑<sup>え</sup>みでお十夜の劍幕を斜めに冷視した。

こうした脅迫をうければうけるほど、お綱の意地は捻<sup>ねじ</sup>けるばかりで、むしろ、紅<sup>こう</sup>舌<sup>ぜつ</sup>に

男をのた打たせ、思うさま冷然と擲<sup>や</sup>擲<sup>ゆ</sup>してやりたいような度胸まですわってくる。

「それは……いつておいたほうがいいかも知れない。そうすれば、お前さんも、自分のし

ていることが、どんな無駄だか、はつきり分ってくるだろうから」

「そんなことはどうでもいい！ その男の名を聞こう。それをいえ」

「私の胸に誓っている人は、天涯無住の御浪人でね……」

「ウム、してそいつは」と、お綱の擲<sup>や</sup>擲<sup>ゆ</sup>がやや深刻にすぎたので、孫兵衛、左につかむ助

広の鐐<sup>つよ</sup>をブルとふるわせ、嗔<sup>しん</sup>恚<sup>い</sup>の炎を燃えたさせる。

「……法月弦之丞<sup>のりつきげんのじょう</sup>というお方。お十夜さん、私に指でもさす気なら、すみませんが、

その人に断<sup>ことわ</sup>つてきて下さいよ」

「よし！ おれもお十夜孫兵衛だ」

「どうするの」

「よくも恥をかかせたな！」ジリジリと寄つてきたので、さては抜き浴びせるのかと思うと、孫兵衛は、ふツ……と行燈あんどんを吹き消してしまった。

部屋の中は真ツ暗となった……。

すばやく、行燈を吹き消したお十夜の意は、問わでものこと。

お綱はトンと身を退ひいた。

が——咄嗟とつぎに立とうとした体は裾すその重みと、瀬戸物へつまずいて、よろりと、元の所へ仆れてしまった。

「おい、どこへ行く気だ」

憎々しいお十夜の嘲り顔が、闇にも目に見えるような気がして、お綱はまたカツとなつた声走こわばしりで、

「お離しよ、わたしの裾を！」

どんと、対手の胸あいてを突いたのが悪く、かえつて、孫兵衛のために、そのきき腕をつかま

れた上、触るるも忌わしい膝の上へ捻じつけられて、あたら丸鬚の根を揉み壊されてしまった。

「お綱ツ、情の強いのも程にしろよ」

「わたしには、弦之丞様という、心に誓った人があるというのに、まだそんなくどいことを」

「おう、恋仇があるときけば、なおさら俺の根性として、てめえを弦之丞のものにさせねえのだ」

「ええ、誰が、お前なんぞに！……」腕に腕を絡んでもぎ離そうとしたけれど、孫兵衛の膝はビクともせず折り敷いて、なおかつ、女の足搔き悶える態を心の奥で陶醉している。

「喚け喚け、いくらでもジタバタいたせ。ここは関の明神と違って、何とてめえが騒いだところが、無住な伽藍も同じ空屋敷……、旅川周馬のいねえうちは、この孫兵衛と二人よりほかに、誰も出てくる者はいない場所だ。は、は、は、は……お綱！　もういい加減に我を折れよ」

ひしと抱きすくめた孫兵衛、齒を食いしぼるお綱の顔を覗いて、その頬へ自分の頬をす

りつけて行くこうとする。

お綱は、苦しまぎれに顔をそむけて、すり寄せてきた十夜頭巾の端に、ムズと爪を立てたのである。

ズル——とそれが脱げそうになる。

と、孫兵衛は、あたかも、忘れていた神経を、針の先で、突かれたように、ハツと、両手で頭巾を抑えた。

その間髪かんはつに、お綱はさつ——と立ち上がった。

「うぬ！」

と追いかかる孫兵衛、浅ましい獣心の沸たぎり狂うままに、真つ暗な空屋敷の間ごと間ごとを追い廻して、今は、眼にお綱よりほかの何ものもない。

お綱はまた必死に逃げ廻った。

けれど、運の悪いことには、このダダツ広い屋敷は、昼でもすべての戸が閉めきつてあったため、外へは一步も逃げだせないのだ。ただ、お綱のかすかな強味は、万吉に頼まれて、お千絵様の居所を探した時、念のため、一間まのこらず歩いてあつたし、押入れ納戸なんどの勝手まで覗いているので、茶の間まから客間、中廊下から奥の間と、ほどけた帯を巻くひま

もなく、尾長鳥が尾を曳くように駈け廻った。

だが、かかる場合、逃げれば逃げるほど、お十夜の執念は増すばかり、お綱を傷ついた色鳥いろどりと見れば、彼は情炎の獵犬に等しい。

今しも、だんだんに追いつめてきた奥廊下。

鉤かぎの手に曲るところを、そのままそれればまたもとの茶の間まあたりへ入るのだが、そこへ行つては、いよいよ袋詰めかぎにされてしまう。

で、一方をまつすぐ走つたのである。

そこは九間けんの橋廊下。渡るとすぐに部屋がある。右は書院、左は居間、昔、この屋敷の主人あるじ、甲賀世阿弥よあみのいた頃は、ここを居所きよしょと定めていたものらしく、すべて木口もすっかりとした別棟である。

お綱はそこへ逃げてきた。

すぐに書院を開けようとした。ところが——開かない！

はツと思つて、居間の杉戸へ手をかけた。もう、お十夜の影、バタバタツと橋廊下まで追いついてきた。

「ああ！ どうしよう」

お綱は絶望の声を洩らした。

そこもやつぱり開かないのであった。

不思議な！ と、思う余裕はなかつたろうが、いつか、ここをあらためた時には、たしかに、どツちの部屋も開いて、内から錠を下ろせるようになっていた筈——？

「待てツ、お綱！」

悪魔の爪が襟もとへさわった。お綱はそれを潜り抜けた。だが、もう廊下はドン詰り！是非がない。お綱はそこで振りかえった。猫を噛むの窮鼠となつて、帯の間から引き抜いたヒ首を逆手にもち、寄らば、お十夜にズタズタに斬られるまでも、こつちも、相手のどこかしらへ、一突き刺し貫いてやろうという女の一念。

紅をさいて吊りあがつた眈、鬚も笄もどこかへ落ちて、ありあまるお綱の黒髪、妖艶といおうか凄美といおうか、バラリと肩へ流れている。

お十夜の血は狂いに狂った。意馬心猿——という相である。

浅ましや孫兵衛。その廊下のつきあたりまで、お綱を追いつめてきたかと思うと、いきなり、跳びついてゆこうとした。

飢えた狼が、鶏へかかったように。

と——かれの血眼を、キラリとさえぎったものがある。お綱が、死をきわめて、待ちかまえていたヒ首の色！ 寄らば、という気ぐみが、その切ツ尖に張りつめていた。

はつと、お十夜は気をすくめた。

つり上がったお綱の眼と、月形の刃が、こんどはあべこべに、お十夜のほうへ、一、二寸ずつ迫ってくる。

前にもいったように、お綱のうしろは廊下の行き詰りで、左右は、居間と書院の檜戸だ。逃げようとて逃げられる場所ではない。お綱の身は、今こそ、お十夜の爪にかきむしられるか、そのヒ首をもぎとられて、かれに心臓を刺されるか、途は二つを出ないのである。

死ぬのがましか。どうあろうと、助かるのがまだしもか。誰が！ こんな男にゆるすものか。お綱はそう思うほど強くなった。

けれど孫兵衛は、ひとかどの男さえ、齒の立たない丹石流の達人だ。なんで、女のヒ首に、身を掠らせるような隙がある。獣情と殺気に、らんらんと燃える眼ざしをして、ジリジリ……となおも彼女の手元へよつてきた。

ええ、口惜しい！

お綱は、唇をかみしめ、匕首の切ツ尖をブルブルさせた。けれど、ともすると、孫兵衛の体が、それを潜くぐつてきそうになるので、一足退のき、二足さがり、いよいよ袋廊下の壁ぎわまで攻めつけられてしまった。

「もうだめだ！」

心の奥で叫びをあげた。と一緒に、彼女の心は意気地なく萎なえかけたが、ふとみると、お十夜は、何か物の怪ものけにでも逢ったように、一、二間ほど前で、急にじつとなつたまま、寄りついてこなくなった。

なぜ！ というに。

お綱のうしろから、もの凄こわい顔をした、黒頭巾の男が、ぬツと、彼に見えたから――

「あつ……」

お十夜の情じょうけつ血けつがいつぺんに冷たくなつた。残つたのは兇暴な殺気だけだ。彼は、女のうしろから、ヌツと覗のぞいた男を、そも、誰かと、五体を硬こわばらしている……。

お綱には、うしろをかえりみる余裕がなかつた。

よもや、自分のうしろから、そんな男が見えたために、対あいて手が二の足をふんだとは知ら

ない。ただ一念に、あいくち 匕首を逆手にかまえ、最後の心支度をして待った。

刻……一刻、穴のような闇に、二人の、息づかいだけが数えられる。

そのうちに、お十夜が、

「おう……」とかすかな唸うめきをもらした。

かれが、脅おびやかされた向うの男は、どこからか、きわめてほのかにさす光線で、自分のかげを自分の目に映した一面の姿見なのであった。はくさいもの 船載物であろう、幅二尺七、八寸、長さ五尺ほどの玻ギヤマン璃の鏡——、それが、行きつまりの壁に、戸のようにはめこんであったのだ。

闇に馴れた目で、それを知ると孫兵衛は、なんのこったといわんばかりの様子、前にもまして、猛然と、ふたたび、お綱へ迫ってきた。

途端に、お綱。

「ちくしょうツ！」

命がけの匕首をふるって、かれの脾腹ひばらを狙ってきた。

「ええ、おうじょうぎわ 往生際の悪い女だツ」

孫兵衛は苦もなく身を避けた。そして、お綱の手くびをつかみ止め、手強てつよく捻ねじり曲まげよ

うとする。

「ちイツ」と、歯を食いしばるお綱の息！ 振り動かすヒ首と、お十夜の手が、同じ角度を幾たびも閃めいた。

「あつ痛！」

不意に小指を咬まれたので、孫兵衛は女の胸をドンと突き放した。

ヨロヨロとおおむけになったお綱は、思わず、うしろの鏡へ手をついた。——とたんに、壁はクルリと一転して、あつというまにお綱の体は、車返りにはねこまれて姿を消し、孫兵衛の前には、ただ冷たい鏡だけが立っていた。

掌のうちの玉を見失つて、あツ気にとられた孫兵衛は、

「や？ 龕燈返し——」

泳ぐように壁ぎわへきて、その大鏡面をグンと押してみた。

すると、鏡は自然に壁を離れて、くると廻る仕掛になっている。

孫兵衛も、うツかりすると、その中へはねこまれそうになったが、はつと驚いて身を退いた。

がんどう返しと呼ぶ非常口は、武家屋敷の主人の居間近くには、必ずどこかに伏せられ  
 であると聞いたが、当時、珍しいなんばんわた南蛮渡りの大鏡を壁にはめこんで、そこから一体どこ  
 へつづいているのだろう。

「うぬ、ここまで追いつめて、逃がして堪るものか」

彼は、も一度それへ手をかけた。すると、

「あぶのうござるぞ」

不意に後ろで声が出た。

同時に、なれなれしく肩に手をかけて、

「はははは。うツかりその鏡の裏を覗のぞき召さるな。鏡の裏は奈落ならくの闇、ドーンとはねこま  
 れたが最後でござるぞ」

嘲笑をふくんでいう者がある。あつ、誰かと驚いて、孫兵衛、ヒョイとふりかえってみ  
 ると、例の総髪あはしの若侍、旅川周馬という男だ。

周馬は、とにかく屋敷の主あるしである。どこから出てこようと不審ではないが、お十夜はさ  
 すがにちよつと戸まどいをして、咄嗟とつきの言葉が見つからない。

「孫兵衛殿」

かれはすでにお十夜の名まで知っていた。ニヤリと皮肉な笑い方をして、

「とうとう堀へをのり越えてまいられたな。なかなかお忍びがお上手なもので、周馬感服しましたわい。それはいいが、鏡の裏へ呑まれたお綱、ありやそこもの妻だと仰せられたが、嘘でござろう、分っている。はははは、お互いにな、強情な女には手を焼くものでござるて」

何もかも呑みこんでいるような口ぶり、若いくせに、年よりじみた言葉づかいで、さつさと、書院の戸を開けて、スツと中へ入りながら、

「お綱は質しちにとりましたぞ、この周馬がな。ところで、あとのご相談、どういうご希望があらうしやるか、ここで聞こうじやござらぬか」

カチツ、カチツ……と 燧ひうちいし 石をすりながら、書院の中でいっている。やがて、ぼうと灯がついて、あたりへ燻くすんだ灯影が流れてきた。

「お入りなされ、お十夜殿」

いよいよいけない。足許あしもとを見透みすかしている。

孫兵衛も、こいつは少し苦手にがてなやつだと思つた。咎とがめ立てをするとか、いきり立つて斬りかかるとかいう奴は、かれにとつて、まだ扱あしちいいが、いやにねツとりした旅川周馬、

白いのか黒いのか、腹の底が知れないので、しばらく闘しきいをふみかねていた。

「ご遠慮はない、ここは周馬の居間でござる。拙者はどうでもよろしいが、お綱を質に取られたままでは、そこもとの立場として、まさか、このままお帰りになれますまい。受け出すか、お流し召さるか、ご相談があらうというもの。さ、さ、ずっとこちらへ——」

「ウム！」と孫兵衛、余儀なく大きく頷うなずいて、ズツとそこへ引つ提さげ刀で入りこんだ。

「いかにも、お綱を申しうけて帰りたいが、まさか、鏡の裏から屋敷の外へなど、抜け道があるのではあるまいな」

「お案じなさるまい。只今も申したような奈落の闇、逃げてくれればまだよいが、悪くすると、あのまま、息が絶えたかもしれぬ」

「えっ！」

死なしてしまつては玉なしである。お十夜はやや狼ろうばい狽はして、また鏡のところへ立とうとすると、周馬は、人の悪いうすら笑えみを浮かめて、

「したが、まアお待ちなされ、生死のところは、いずれこの周馬が後に見届けてまいるであらう。その前に、そこものご希望を一つ……いやなに、それは何うまでもなかった。つまり、お綱を手に入れたいご一念、問うだけ野暮でござりますな。いや万々ばんばん承知いた

してござる。じゃあ、こんどは一つ、拙者側の注文を申し出よう、それをきいて貰わにやならぬ」

「うむ、お綱を身どもに渡すかわりに……？」

「さよう、貴殿にお頼みがござるので」

「話によつては引きうけよう」

「お嫌いやならば、なアに別に、無理とは申さぬ。ただ、お綱があのまま、ふたたび息を吹つかえさぬだけのこと終るので」

「ま、とにかく、そちらの希望を、承ろう」

孫兵衛をじらしておいて、

「では言しましょう」と、旅川周馬、悪賢い目で、額ひたいごしにお十夜の顔を見つめた。

## 悪玉と悪玉

「それは、つまり……」

と、旅川周馬、

「ほかでもないが、そこもとの得意なものを、お借り申せばよろしいので」

「身どもの得意なものを？」

お十夜は解げしかねた面おももちである。

がんだう返しの穿おとし穴あなに墜おちた、お綱の身しちを質しちにとって、その交換条件に、得意なものをかせとは、一体なんのことかしら？ ……と旅川の顔をみつめ返した。

「さよう」

周馬は悪く落ちついて、

「そこもとのお得意といえは、裏うらがき書かしていうまでもなく、そこにお持ちの助広で」

「うむ？」

「人を殺していただきたいのじや」

「なるほど」と、思わずうなずいてしまったが、孫兵衛はおどろいた。この周馬のやつ、いつのまに、おれの辻斬り稼かせぎをしていることや、刀の銘めいまでみていたのだろうか？

「どうぞござる。ウンと一つ呑みこんでは」

「まず、ゆるりと、考えてみた上にいたそう」

「いかにも、安受け合あひいは頼たのもしくない、どうぞゆるりと、算盤そろばんをとってごらんなさ

るがよい」

「なかなか念入りなお頼みだ」

「どうして、こちらでは、これでも至って、手軽な注文をつけたつもりなので……」と銀ぎんのべのべの煙管きせるをだし、行燈あんどんの灯口ほぐちから、周馬は、すぱりと一服吸いつけながら、

「それをご承知下さるなら、鏡の裏へ落ちこんだお綱の体は、このほうが必ずお渡しいたすであろう。嫌と仰せあらば、それまでのこと、まず物別れとなるよりしかたがありますまい。したがって、お綱の生死、この周馬には責任もなし、或いは、妙な依怙えこじ地になつて、かえつて、女の味方になり、よそへ逃がしてしまいかも知れませんが……とかく人間というやつ、その依怙地えこじのほうへ曲りたがるものでしてな」

独り言ひとりごとのように、そそのかしたり、おびやかしたりするのである。

お十夜のような曲しれもの者を、こう呑んでかかる旅川周馬には、邪智に富んだ一面があつて、たえず、悪心が陰謀的に、また打算的に働く性格をもっている。

それに反して、孫兵衛の質たちは、慄ひょう悍たかんなる一本気で、計画もなく銜てらいもなく、本能にまかせて、悪を悪とも思わずに、なんでもやつてのけようとする先天的なほうであつた。

どっちも物騒きわまる人物だが、周馬を、江戸という都会型の悪党とみるならば、孫兵

衛は、元阿波あわの原土はらしであるところの、野性的な悪党だということが出来る。

この悪玉と悪玉。

妙なはずみで、お綱の体を渡すか渡さぬかの、懸かけ引ひきくらべになってしまった。

けれど、三寸の舌先では、とても孫兵衛は周馬の敵ではない。まるで、さつきから、いやこの間、この屋敷の門前で逢った時から、翻ほん弄ろうされぬいているようなものだ。

「こましやくれた青二才め」

お十夜はむつと癩しやくにさわっていた。

お綱を渡すも渡さぬもあるものか、面倒めんどうくさい、こいつから先に片かたづけて、あの鏡の裏の穴蔵をあらためてみよう。

と——密かに殺気をふくんでいると、周馬はまた、薄うすッぺらな笑い方をして、

「だいぶご熟考でござりますな。ご決断はまだでござるか。はははは……造作ぞうさくもないではござらぬか、辻斬り屋の孫兵衛殿が、一晩暇をつぶせば、それですむので」

「まあ、もう少々考えさせて貰いたい」

じらしてやろうという気と、隙を計る心支度こころじたくとで、孫兵衛は、上眼うわめづかに腕ぐみをしていた。

「さようか、夜が長うござるから、お考えもゆるゆるでよろしかろう。しかし、煎じつめた話が、そこもとの運命は、つまりお綱と似たり寄ったりなもので、この周馬の手に握られてしまったのだ。イヤまったく、偽りのないところじゃ。命と惚れた女がほしいなら、孫兵衛先生、ウンとご承知あるよりほかに行き道はありませんぜ」

いい終るのを待たず、お十夜が、

「えい、生意気なッ！」

とつかみとつた助広の一刀。

脇の下に鑢つばを抱き、サツと抜き打ちに、相手の眉間みけんへ斬りつけると、

「おツと、あぶない！」

と、旅川周馬、手をつかえて身をかまし、煙管きせるの雁首がんくびを青眼せいがんの構えにとつて、

「——なるほど、そいつが丹石流か、これじゃお綱も嫌うだろう、よし給えよ、そんな野暮ぼは……」

腰も浮かさずにひやかした。

冷やかされたので、お十夜の怒気どきは、ムラムラと燃えた。

「周馬！」

と睨<sup>ね</sup>めて、片膝をたて、

「ふざけやがッて！ この孫兵衛を甘くみたな。お綱はもとよりおれの女だ。渡してやるもやらねえもあるものか」

助広の鎬<sup>しのぎ</sup>に、行燈<sup>あんどん</sup>の灯をギラギラとよじらせながら、その切ツ尖<sup>きさき</sup>を、周馬の鼻ツ先へ寄せて行つた。

「——さ、お綱をつれて帰<sup>けえ</sup>るんだから、鏡の裏の穴蔵へ案内しろ！ イヤの応のといやあ真ツ二つだからそう思え」

「冗談いつちやいけない」

煙管を構えて、旅川周馬、五、六寸ほど後<sup>あと</sup>ずさりして、

「そんな刀を引ツこぬいて、こけ脅<sup>おと</sup>しをする貴様の方が、よッほど甘くみている。そりや、腕にかけたら、貴様の方が強いだろう。しかし、ここは甲賀組の墨屋敷<sup>すみやしき</sup>、おまけに悪智にたけた周馬様がお住みの家だ、どんなカラクリがしてあるか、よく四辺<sup>あたり</sup>や足もとを見廻してから、手出しをするならするがいいぞ」

と、いわれたので、お十夜もぎよツとした。

みると周馬の左の手が、いつのまにか、部屋の角すみばしら柱すまばしらに伸びていて、そこにある鈎かぎのようなものへ指をかけている。

「引くぞ、こいつを」

周馬は相手の眼色に、そのうろたえを察しながら、

「床ゆか板いたぐるみ奈落へ行くか、上の天井がズンと落ちてくるか、一つ仕掛けの種明しをやつて見せてもいい。だが、そんなことで命を無駄にするのももつたないじゃないか。ええ、お十夜。まだお互に、これから花も実みも結ぼうという悪党同士だ、そう怖い面つらをしておらずに、周馬の相談に乗るほうが得とく策さくだろう」

「ウーム……」と、さすがな孫兵衛も、やや薄気味わるくなつて、抜いた助広のやり場がなくなつてしまつた形。

いうまでもなく、この部屋には、なにか危険なカラクリ普請ふしんがしてあるのだ。さもなくて、自分の口から、腕ではかなわぬと告白している周馬が、アア落ちつきはらつていられるものではない。

と、周馬は、相手のひるんだ色を、すぐ心に読んできて、その足もとへまた懸かけ合あいをもちだした。

「まず、その刀を退ひいてはどうだ、分の悪い相談ならともかく、この周馬が、貴様に殺してくれと頼むのは、そっちに取つても、遅かれ早かれ、生かしておけぬ奴なのだ……。してみれば、まんざら他人のためばかりじゃない、その上に、ウンといつて手を貸してくれば、お綱を渡そうという条件ではないか。こんな割のいい仕事を振られて、野暮やぼな刀をふり廻すなどとは、さてさて頭の悪い悪党だ」

「ふうム、じゃ何か……。そっちで殺してくれという奴は、俺にとつても仇あだのある人間なのか」

「さよう。二人にとつて、生かしておけぬ男なのだ」

「とうのは……。どうも俺には見当がつかねえ。一体誰だ？」

「実を申すと、この周馬の恋こいがたき 仇たき だな」

「けツ、ばかにするなツ」

「怒るまい——。拙者にとつても恋仇だが、そっちの身にも恋仇にあたるやつ。それは法のの月りづきげん 弦げん 之の 丞じょう！ いくら頭のわるいそこもとでも、この名を忘れてはおるまいが」

「ヤ、弦之丞を？」

「どうかして殺したい！ 手を砕いても、きやつを亡なきものにせねばならぬ」

「ウーム、そうか！ 相手が法月弦之丞なら、この孫兵衛も手を貸してやろう」

「そうだろう、イヤ、そう来なければならぬ筈だ。あいつに息がある間は、一生涯、脅かされていなければならぬ、この周馬と同様に、貴様にとつてもお綱の恋仇、頼まれないでも、急に殺したくなつてきたに違いない」

「そうならそうと、最初から相手の名をいえば、おれだって、こんな刀は抜きやあしねえ」  
と、孫兵衛は助広を鞘に戻して、

「だが、お前の恋仇とは初耳だ。一体、そっちの恨みという事情は……？」

「それは一朝一夕に話せぬが、つまるところ、お千絵という世阿弥の娘も、弦之丞に思いをよせて、あいつに逢うのを一念で待っているのだ」

「そのお千絵に、お前が嫌われているという筋か」

「ちようど、お身がお綱に嫌われているごとく」

「エエ、口が減らねえ。だが、弦之丞という奴は、どこまで女に果報のある奴だろう」

「だから殺してしまうがいい」

「して、今の居所は？」

「あしたは江戸へ着くという所を、たしかに、拙者がつきとめている」

法月弦之丞が江戸へ帰る！

これは、旅川周馬にとつて、まことに、由々しい脅威である。

かれは今、世阿弥の残した秘財と、美しいその息女とに、色慾の二道かけて、さまざまな画策をやりぬいている最中だ。

そのお千絵様はどこにいるか？

その財宝とは何をさすのか？

これはひとり周馬の黒い腹の中にあることで、もとより、お十夜などには、おくびにも洩らす筈がない。

かれはただ、この凄腕のある孫兵衛——丹石流の据物斬りに、妖妙な技をもつお十夜を、うまく利用しようというつもりなのである。

で、この間うちから、ここへ来ているお綱を、孫兵衛がつけ廻しているのも知っていないが、わざとそしらぬ顔をして、すべての様子を察知した上、予定どおり、巧みに孫兵衛を抱きこんでしまった。

しかし。

お十夜とて、一筋縄すしなわでいくしれ者ではない。かれがお綱の口から法月弦之丞という名を洩らされていなかったら、おそらく、周馬の舌も操あやつることがむずかしかった。

ところが、相手という者が、お綱の恋する弦之丞——ときいて、彼の心がにわかになつたのである、すぐに加担かたんする気になつた。

「よし！ おれが殺ばらしてやろう」

その言葉に、多寡たかをくくつた調子が十分にあつた。で、今度は、周馬が大事をとつて、  
「待ちたまえ」

と、かれの暴虎ぼうこの勇を押さえた。

「なんで!!」

「下手へたをやると失敗する。なにせよ法月弦之丞は、夕雲流せきうんの使い手で、江戸の劍客のうちでも鳴らした腕前、さよう……貴公と拙者と二人がかりで、ヤツとどうかと思われるくらいだ」

「ほほう、夕雲流をやるやつか……」これは孫兵衛の初めてしるところだった。イヤ、その人となりのみならず、お十夜は、まだ今日までの間に、弦之丞という者に、面接したことがないのである。

もとより、その腕前が、どれほどなものか、尺度は周馬の話でも分らない。

とにかく、撰りに撰つた悪玉と悪玉とが、この夜、手を結んだのは、弦之丞の身にとつて、怖るべき不幸の兆だ。

「では仲なおりに——」

と、話半ばに、周馬はその部屋から立ち上がって、

「どこかへまいって一杯酌ろう。細かい話や、あしたの手筈は、そこで飲みながらのことと致して」

「だが、待ってくれ」

お十夜は出渋った。

「お綱は一体どうなったんだ？」

「死にはしまい……、ただし、気絶ぐらいはしているかもしれないが」

「じゃ、なんとか手当をしておかなくっちゃ……」

「ご無用ご無用、今にひとりで気がつくであろう。また気がついたところで、逃げられる気づかいのない穴蔵だ」

スタスタと廊下を先に歩きだした。

お十夜の方は、まだ幾らか、お綱に気がかりを残すらしかったが、ぜびなく、周馬についてそこを出る。

玄関へ出るのかと思っていると、そうではなかった。

真つ暗な、奥の間へ入って、床脇とこわきの壁をギーンと押した。壁に蝶ちようつが番がいがついていて開くのである。と、床下へ向つて深く、石の段がおちこんでいる。

二人の影がそこへ消えた。

表構えを釘づけにしてあるとみせて、周馬は、たえずここから出入りしているものらしく、馴れた足で、まっ暗な道を、サツサと先に歩いてゆく。

と。——星がみえ、木の葉が見えて、やがて数十歩で出た所を見廻すと、お茶の水の崖である。

ひかげ  
日蔭の花

「あ……………」

と、かすかに動いた影がある。

お綱は、やっと意識づいた。——気がついて、ジツとあたりを見廻したが、そこは、音もなく、光もない、まったくの暗黒。

どこへ——という気もなく、お綱は、よろりと立ち上がった。

「オオ、どうしたのだろう……私は？ 私は？ ——ああ、墜ちたのだけ！ 妙な所へ」  
何物へか触れようとして、泳ぐように歩きだしたお綱は、墜ちた時の体の痛みに、思わずそこへ仆れてしまった。

だが、痛くなかった。

そこには畳が敷いてある。プーンと、湿つぽい煤の匂いが鼻をうった。そして、どうやら伽藍のように広い部屋だという気がした。

深々と、毛の根のしまる寒さと、所々、骨ぶしの痛むのをこらえながら、かれはまた、暗黒の部屋を探りだした。

けれど、そこは、手探りで測りきれないほどな広きであった。畳数にしたら、およそ七、八十畳も敷けているかと思われる。

太い角柱にさわった——八寸角ぐらいの堅い柱である。

また、氷のように冷たい羽目板も撫で廻した。二間おきに柱があり、また羽目板がつづ

いていた。

こうして、グルリと一巡探つてみると、この部屋は、目鼻のない顔のごとく、障子もなければ出口もなく、無論、床の間とか書院窓のような造作もない。

「アア、やつぱりここは、屋敷の地底ちそこへ建てた隠し部屋に違いない……」

冷静にかえると同時に、ふだんのお綱に戻つたかれは、その時、初めてハッキリと、自分の居場所が分つてきた。

そして何やら、カラリと、足にふれて鳴つた物がある。手を伸ばしてみるとあいくちヒ首だ！  
自分が鏡の裏からここへ墜おちた時まで、握りしめていたあのヒ首だ。

こんな場合、刃物はものというものは、不思議な強味を与えるのである。お綱は、それを拾つて、暗闇の畳の上へ、くの字形に体を投げた。

「——喚わめいたところで、しようがありやしない」

自分で自分の心にいきかせるように。

「ジツと落ちついていれば、そのうちになんとかい智慧もあろうというものさ……。眼が馴れてくれば暗闇でも見えるというし、夜が明ければどこからか、少しぐらいな明りが射してくるかも知れない」

こう思い決めるとともに、努めて、無駄に疲れまいと心がけた。いたずらに心身を疲らしてしまふことが、何より恐ろしいことだ、という点に気がつくほど、お綱は、取り乱していかなかった。

と……。お綱の澄みきった神経が、やがて、不思議なものを感じてきた。

目に感じたものでもなく、耳から感じたものでもない。どこからともなく、忍びやかに、きわめてほのかに、プーンと薫<sup>かお</sup>ってきた得<sup>え</sup>ならぬ香気なのである。

「おや？ ……」

かれは、ハツとしてあたりの闇を見廻した。

身動きをしてすら、その妙<sup>たえ</sup>な薫<sup>かお</sup>りは、掻き消えてしまいそうにかすかであった。

しかし、お綱は、その一脈の芳香に、全身の神経をあつめて不思議に思った。こんな地底の穴蔵に、あり得べからざるいい匂<sup>にお</sup>いが、一体、どこから流れこんでくるのだろうか？

……と。

惑うているまにも、お綱は、あまりに好ましい香気に、酔わされるような、溶<sup>と</sup>けゆくような気持になった。その香気は、日向<sup>ひなた</sup>に蒸<sup>む</sup>れる薫<sup>くんばい</sup>梅のような陽香ではない。ちようど、日かげにつつましく匂<sup>にお</sup>っている丁<sup>ちようじ</sup>子の花を思わせる陰香である。

いつのことであつたか。

お綱は、挿花はなの師匠になりすまして、さるお屋敷の聞香ぶんこうの席にまじっていたことがある。

その時、雁金香かりかねこうであるとか、菊水であるとか、新月、麝香木じやこうぼくなどと、おのおのが自慢に焚たくのを眺めて、まあ、この人たちは、なんというばかばかしい悠ゆう長ちような遊びをしているのだろう、小判を欠いて焚たくような、たかい名香を煙にするくらいなら、骨牌カルタでもしたらよかろうに、と隅であくびを嚙かんでいたことであつた。

で——この匂いを、何香なにこうとさぐり当てる力はないまでも、それに近い物の薫りだ、というだけは確かめられた。

それはそれと分つたが、さて、誰が？ どこで？ このいい匂いをたてているのか——となると、皆目判断かいもくがつかなくなる。

お綱は、も一度、眸ひとみをこらして見廻した。

しかし何べん見ても、そこ一面は、やはり厚ぼつたい闇が陰湿いんしつにこめてあるのみだ。

と。お綱の目が、向うの隅へ、はッと、吸いつけられたのである。

暗<sup>あん</sup>たんたる中に、ツウ——と赤い、一筋の光がみえた。まさに無<sup>む</sup>明<sup>みょう</sup>の底<sup>へ</sup>から碧<sup>へ</sup>落<sup>きらく</sup>を仰<sup>あ</sup>いだよな狂喜である。お綱は、われを忘れて闇を泳いだ。

そこへ駈<sup>か</sup>け寄<sup>か</sup>つてみると、いよいよ香<sup>か</sup>ぐわしい匂<sup>か</sup>いが強く感じられた。細<sup>こ</sup>い明<sup>み</sup>りは、隅<sup>ぐも</sup>の太柱<sup>たいちゆう</sup>と羽目板<sup>うめいばん</sup>との境<sup>さかい</sup>の、わずかな隙<sup>ひま</sup>間<sup>ま</sup>から洩<sup>あ</sup>れてい

丁<sup>ちやうじ</sup>子<sup>し</sup>の薰<sup>かお</sup>るに似た香煙<sup>かうえん</sup>も、その隙<sup>ひま</sup>から、忍<sup>しの</sup>びやかに流<sup>なが</sup>れてくるのだ。お綱は、この板<sup>いた</sup>壁<sup>かべ</sup>の向<sup>むか</sup>うにいるのが、何者<sup>なにもの</sup>であろうと考<sup>かんが</sup>えてみる余<sup>あま</sup>裕<sup>ゆ</sup>もなく、

「おつ、誰<sup>たれ</sup>かいる！」

ヒ首<sup>あいくち</sup>の柄<sup>え</sup>をみずおちに当<sup>あた</sup>てて、力<sup>ちから</sup>いっばい、板<sup>いた</sup>壁<sup>かべ</sup>を突<sup>つ</sup>いてみた。だが、櫓<sup>げ</sup>かなんぞの厚<sup>あ</sup>板<sup>ばん</sup>とみえて、刃<sup>やいば</sup>物の尖<sup>さき</sup>がツウ！ と辻<sup>すべ</sup>つた。

「あ、これを折<sup>よ</sup>つては……」と、ヒ首<sup>あいくち</sup>の尖<sup>さき</sup>を透<sup>す</sup>かしてみたが、折<sup>よ</sup>れていなかったのでホツとした。

偶然<sup>ぐうぜん</sup>、この短<sup>みじ</sup>い刃<sup>やいば</sup>金<sup>かね</sup>を握<sup>にぎ</sup>つて離<sup>はな</sup>さなかつたのが、奈<sup>な</sup>落<sup>らく</sup>をのがれるただ一つの活<sup>かつ</sup>路<sup>ろ</sup>である。お綱は、そう思<sup>おも</sup>つて、鉄<sup>てつ</sup>のような櫓<sup>げ</sup>の羽<sup>う</sup>目<sup>め</sup>板<sup>ばん</sup>に向<sup>むか</sup>い、こんどは、きわめて大事<sup>だいじ</sup>をとりながら、サクリ、サクリ……と仮<sup>か</sup>面<sup>めん</sup>でも彫<sup>う</sup>るようにえぐり始<sup>はじ</sup>めた。

白<sup>しろ</sup>い短<sup>みじ</sup>刀<sup>とう</sup>の切<sup>き</sup>ツ尖<sup>さき</sup>から、削<sup>く</sup>らるる木<sup>き</sup>屑<sup>くず</sup>が、シユツシユツと顔<sup>かほ</sup>や胸<sup>むね</sup>へ散<sup>ち</sup>つてくる。かれは

知らず知らず一心になれた。そして、一寸一寸と、彫りこまれてゆくのが、自分の最善な活き路であるように信じられてきた。

と。さすがに鉄壁のような樗張りも、ようやく、眸の覗かれるぐらいな穴が彫れた。サクリツ……とえぐりこんだ短刀の肌に、淡明りがだんだんと濃くなつた。

そこで、お綱は、初めて、しぼるような汗の冷々と肌をぬらしているのに、ホツと息をついて、乱れ毛を耳の根へなでつけたのである。

「誰だろう？　こんな所に住んでいるのは」

初めて、疑惑をもつだけの余裕がでた。ヒ首の刃を手裏にして、ジツとえぐりこんだ穴へ眼をあてて覗いてみると、——おお、まさしく、そこには、お綱の想像もしなかつた景色が深沈と、不可思議なる夜の底に沈まれてあつたのだ。

どうだろう！

そこにはありありとして二人の婦人がいたのである。

部屋は、お綱のいる所の、暗たんたる板と柱の穴蔵と違い、普通と変らぬ部屋づくり、むしろ、美々しい結構である。

金砂子の袋戸棚、花梨の長押、うんげんべりの畳——そして、淡き絹行燈の光が、

すべてを、春雨のように濡らしている……。

その床の間に向つて、朧たけた一人の女性<sup>によしやう</sup>が黒々とした髪をうしろにすべらかし、ジツと合掌したまま、作りつけた人形のごとく、或いはこの部屋のまま、この灯かげのもとたまま、ミイラになっているのではないか？ ……と思われるほど、動かずにいるのである。

その側<sup>わき</sup>には、また、もう一人の女がいた。

両手をついて、合掌している女性のごとく、これも果てしなくうつむいている。縷々<sup>るる</sup>としてぼるのは香の煙である。

糸より細い煙のすじが、床の香炉<sup>こうろ</sup>から夢のように立っている。そして、日蔭の丁子<sup>ちようじ</sup>に似るゆかしい香りが板一重を隔てたお綱をも酔<sup>え</sup>わせて、恍惚と、身のある所を忘れさせる。

「ああ、誰だろう……？ ここは一体どこなのであろう？」と、お綱の頭脳がその時、一心に考え迷った。

と一緒に、かれの記憶を、ピーンとよみがえらせたのは。

お千絵<sup>ちえ</sup>様？

その人の名であった。

「たみや……」

ひっそりとした静寂しじまのなかに、鈴をふるような声があった。床とこに向つて、名香を焚たき、石のごとく目を閉じていた藤とうやかな女にょしやう性——その人の口から、やがて、低く洩れた言葉なのである。

「はい」

侍かしずいて、手をつかえていた中年の女。心もち顔をあげて、ジツと、仕つかえるお方の姿を見上げているうちに、何の意味か……ポロポロと畳たたみに落つる涙の音……。

女は、泣いているのである。

と。床に向つている女にょしやう性せいの、うしろ姿も、ソツと涙を拭くらしい。

絹に漉こされるほのかな灯が、あたりを柔らかに照らしてはいるが、さすがに夜、ましてや地の底——、部屋の調度の美うるわしさも、若い女性の住む所にある明るさも、すべてが、深沈とした鬼気にかき消されて、一味の凄すじさ、というようなものさえ流れているかにみえる。

おつ。たしかに、お千絵様。

お綱は、胸をドキツとさせた。

そことは、板一重の穴蔵部屋で、やつと小指の入るくらいな隙まを作った所から、お綱は、息を殺して覗のぞいている。

そして、その人こそ、お千絵様にまぎれない方——と思ひながら、お綱は、何とは知らずゾーツとして、髪かみの毛から足の先まで、全身の血が、凍こつてくるかのような心地をおぼえた。

凄すしいといつて、生れてから、こんな凄すしい気がしたことはない——と、お綱は後で、万吉にもしみじみ話したことである。

でも、じつと、息をひそめて覗のぞいていると。

「たみや……」

夜の淋しさに堪えぬかのようにまたこう呼んで、若い女によし性は、はふり落つる涙をふく。

凄いとみれば、円山まるやま応拳おうきよの美女の幽精ゆうせい。チリにもふれぬ深窓の処女とみれば、花は水仙なすいせんの気高さを思わせる姿である。その女性こそ、甲賀家の家付きの娘、お千絵様なのであった。

かかる冬の冷々とするのに、下には色地の襟をみせているが、上には、白紵の雪かたばかり白いかいどりを着て、うるしの艶をふくむ黒髪は、根を紐結びにフツサリと、曲下げにうしろへ垂れている。

「お嬢様……」

同じように、涙の目をふいて、側の女が静かに手を伸べると、お千絵はその掌へ、ま白な珠をサラサラと鳴らしてのせた。水晶の玉をつらねた数珠である。

今日は、まる十年と二月前に、世阿弥が江戸を出た日であった。

床に、一幅の軸がかけられてある。端巖な肖像が描かれてあった。それがお千絵の父である、阿波へ入ったまま消息をたつて、今に知れぬ甲賀世阿弥の像である。

幕府は死んだものとみなして、絶家の命を下してしまった。お千絵とても、今では、すでに世に亡い父と諦めている。

「たみや」

今、お千絵は永い回向をすました。

「はい」

「しんしんと寒くなりましたことねえ……」

「師走といえ、夜霜の立つ頃でございますから」

「さだめし外の世間には、寒風さむかぜが吹いておりましようね」

「ここへは、凧こがらしの声もきこえてまいりませぬ」

「ああ凧は嫌……浮世の寒風しんやは嫌……。千絵はこのまま、この地底ちぞこの部屋に埋もれてしまいたい」

「たみもご一緒に埋もれます。……けれどお嬢様。朽ちた落葉の下からも、いつか春が芽ぐむではございませぬか。ヒヨツとして、たみの兄が帰ってくるか、また、弦之丞様でも江戸へおいでになれば」

「阿波へ様子を見に行つてくれたお前の兄の銀五郎が、帰ることはあろうけれど……」

「いいえ、弦之丞様にしましても、いつか一度は」

「アア、たみや……もうそれをいうておくれでない」白いかいどり姿が、雪くずれをしたように、ガバと、袂たもとを顔にして泣き伏した。

「お嬢様、お嬢様。あなたに泣かれてこの乳母うぼがどうしましょう。もつと……お強くなつて下さいませ。いいえ、今が、アア今が、大事な時でござります。あなたはもつとお強くならなければなりません」

「お前までが、そんな無理を」

「もうわずかな御辛抱……ジツとこらえて下さいませ。お嬢様のお手紙を持って、阿波へ行つた兄の銀五郎が、今に、きつといい報らせを持って戻りましよう程に……」

お千絵は、どうしてこんな地底の部屋にいるのだろうか！

いうまでもなく、恋と慾の二道をかけている、旅川周馬の奸策である。

鏡の裏から、お綱の墜ちこんだ所は、昔、事あるごとに、甲賀組の者が、ここへ集合して隠密の謀しあわせをした評定場所。かれらの手にかかることは、みな、秘密であり他聞をはばかるので、相談や打ち合せには、必ず、宗家の穴蔵部屋に寄るものにきまつていた。

で、組仲間の者は、そこを符牒に呼んで、「お鏡下」ともまた「おしやべりの間」ともいつていた。しかし、世間が泰平になるにつれて、ものものしい集合もなく、世阿弥の代になつては、一度も使つたことがない。

その隣はというと。そこは「密見の間」といつた跡で、深い企らみをしている旅川周馬は、自分が、この屋敷へ移ると同時に、お千絵と乳母とを、ここへ押しこめて、世間に

は行方しれずになつたと、言いふらしていたのだ。三日に一度、周馬は、鏡下へ繩梯子なわばしごを下ろして、密見の間をおとずれる。

その日が、お千絵の地獄であつた。針の山、血の池へ趁おわるるより、なおまだ辛いかしや責くをうける日なのである。

周馬が責める。

おれの意に従え！ 旅川周馬の妻になれ！

ここに伝わる、甲賀流の秘書私財の隠してある所を教えろ！

こういつて羅刹らせつのごとく責めさいなむのだ。

「そちが指でも触れれば、千絵はすぐ死にまするぞ——」

お千絵の防ぎは、この一語ひとことであつた。

周馬はあの通りな横着者である、またお千絵が必ず死のうことも知っている。死なしては玉なしだ。彼はどこまでもジリジリづめに弱らせる策をとつた。三日目にきて一責め責めると、あと三日の食べ物において、鏡の裏から抜けだしてゆく。

お千絵は幾度か死のうとした。周馬ずれの恥かしめに、こうまでたえては行かれない。けれど、乳母のおたみは、兄の唐草銀五郎が吉報をもたらしてくれるまで——と、それこ

そ、一日のぼしに、お千絵の死を思い止まらしてきたのである。

ああ。その待ちに待っている唐草銀五郎が、すでに、ぜんじょうじ禪定寺峠の土になっているとは、むび夢寐にも知らぬのであった。

その、間違いをひき起した、そもその禍因を、今深くかえりみてみると、まったく、お綱の指である。

見返りお綱の指わぎが、天王寺で、あの紙入れを搦すったばかりに、渦うずが渦を呼ぶ鳴門の海のように、それからそれへ波瀾の絶えぬことになった。

だが、その下手人であるお綱自身は、自分の指一本から、そんな大きな悪闘の渦が、この人々の運命を覆くつがえしていようとは夢にも知らない。事実、みじんも知らずにいるのだ。

かれはただ、げんのじょう弦之丞という初恋の対象だけに吸いよせられて、この渦紋を離れずにいるが、さもなければ、毒を散らして飛び去った、いたずらな蝶に過ぎなかったであろう。さらに、そのお綱の磁力に、お十夜がひきずられている。

この二人だけは、阿波にも江戸にも、何ら中心の事件にかかわりなく、今日まできたが、いつかは必ず、その渦紋の真ツただ中に巻かれ込むに違いない。

すでに、お千絵とお綱の恋人である法のりづき月弦之丞は、東海道八ツ山口から、あすは、江

戸に入るといふ周馬の話。

その弦之丞を狙い打つため、あとを追つてきた蜂須賀家の刺客天堂一角も、同時に江戸入りをするであろう。

一步、かれが江戸へ入れば、そこには、周馬、お十夜などの毒刃が伏せてあり、うしろには、天堂一角の虚きよをつけ狙う殺刀がある。

物慾の争奪、血刀の乱舞、恋と恋の生なまなま々しい争い——それらの悪気をふくんだ険けわしい嵐の前兆が、今や、どこからとなくソヨソヨと、江戸の近くへ見舞つてきた。目明し万吉、かれの神経が、この模様を、敏さしくも感じているかどうか？

女スリの指一本。

かくも、怖ろしい葛藤かつとうと、果て知れぬ修羅しゆらを現じてきてしまった。この禍わざいの元が、おのれの罪と知つた日に、見返りお綱は、どう変わるだろう？

あえていふ。鳴門秘帖の眼目とする狂瀾は、これから本題に入るのである。

さて、お綱は、ヒ首あいくちに懸命をこめた。

「おしゃべりの間」の暗闇に立つて、かれは一心不乱に、櫂けやきの厚みをえぐつて行く。

ザクリ、ザクリツと木屑が散る！ 一分二分ずつ、隣とそこの境が削りとられてゆき、

近づいてゆくのだ。一人の弦之丞を恋う、お綱とお千絵との境目が――。

メリツ――と、お綱のヒ首あいくちが、一念に櫂の板をえぐり抜いて、柄元つかもとまで向うへ通つた。

密見みつけんの間まにいる、お千絵とおたみとは、その音にハツと驚かされて、等しい目色を、思わず後ろの方へ射向けた。

「おッ！」

おたみは、のけぞるばかりに気を消した。無論、お千絵の眉のあたりにも、不安と、怪訝げんにおびやかされた表情が漲みなぎった。

そこから見ると、ちようと、部屋の一面から、謎のごとき刃ものの切ツ尖さきが、不意に突きぬけて見えたのである。

刃がかりを得た切れ刀ものはみているまにも、必死に躍つて、たちまち切れ目をひろげてきた。

「た、たれじゃッ」

おたみの声が鋭く咎とがめた。

お綱のほうには、それが耳に入らなかつた。半刻<sup>はんとき</sup>あまりの死力が、そこに酬<sup>むく</sup>いられてきたうれしさにみちていた。

躍る匕首は、木屑を雪のごとくちらして、たちまち、一尺ばかりもうがってきた。

「誰じやツ、たれじや!」

「才才……」お綱は初めて手を休めた。そして、こつちから中の様子を明らかに見なおすことができたように、お千絵のほうからも、凄<sup>せい</sup>艶<sup>えん</sup>なお綱の顔を見たであろう。

「もし」

「たれじや、そなたは」

「あ——、私は、お綱と申すものでございますが、あなた様は、甲賀家の御息女、お千絵様ではありませぬか」

「や? ……どうしてそれを知つていやる」

「お千絵様! ああ、やつぱりそうでございましたか。では、お言伝<sup>ことづて</sup>申します、目明し万吉という者が、はるばる遠い<sup>かみがた</sup>上方から、あなた様に会いたいために、この江戸表へまいつております。ところが、このお屋敷ときた日には、いつも釘付けになっていて、おまけに、旅川周馬の眼があるので、その万吉が、大事なお話をする事ができません」

「待つて下さい」

おたみは少し安心して、側から、お綱の早口な言葉を聞きなおした。

「上方から来た目明しの万吉とやら、いつこうおぼえない人ですけれど、それは一体、お嬢様に何の用があつて来た者でござりますか」

「さあ……実は私も、そのところは、深く聞いていないんですけれど、仔細しさいがあつて、あなた方を、この屋敷から救いだしてくれ——、こう頼まれているうちに、嫌な奴に見つけられ、思わぬ所へ落ち込んだのが、かえつてお目にかかるしあわ俥しあわせとなつたんでございます。詳しい話は、その万吉からお聞きなすつて下さいまし」

「お嬢様……」と、おたみはそれをうけついで、「あのようによりますが、どうしたものでございましょう」

と、いうのを待たず、お綱はまた、万吉から頼まれた通りの言葉をつけ足した。

「それで、何でございます……万吉という者を、さだめし御不審にお思いなさりましょうが、決して悪い者ではなく、法のりづき月様から、大事な御用をいいつかつて、一足先に、ここへまいつたのだということでございます」

「えっ。あの法月様から？」

「はい、弦之丞様も近々のうちに、この江戸表へお越しなさいますそうな」

「まあ！……」といつて乳母のおたみ、お千絵の顔を振りかえると、かの女は、あまり意外なお綱の言葉を、よろこんでいいか、疑つていいか、茫然として聞いている。

「お綱さんとやら、それは真実でございますか」

「なんで、こんな憂き目にあつてまで、お二人様へわざわざ嘘を言いにきましよう。さ、周馬の眼にかからぬうちに、ここから逃げるご思案をして下さいまし。本郷妻恋の、私の家までご案内して、どうなと後はおかくまい申します」

「お嬢様。いよいよ時節がまいりました」

「だけれど、たみや……」とお千絵は、躍りたつよろこびを、冷たい理性で打ちけしながら、

「どう考えてみても、弦之丞様が、江戸へお戻りなされる筈がない。これは何かの間違ひでありましょうが」

「たとえ、間違いであつたにしろ、せつかく、お綱とやらがああ申します程に、ここを遁れ出ようではございませぬか。どうなろうと、この上運の悪いほうへ、転ぶ気づかいはありません」

「とって、たみや、お前にこの嚴重な所から、逃げ出られる工夫がありますか」

「さあ？」

おたみは、初めて悲しい当惑を知った。周馬が、抜け目なく出口を断つてある、八方封じの地底の部屋——。お綱の帰り途もない筈である。

「お嬢様」

おたみは励ますように語を強めて、

「——逃げられます！ その境さえ切り破れば、あの鏡の裏の出口から」

「お千絵様」

またこちらから、お綱がいった。

「この境は、このヒ首あいくちで、わたしが必死に破ります。さ、早くお支度をなさいまし。

もし周馬のやつが帰ってきた日には、それこそもう百年目——」

と。お綱はまたヒ首をとりなおして、人の体が抜け出られるまで、無二無三に切り開け始めた。

そのまに、おたみは甲斐かい甲斐がいしく身支度をした。けれど、お千絵にはまだ幾分かためら

う様子がある。それを見ると、おたみは乳母らしい言葉で、

「お嬢様！」と強く叱った。

「こんな穴あなぐら蔵の地獄に、なんの御未練でございます。御先祖様からの財宝を、残してゆくのが惜しいとでも……」

「いいえ、たみや、そんなものに未練はない……私はただ」

と、乳母の胸へ抱きついて、

「家に伝わる甲賀流のあまたの秘書を、そっくり、あの人ひと非人でなしの旅川周馬へ、残してゆくのが、お父上様にすまぬと思うて……」

「いえ。今の場合は、お嬢様という大事なお体にはかえられませぬ。家名は潰つぶれても、あなた様さえお恙つつがなければ、甲賀家のお血筋ちすじだけは残ります。あ！ よいことがございます」

おたみはきつと心をきめて、

「あの悪人の手へ、すべての物を残してゆくよりは、お嬢様、いッそのこと、ここへ火を放かけてまいりましょう」

「火を!!」

「エエ、惜しいようではござりますが、このお屋敷に隠されてある財宝や秘書を、周馬ず

れの悪党にふみにじられてしまうよりは……」ホロリとたまる目がしらの露を押さえて――「すべてを灰になさいませ……そして、お嬢様という甲賀家の血だけをお残し遊ばしませ」

「たみや」

「お分りなさいましたかえ」

「わかりました、だけれど……」

と、お千絵は、怖ろしい紅蓮ぐれんの炎を思いうかべて、うつろな眼で、古い歴史のある地底ちぞこの部屋を眺めた。

「出られますよ!」

その時、お綱が弾はずんだ声で呼んだ。

みると、もう出入りができるほど、そこが切り破られてあった。

「さ、お千絵様――」手をのばして救い出した。たみは、火を放かけるために後へ残って、反古ほごや木屑や乱れ箱などを、手当り次第に、部屋の中ほどへ積み上げる。

ただッ広い闇の間まを、お綱の持つ蠟ろうの灯ひがユラユラと走りぬけた。

さつき、自分が墜おちこんだ所を、鏡の裏の下から仰ぐと、一丈あまりの高さであって、

梯子はしごのない二階同様、上がる術すべがないのである。

と、向うでは、残っているおたみが、

「お綱さんとやら、逃げる出口が見つかったら、いいと、声をかけて下さいましね、すぐに火を放かけて、私もそこへ行きますから」

こう声をかけておいて、行燈あんどんの油壺あぶらつぼをとりあげ、反古ほごの上へタラタラと撒まいていた。

「ま、待っていて下さいよ」

気ばかりは急せいでいるが、お綱も少しうろたえた。

一丈余りの高さでは、飛びつかれる筈はなし、足をかける所もないので、さすがに思案がつきてしまった。

「分りましたかえ？」おたみも向うで急せいでいた。

「そこにたしか、数珠梯子じゆずばしごが垂れている筈です。——数珠梯子が」——と、そういわれて、

お綱の目にファイと止まったのは、柱のかけに隠れて、上から垂れていた一本の縄なわ。

向うから、教えたのはこれであろう。所々に、結びコブシが作られていて、攀よじるに都合よくできている。

「あつたでしょう。そこに」

「ええ！」こんどは、お綱もいきいきと返辞をして、

「ありましたよ！ 繩梯子が」

「では、ようござんすね——」

と、念をおして、おたみはすぐに反古の山へ行燈の火をくつがえした。

ボツ——と、まつ黒に匍はい揚がった煙をくぐつて、乳母うばのおたみが、お綱がえぐり抜いた穴から、バタバタと逃げだしてきた。

途端に、お綱が、

「あッ、いけない！」絶望的な声をあげた。

お千絵様を先に——と思つて引いた数珠繩じゆずなわの梯子が、どうしたのか、ぷツつり、断きれてしまったのである。

奥の炎は、遠慮なく燃えだして、そこを、カーツと赤く照らしてきた。

えどたいか  
江戸大火

繩なわの朽ちていた数珠梯子は、三人の望みを絶つて、途中からプツリと切れ、お綱の手もとへ躍なつてきた。

「あつ——」

「しまった！」

等しく悲痛そのものの声だ。お綱は、お千絵の手をとつて、第二の逃げ口を探し廻つた。だが——もとより、そこ以外に、別な出口のある筈はない。

と。奥のほうから、ムーツと温ぬるい火かツき気が流れてきて、うろたえ廻する裾すそや袂たもとに、渦うずになつた黒煙くろえんが真綿まわたのようにまつわりだす。

「アア、大変なことになつた——」おたみは狂わしく駈かけ戻つて、はやまつて放かけた奥の火を消そうとした。けれど、密みつ見けんの間の反古まほごと油は、もう消し伏せもならぬ焰ほのおとなつて  
いる。

まつ黒な煙の中に、ピラピラ、ピラピラ……と、青い火、赤い火の舌した尖さきが、うす気味悪く舐なめずりだした。

「お嬢様！ お綱さん！ 早くどこからか逃げて下さい。火が！ 火が！ 火が……」

必死の力で、おたみは、二、三枚の畳たたみをはねあげ、前の板境へ立てかけて、お綱の切り

破つた穴を密閉した。そしてそれを、自分の背中で支えながら、

「お綱さん！ 早くしごきを繋ぎ合せて、今の数珠梯子へ、結び足して……早く、早く、お嬢様を助けてあげて下さいよう！」

後の声は煙に咽むせんでしまった。こうして、おたみが自分の背なかの焦げるまで、畳で穴を塞ふさいでいるうちは、しばらく、流れでる煙も防げ、また火の廻りも幾分かは遅くなるう……。

だが。

奥の焰が燃えぬけてこないまに、どうして上へ遁のがれだすことができよう。

さはあれ、ここは、死ぬか生きるかの境。

お綱は、手早く二本のしごきを繋つなぎあわせた。

そして、お千絵の体を、高く抱きあげて、断きれた数珠繩なわの端へ、そのしごきを結び足そうとした。

お千絵の白い手が伸びた。生きんとする力かぎり伸びた……。だが、もう二尺——ある、せめて、もう八、九寸、そこへ触れようとして、指が届かぬ。

「お嬢様ツ……」

主<sup>しゅ</sup>思<sup>おも</sup>いな乳母のおたみは、ジリジリと背中の熱くなるのをこらえて、狂わしく、声をふりしぼった。

「ま、まだですか！ ……早く、ああ、あ熱……早く逃げて下さいまし」

「アア、たみや、駄目ですよ——」

お千絵は、遂に疲れはてて、ガツクリとしごきの手を落した。と一緒に、さすがに勝気なお綱も、ムラムラと巻く煙に咽<sup>む</sup>せ、お千絵の体を抱いたまま、

「ちイツ……」

と、糸切歯を咬<sup>か</sup>んで、横に坐りくずれてしまった。

\* \* \*

さて。

やはりその夜のことなのである。

外神田の河岸<sup>か</sup>ツぶちを、風に吹かれてすツ飛んできた、角兵衛獅子<sup>かくべえじし</sup>の二人の子。

軍鶏<sup>しやも</sup>の赤毛をお頭<sup>つむ</sup>にのせて、萌黄木綿<sup>もえぎ</sup>のお衣<sup>べ</sup>をきせたお獅子<sup>しし</sup>の面を、パツクリと背中へ引<sup>ひ</sup>っくり返して、ほお齒<sup>ひより</sup>の日和下駄<sup>ひより</sup>をカラカラ鳴らし、

「オオ寒、オオ寒……」

駈けて、ころんで、また駈けて、一膳めし屋へ飛びこんだ。  
縄すだれでもその中は。

お芋の匂いや、酒の湯気や、汁に煮える葱のにおりで、別世界ほど暖かい。

「小父さん——」

こういったのはお獅子の子である。

姉と弟であるらしい、十四ぐらいな女の子と、十一ぐらいな男の子だ。

かじかんだ手を口に当てて、ハアハア息をかけながら、

「小父さん——御飯をちょうだい」

「あいよ」

と奥のほうでめし屋のおやじ。

「たいそう今日は遅かったな。今すぐに、暖かいのを拵らえてやるから、そのお客さんの火鉢へ、少しあたらして貰っていいええ。オイオイ三輪ちゃん、紙をやるから、乙坊の漬をカンでやんな。水ツ漬をチュチュさせて、お客様のそばへ寄るとな、それ……お客様のお鮫鍋がまずくならあ」

「なに、かまやしねえ」

と隅にいた客。

「こつちへ来てあたるがいい」と、火鉢を向けて、お獅子の姉きょうだい弟だいを手招きした。それは目明しの万吉であった。

お獅子の子は、人なつこく、

「おじさん、あたらししておくれ」

と、万吉の側の火鉢へ、しがみつくように寄ってきた。

姉と弟の手が二本、凍こごえきツていたとみえて、炭火の上に、ガツガツとふるえている。

「偉えいえなあ、おめえたちは」

「おじさん」

「なんだい」

「どうして偉いの？ あたいたちが」

「それを知らないところがなおい。よく働くなあ、小さいのに。人間、なんでも、働かなくちやいけねえや。それを偉いといったのさ」

と万吉、鮫あんこうなべ鰯鍋から、葱ねぎを挟んでフウと吹いて口へ入れた。

いつぞや、墨屋敷の窓の下で、お綱と約束したことがあるので、彼は、例の鉄砲箆てつぱうせんを肩にかけて、その日妻恋坂のお綱の家を、ソツと覗のぞいてきたのである。

まだ帰っていない様子なので、そのままブラブラ戻りながら、駿河台へ行ってみようか、明日あしたを待つて、もいちど妻恋へ出なおすのでしょうか、と迷った末に、この縄なわ暖簾のれんへとびこんで、とにかく、寒さしのぎに一合取った。

飲めそうできて、あまり飲めない目明しの万吉。

徳利一本で、たくさんになったので、飯を貰おうと思っていると、可愛いお獅子きょうの姉あねが、人なつこく寄ってきたので、思わず、もう一本取ってしまった。

「いい子だなあ」

万吉は、冷ひやッこい手を、暖あたためてやる気で、二人の手を一ツずつ握にぎってやりながら、

「なんていう名だい」と訊くと、

「あたい？」と弟のほう。

「乙おとぎち吉きちっていうの。姉ちゃんあねちゃんは、お三輪みつわちゃん」

「フム。お三輪に乙吉か。いい名だ……そして、どこだい、お前たちの家は？」

「吉原だよ」

「へえ、豪氣ごうきに粋いきな所へ住んでるじゃねえか」

「おじさんも行くかい」

「どいへ」

「吉原さ」

万吉、思わず吹きだしそうになって、

「おじさんは野暮天やぼてんだから、まだ吉原を見たこともねえのさ。だが、まさかお前たちだつて、あの廓くわくわの中じやないだろう」

「ああ、五十間けんの裏だよ。孔雀長屋くじゃくながやという所にいるの」

「そんな所があるのかい」

「見返り柳のすぐ下でね、オハグロ溝どぶが側にあるよ、いつ帰っても、賑やかだから怖こわかな  
い」

「おつ母かさんはいるのかい」

「おつ母かアは、死んじやつた」

「おやじさんは」

「生きてるよ」

「じゃアまあ結構だ。なあ、片親だけでもいりや、これに越したことはねえ。で、姉弟は二人ツきりかい」

「ううん……大きな姉ちゃんが二人いる」

「それでいて、お前たちまで、角兵衛獅子をして稼ぐのは、ああ、親父さんでも体が悪くて、永患ながわずらいをしているとみえるな」

「違うの……」姉のほうが、悲しい顔をした。

「じゃ、どうなんだい、一体？」

「父ちゃんとは、ピンピンしているけれど、お酒呑みなんだもの」

「フーム、で姉さんあねは何しているな？」

「小ツちやいほうの姉ちゃんおいらんはね、吉原の花魁おいらんに売られてしまったの」

「だ、誰によ？」

「ちゃんに——」と弟のほうがいって、ポロポロと涙をこぼした。

こぼれた涙が火鉢に落ちて、ジューツと、炭火の中で泣き消える。

「可哀そうに……」と万吉、思いだしたように皿に残っていた里芋さと芋を箸はしに刺して、

「サ、食べな」

と、一本ずつ持たせてやる。お獅子の子は、それを貰って、すぐムシヤムシヤと食べ始めた。

この優しい小父さんが、ふところに十手を呑んでいる怖い目明しだとは、その子も思わなければ、万吉もまた、おのれが、悪党にも恐れられる目明しだということを忘れてゐる。

そこへ、亭主が、お焦こげの御飯を塩にぎりにして、一杯ずつの味噌汁をつけ、奥から持ってきて飯はん台だいにのせると、角兵衛獅子のお三輪乙吉、いつもだけの小銭を出して、すぐ、ムシヤとふるいつく。

何もかも忘れて、真から、おいしそうに食べていた。

「おやじさん、俺おれにも、飯をくれないか」

万吉も茶漬を貰って、熱い飯に番茶をぶツかけ、新菜しんなの漬けもので、ザブザブとかツこみ始めた。

そこでまた、箸休めに、

「——で、何かい？」

と、今の話しかけを、こつちから訊きほじる。

「もう一人の姉っていうのは、家にいるのか」

「大きいほうの姉ねえちゃんはネ……」

指の飯粒をシャブリながら、女の子のお獅子がいう。

「あたいたちが、小ツちやい時——、おつ母かアが死んじまってから後に、どつかへ、行つてしまったの」

「オヤオヤ……親爺さんが呑んだくれで、一人の姉は吉原へ売りとばされ、その上、一番年上の姉までが家出をしてしまったのか」

万吉は、これだけの話で、ホボその家のありさまが想像された。そして、なんだか、他ひ人事とことではないように腹が立つてきた。

「フーム、そうか。それで小せえお前めえたちが、毎日、外へ角兵衛獅子に出ているのか……。気の毒だなあ。この空ツ風の吹く町へ出て、テンツクテンツク、氷のような地べたへ逆さにオツ立って、お前たちが稼いだ銭も、おおかた、おやじの寝酒になってしまふんだらう。よく世間にあるやつだ。殊に色街の掃溜はきだめには、怠け者の地廻じまわりとかなんとかいつて、そういう野郎がいかねない。……だがまあ、よくお前たちは辛抱してゐるなあ、今におやじも眼をさますだらう。また、大きい姉ちゃんが帰けえつてきたら、きつと、両手についてあやま

るだろうぜ」

「あたいたち、その姉ちゃんに逢いたくてしようがない。おじさん、いたら、教えておくんね」

「ウン、そうだろう、そうだろう」

「毎日、お獅子に出ている、そればかり見てるんだけれど」

「じゃ、うすうすおぼえているとみえる。そしてその姉あねさんは、幾つぐらいでどんな女よ」

「ちゃんがいったよ。まだ若いし、いい女だから、あいつがおれば、千両に売れるツて」

「いい女で、若くつて、ふーん……そして名前は？」

「お綱つなツていうの」

「え、お綱ツ？」

「おじさん！ 知ってるね」

「ま、まってくんねえ」

「おじさん——」

飯めしつぶだらけな手のままで、両方から、万吉の袖へたかつて来る。

「知ってるなら、教えてくんね、よう小父さん」

「ま、まちねえツてことよ。今おじさんが考えている所だわなあ。……フーム、すると何だね、お前たちの姉というのは、見返り柳の下にいた、お綱ツていういい女かい？」

「アア」

ジイト、二人の顔を見つめていた万吉が、思わず、手の箸をポロリと落して、

「ム……似てらあ！」

お獅子の姉と弟の手を、強く握った時である。

ジャーン！

すぐ、程近いすじかい見附の夜を見守るお火の見の上から、不意に、耳おどろかす半鐘の音。

時刻は、まさに、宵の五刻いっつ（午後八時）。

それは、ちようど。

かの、駿河台するがだいの墨屋敷——鏡の裏の穴蔵部屋で、お綱や、お千絵や、その乳母うばたちが、密見みつけんの間まに火をかけて、唯一つの力と思つてすがたじゆずばしごた数珠梯子が、プツンと切れた——その時刻である。

どたどたと、飯屋の二階から、三、四人の若い者が、ころげるように降りてきた。

「火事だ！」

「火事、火事、火事」

ちんばの下駄を突ツかけて、ワラワラと外へ飛びだして行ったので、皿を洗っていた亭主も、万吉も、お獅子の子も、それに巻かれて、縄なわのれんの外へ駆けだしてみた。

師走初めの冷たい風が、向う柳やなぎわら原から神田川の水をかすつて、ヒュツ——と町の横丁へまで入ってくる。

「どこだ、火事は？」

「今、二階の物干ものほしから、たしかに見えていたんだ」

「だってちツとも赤くねえじゃねえか」

「火の手は上がっていないが、お茶の水の森あたりで、ボウ——と、白い煙がのぼった」

「よせやい。夜靄よもやか、湯屋の煙を見まちがいしやがッて」

闇を仰いでいた首が、いっせいに、なアンだ——という顔をして、少し拍子ひょうし抜けしている、紛れまぎもない二度目の半鐘。

ジャーン！ ジャーン！ ジャーン。

つづけぎまに、乱打のすり鐘ばん。

「おおツ、近ちけえ！」というと、あたりの者たちは、いなごのようにワラワラワラツと駈けて散る。

「どこだ、おい！」

飯屋の亭主が、軒さきの大樹をふり仰いでどなった。もう、はしっこいのが、いつのまにか、高い枯木の突とツ尖さきに攀よじのぼっていて、物見の役を承っている。

「近ちけえツ。すぐそこだ！」

と、上から、素すつとんき頓よう狂な声がしてきた。

「すぐそこだつて!？」

「お茶の水、お茶の水——」

「おお、じゃ風かざ上かみだ」

「おまけにかなり風が強い——」

と、その北風の吹き揺ゆする梢こずえに、寒かん鴉がらすのようにとまった男、なおもジツと見ていたが、

「——やッ。火事は駿河台の甲賀組らしいぞ。あの墨屋敷すみやしきの下の森から、真つ黒な煙が吹き出しているんだ！」

火の手をたしかめたものであろう、それを最後に樹の上の男は、スルスルスと下へ這すべつて来る。

「えっ、駿河台の墨屋敷だと!!」

こう仰天して叫んだのは、今が今まで、よそごとに聞いていた万吉だった。

いまだに帰らぬお綱の消息や、あの屋敷にいる筈で、そして姿の見えないお千絵様——。この二人の運命が刹那せつなに、火! という不安な旋風せんふうに結びついて万吉の敏びんな神経へ、不吉よかくな予覚を与えた。

「おお! 駿河台と聞いちやア……」内ぶところへ手を入れて、ギユツと晒さらしの腹巻をしめ、帯もすっかりと後ろへ廻す。

火事が近いと聞いて、泣きだしそうになった角兵衛獅子のお三輪と乙吉は、やさしい言葉をかけてくれた、万吉の側を離れたくないように、

「おじさん——」

と、寄りついて、頭の鶏毛とりげを寒そうにそよがせ、齒をガタガタと鳴らしている。

一番鐘がねをついた見附のすり鐘ばんに合せて、やがて遠く、両国のやぐらや鳥越あたりのお火の見でも、コーン、コーンと、冴えた二ツ鐘をひびかせてきた。

自身番から板木ばんぎが廻る。ドーン、ドーンと、裏通りを打つてくる番太郎の太鼓報じらせ。万吉の胸も、早鐘を打ってきた。

「ええ、こうしちやアおられねえ！」

吾を忘れて走りだすと、腰につかまっていたお獅子の乙吉が、日和ひより下駄を引ツくり返して、そこへ転び、ワーツと、大声で泣きだした。

「あッ、堪忍しなよ！」

ふりかえったが、万吉は、戻ろうとはしなかった。と、

「だ、だんなッ——」と呼び返したのは飯屋の亭主。

「おお、違ちがえねえ、勘定か」

層屋もとの資本しほの縞しまの財布を、首からはずして、紐ひもぐるみ、クルクルと巻いたかと思うと、万吉は、それをポーンとほうつてやつて、

「おやじさん、おつりはお獅子にやってくんな」

というや否や。

後も見ずに、目明しの万吉、もう、バラバラと提灯ちようちんの駈けみだれている、紅梅河岸こうばいがしを一散にぬけて、息もつかずに、駿河台まで韋駄天いだてんと飛んできた――。

針を吹ツかけられるような寒風なのに、万吉は、あぶら汗をタラタラ流して、紅梅河岸から上り道のぼみち、突きあたる奴を突きとぼして、まっしぐらに、駿河台へ駈け上がった。

お千絵様の墨屋敷――

燃えあがつていやしまいか、と思ったが、そこまで来てみると、あなたこなたの組屋敷も、また、案じていたそのお屋敷も異常はなかったので、ホツとしたり、急に、拍子抜けがしたりした。

だが、ホツとするのは、まだ早かった。

あたり一面、夜靄よもやのような薄けむりが、どこからともなくもうもうと立ち迷っている。

「出火ですぞ、出火でござるぞ」

わめいて廻る組屋敷の者。

「どこだ、どこだ」

「火元はどこだ、火元は!!」

後から後からと、ここへ、駈け上がってきた人々も、やや戸まどいの態ていだったが、やがて、その煙が、人家のないお茶の水の崖ぶちからだと知れて、それツ、怪あやし火びだとはばかり、皆そのほうへなだれていった。

その崖には、旅たび川かわ周しゅう馬まが上なる墨屋敷の中へ、常に出入りをしている隠し道があつた。今夜も周馬は、お十夜孫兵衛と出会つて、一刻ときばかり前に、その穴口から出ていったばかりである。

とは、誰あつて、知ろう筈はない。不思議な所から、不思議な煙——と、怪し火の騒ぎはいよいよ大きくなる。

万吉は、方角違いな、怪し火騒ぎには目もくれなかつた。なにせよ、墨屋敷にはまだお綱がいる筈、もし大火にでもなつた日には、お千絵様の身も心もとない——と思つたので、例の、覚えのある塀の下から、つつと中へ潜もぐりこんだ。

そして。

ズウと、家のまわりを見渡すと同時に、かれは、

「あつ！」

と、いって、顛てんとう倒した。

何ぞ計らん、怪し火の火元はここだ！

かれが、そと見渡した家まわり——、相変らず、数ある雨戸も窓の戸も、箱のように、ピツタリと閉てきつてあつたが、その、戸と戸との細い隙間や、廂の蔭などからは、まるで、蒸されたせいろうのごとく、家の中から白い煙が、ソヨソヨと洩れだしているではないか。

「オオ！ こいつア大変だ」

はね返されたように目明しの万吉、いつか、お綱に手をつかまれた、あの、窓へと飛びついて行つたが、今夜に限つて閉めきつてある。ええ、じれツてえ！ と足もとの、石を拾つて叩き破り、さらに窓格子を五、六本、バラバラツと打ちこわす。

指をかけると、万吉の体は、ヒラリと家の中へ、躍り込んでいった。

と——どうしたか、

「ああ——！」

と、口を抑えて、畳へ顔をうツ伏せた。

煙——煙——煙——目もあけない黒煙だ。

思わず、太い息を吸つたので、涙をこぼしてむせかえツた。

いよいよ、火はこの屋敷の、どこかしらに籠こもつてるときまった。風を入れては、一ひと燵あおりに燃えぬける惧おそれがある、と感づいたので、万吉はあとの戸をピンと閉めてしまった。こうなるとかれの身は、煙けむり蒸むしのせいろうの中へ、みずから封じてしまったようなもの。

危険は危険だが、お綱の安否が気づかわれる。それに、お千絵様の消息も知れない！火の中へも飛びこむ意気とは、この場合の万吉の覚悟であつたろう。

上を向いて息を吸わぬように心がけて、まず、あたりを撫で廻してみると、やわらかい友禅の炬燵こたつぶとん——温ぬくみがある——四、五冊の草双紙——コロコロと湯呑茶碗ゆのみが手にふれて転がった。

そいつをつかんで、盲滅法めくらめつぼう、闇の中へ投げつけて、

「お綱ア！——」

力いッぱい呼んでみた。

答えやあると待っている……。

だが、なんらの反応もない。

口を抑え、耳をすまし、目にしむ涙をこらえながら、しばらくジツとしていたが、かれ

の耳に聞こえるものは、ただムクムクと漂ってくる煙の音——、イヤ、煙に音はなかるうが、この時、万吉の神経には、たしかにそれがありありと聞こえた。

煙の底を這<sup>は</sup>つてゆく——低い所ほど煙がうすい。次の間から次の間へと、目明しの万吉は、だんだん深入りをしていった。

「お千絵様ア！」

呼べど、答える声はない。

「お綱ア！ お綱ア——」

と二声三声。

もう、一番奥と思うところに、長廊下から杉戸があつて、ピンと固く閉まっている。

何か、ぶちこわす物はないかと、あたりを撫で廻してみると、あつた！ あつたが一枚の櫛<sup>くし</sup>である。これじゃあ戸をコジ開ける物にもならない。

しかし、ここに一枚の櫛が落ちていたのは、たしかに、女のさまよっていた証拠！

万吉は、いよいよあせつた。と——廊下の一隅<sup>ぐう</sup>で、唐<sup>から</sup>金の水盤<sup>かね</sup>らしいものにさわつた。それを持つて、力まかせに、ドーンと突いて行くと、仕切戸がさつと開いた。

空洞<sup>うつつろ</sup>のような橋廊下——、口を開くと一緒にその奥から、ム——とずるばかりな熱風が

面おもてうを衝つつてきた。

「ここだ！ 火はッ」

猛然と身を起こした万吉。

左の脇ひじをまげて口をふせぎ、何のためらいもなくダツ——と奥まで駈けこんで行った。  
すると！

その突き当りとおぼしき闇に、いきなり、何者だろう？ かれの目をさえぎって、ギラリと躍った人影がある。

血相をかえた男の相貌そうぼう。

「あつ畜生！」

不意だったので万吉も夢中である。

右手めでにつかんでいた唐から金の水盤かね、その男の影を狙って、力の限り投げつけた。

うまく当たった！——と思うと、こはそも何？

グワラグワラッ！ と、ものすさまじい響きがして、燦さんぜん然と八方へ飛んだのは、まっ白なギヤマンの破片かけら！ あの大鏡がみじんになって砕け、その口からは、赤い火の粉がチラチラと噴き出した。

モクツ——と一つ、違った煙の渦が、鏡の裏の地底から、かれの顔へ吹きつけてきた。  
「ア！ アツ！」

と万吉。

思わず後ろへ飛びのくと——、煙に声がまじってきた、かすかに叫ぶ地底の声！ 才才、女の悲鳴——まぎれもなく耳に入った。

「やつ、お綱じゃねえか！ あの声は」

ザクザクとギヤマンの破片を踏んで、框だけになった鏡の口へ寄ってゆくと、いよいよ濃い煙が巻き揚ってくる。

呼ぼうとしては咽び、咽んでは叫んだのである。

「だツ、だツ、だれがいるんだツ——誰がいるんだツ」

と、中を覗いてみる——

ぼくぼく  
漠々たる密雲に、夕陽が射しているような有様。深い穴蔵の底へ万吉の声がひびいた。

よみがえったような叫びがしてきた。

「お綱……お綱……お綱だよう！」

「おお、やっぱりそうだったか、おれは万吉だ、万吉だぞッ」

「あッ……」という声が消えた。

「お綱ッ、しつかりしろよ！ 今すぐに助けてやるから、眠ってしまつちやいけねえぞ。地面へ口をつけて辛抱している」

「ま、万吉ッつあん——、縄を！」

「待て待て、待つてくれよ！ 今すぐだ」

もう、たえられぬかのような苦しい声で、またお綱が下から叫ぶ……。

「早くしてーッ。万吉ッつあん——わ、わたしよりもお千絵様が！」

「げッ、お千絵様が？ や、やや！ お千絵様もそこにいたのか。チエーッ、一大事！」

と万吉は、その時こそ、まつたく、煙を吸う苦しさも火かツき気も、身に感じなくなっていた。

「縄だ、縄だ、縄だ、縄だ！」

心の底でガリガリどなる。

眼は吊り上がってしまっている。足もつかずに廊下の彼方あなたこなた此方を、無我夢中で探し廻った。

「縄はないか、縄は——、縄だ、縄だ、縄だ！」

グズグズしている間には穴蔵のものが、紅蓮の舌さきに焼き殺されてしまう。鏡の口が開いたので、火の早さは一散になるであろう。

その身自身が、焦熱地獄に焼かるるよりは、むしろ万吉の苦しきのほうが百倍。

かれは極度にうろたえた、悩乱した、半狂乱の態になった。

縄！ 縄！ 縄！ 救いの縄。

こんな所に、あろう筈のないものを、かれは咄嗟に求めなければならぬ。

紅蓮の地獄——焦熱の地獄。

それは今、三人の女性性が、喘ぎ呻いている穴蔵部屋のけしきである。

こもりきつた黒煙が、お茶の水の抜け道へまで噴きだした程であるから、お千絵様いた密見の間は、あらかた、火になったものと思われる。

それを、命がけで、外から防いでいるのは、おたみであった。

今日まで、檻となっていた嚴重な厚板が、今は、わずかに身を焼かぬ防火壁となつてい。ただ、お綱がヒ首で切り破つた口があるので、おたみは、そこから焰をふき出させ

まいとして、幾枚もの畳たたみを立て重ね、身をもっておさえながら、最後の努力をつくして  
た。

けれど、悲しや、密見の間の焰ほのおは、口をふさがれた怒りをこめて、ジリジリと襖ふすまを焦こが  
し天井を焼き、さしも厚い櫺けやきの板を焼きぬいて、ペロリ……と、真まっ赤かな火の色を吹いて  
きた。

怒れる紅蓮ぐれんは、あなやと見るまに、隣りの穴蔵部屋の方へ、ゴウツと——火唸ひうなりをして  
這はいだした。

「——お嬢様ツ……」

おたみは、声を限りに叫んだ。

百千の火龍かりゆうは、かの女の肩の上から、メラメラツと音を立てて、近づいてくる。

お千絵は、お綱にかばわれて、地底の土に顔をうつ伏せ、わずかに煙を防いでいたが、  
乳母うばの声が聞こえるたびに、声をしばって呼び返した。けれど、おたみは、背中からジリ  
ジリと身が焦がされてくるのに、そこを離れようとしなかった。

「た、たみやア……」

「——お嬢様ア！——」

もう両方で、呼びあう力もなくなってしまうた。たみの黒髪にチリチリツと火が燃えついた。

兄の唐草銀五郎に似て、気丈な乳母のたみも、さすがに、

「あツ……熱ツつ……お嬢様ツ」

火の黒髪を振って、悶絶もんぜつした。

と同時に、半ばなかまで火となっていた畳の蓋ふたが、ドツと、かの女の体へ倒れかかった。一

瞬……ボウ……といったきり、あとは、なんの声もしない……。

ただ、真ツ黒な渦と、火の粉の微塵みじんがもうもうとそこを立てこめてしまった。

そこへ、目明し万吉が、こうとは知らずに、鏡を叩き砕いたのである。

「万吉ツつあん——繩を！」

と、紅蓮ぐれんの底から叫ばれて、かれは面食らった、歯ぎしりを咬かんだ、地団駄をふんだ。

「ええツ、情けねえツ、繩がねえ、繩が、繩が、繩が！……」

ヒ——ツという、悲鳴が一声揚ったようだ。いよいよお綱も断末魔だんまつまか？

お千絵様の黒髪にも、無残な火が燃えついてしまったのであろうか？

万吉はもう堪たまらなくなつた。

知らぬことならせむもないが、みすみすここに自分がいて、お綱を見殺しにするのみか、お千絵様を焼き殺してしまつては、のりづぎげんのじよう法月弦之丞つちらに対して、なんと、男の面が立とう。

いや、男一匹の面が立つの立たぬのという、そんなケチな問題ではない。

ここで、お千絵様の身に、万一があつたひには、銀五郎の死も犬死となり、弦之丞が初志をひるがえして起つた意味も、まったく空むなしいものとなる。

ひいては、世阿弥よあみの消息をつきとめ、阿波の密境を探ろうとする中心力を失つてしまい、すべてはもとの晦冥かいめいに帰つて、遂に、俵一八郎や常木鴻山こうざんなども、あのまま、永世えいせいに浮かばぬ人となつて亡ほろびるであろう。

無論、目明し万吉としても、そうなつては、今日まで可愛い女房にさえ居所を知らせず、江戸くんだりまでやツてきて、屑屋をしたり、犬の真似まねをしたりして、悲雨ひうさん惨風さんふうをなめている苦労がみんな水の泡だ。

と。その時、万吉、

「エエツ、この間抜け野郎め！」

自分で自分をドヤシつけるように、ハツと思いついたのである。

縄はある！ 縄があつた！ 縄は目明しの商売道具。肌身離さぬ二丈の捕縄とりなわが、チャ

ンと自分のふところにある。

悪党と見れば目明しの縄は、放たずとてひとりでスルスルと飛びだすものを、人を助けんとする咄嗟とっさには、こうまで血眼ちまなこに探し廻った最後まで、頭に浮かんでこなかったのである。

ほとぼしる火の粉を浴び、紅蓮の大波をくぐり抜けくぐり抜けて——目明しの万吉。

グワラツ！ と、大廊下の戸を二、三枚蹴破った。ふう——ツと巻きだす煙と共に、庭先へ跳び下りたかと思うと、

「お綱あアツ——」

よろめきながら、喘あえぐ声！ ……。

「しッ、しッかりしろッ。しッかりしてくれ！」

辛くも投げた人助けの捕縄とりなわで、焰ほのおの底から救い上げたお千絵様であろう——右手には、浄瑠璃じょうるり人形のように、ダラリとなった女の体を抱き、左に、お綱の帯をつかんだ——。

手をとってやる余裕がない。

だが、お綱はさすがに、気が張っていた。

「——だッ、大丈夫だよッ……」

こう叫んだようである。とたちまち、炎々たる狂い火が、蹴破られた雨戸から大<sup>おお</sup>廂<sup>おびき</sup>の梁<sup>はり</sup>を流れて、いつせいに燃えあがり、凍りきつてゐる冬の夜の空へ、カアーツと火柱が立ったのは、それから、ほんの一瞬の後——。

こけつ、転<sup>まろ</sup>びつ、お千絵を抱えた万吉と、お綱の姿だけは、渦まく火塵<sup>かしん</sup>を泳ぎぬけて、裏門の外へ出たらしいが、ああ、遂に、乳母のおたみだけは、すでに穴蔵部屋の火の畳に押し伏せられてしまつたとみえて、声もなければ姿も見せぬ……。

折もあれ。

吹き催<sup>もよお</sup>していた北風<sup>ならい</sup>の一<sup>ひと</sup>煽<sup>あお</sup>りに、火の魔の跳躍はほしいままとなり得た。さしも、由緒のある墨屋敷——甲賀流の宗家世阿弥<sup>よあみ</sup>のあとは、幾多<sup>いくた</sup>の秘書財宝をかくしたまま、ここにバリバリと惜しげもなく燃えに燃えて、ドーツともものすさまじい地響きをして焼けくずれる……。

風はいよいよ吹き荒<sup>すさ</sup>んで、見る見るうちに、辺り二十七家の組屋敷から、町つづきの鈴木町、紅梅坂の武家屋敷の、ここかしこに飛び火した。

場所は高台、火は強し、空いちめんを真ツ赤にして、江戸から見えぬ所はない。

ピユーツ……ピユーツと、いよいよ募る魔風の絶え間に、近くのスリ鐘、遠くの鐘、陰々と和して町々の人を呼びさます。

その頃はもう、お綱の姿も万吉の姿も、どこに見ることもならず、神田一帯、駿河台上り口、すべて、人と提灯と火事頭巾と、ばれんと鳶口の光ばかりに埋まっている。

………

所は京橋、桜新道——長沢町の裏あたりである。

「オヤ？」

と、飲みかけていた盃を下に置いて、

「火事ではないか」

今頃になって、迂濶至極なことをいいながら、ガラリと、裏二階の障子を開けて首を出した者がある。

お十夜孫兵衛と、旅川周馬であった。

もつともそこは、喜撰という額風呂の奥で、湯女を相手に、世間かまわず騒げるような作りなので、さつきからの半鐘も、聞こえぬくらいに静かなのである。

「オオ、大変な火の粉——」

空を仰いで、お十夜がこういうと、旅川周馬、バラバラッと、表二階へ駈けだして行った。と——すぐにまた、そこへ取つて返してきて、

「お十夜、大火だ！ 大火だ！ しかも火元は神田だそうだ」

少し酒の気は醒けまさしている。

「大丈夫だろう……」孫兵衛は席へ戻つて、手酌てしゃくのいっさん一盞いっさんを、チビリと唇くちに鳴らしながら、

「いくら風が強勢ごうせいでも、まさか、あの高台までは燃えてゆくまい」

「イヤ、そう安心はしてられない。とにかく、ここを引き揚げて、屋敷の安否を見届けねばならぬ」あわてて刀を差しかけるのを見ると、

「おい周馬、ちよつと待ちねえ」

お十夜は、何か不服があるらしい。

「イヤに落ちつき払つたな。ま、とにかく、外へ出て様子を聞いた上にいたそう」

「じゃ、あのほうは止めにする気か？」

「止めるものか！ ばかなことを」

「そうだろう、初めからその手筈を相談するために、わざわざここへ落ち着いたのだ。ま

ア火事なんざあどうでもいい、いよいよあすは江戸へ入るといふ、法月弦之丞から先に片づけてしまうことのほうが、今夜の火事より急だろうぜ」

「それも一理あるな？ ……」

と、旅川周馬は、耳につくすり鐘かねの音と、弦之丞のことを、半々はんはんに思い迷つて棒立ちとなつてゐる。

お十夜がいうとおり、今夜、わざわざこの喜撰風呂へまできて、女気なしにくつろいでゐる目的は、翌日あしたの相談や、手筈を謀しめしあわすのが眼目であつた。

翌日あしたというのは、法月弦之丞が、江戸へ着くのをさすのである。かれが江戸の地をふまないうちに、かれの命を絶つてしまうことは、周馬にとりまた孫兵衛にとつても、最上なる手段に相違なかつた。

東海道から江戸へ入るには、是非ともさしかかる八ツ山やまぐち山口やまぐちか高輪たかなわの浦あたり——、その辺に、必殺の策を伏せておいて、殺ころしてしまおうという二人が大体の目算もくさん。

で、そのために。

使屋つかいやに手紙を持たせて、二、三カ所の賭場どばへ、ならず者の狩り集めにやつてあるとこ

ろだ。しかるに、返事もこないうちに、周馬が中座しかけたから、お十夜が少しムツとした。

「まア落ちつけよ」

と、孫兵衛は、周馬の浮き腰を顎で抑えて、

「大事をもくろむ矢先に立つて、気を散らすのは禁物だ。そんな量見方なら、この俺は俺で、勝手な道をとるとして、お前と組むのはお断りだから、そう思つて貰いたい」

「お十夜、そう腹を立てては困る」

「だが、考えてみるがいい。なるほど、弦之丞はおれの恋仇、生かしておいては都合の悪いやつだ。しかし、お前のほうは、女のほかにあの屋敷の、すばらしい財宝まで、驚づかみにしようとする、分の勝つている所がある。いわば、この仕事はそつちが七分で、おれが三分、その三分がとこで、丹石流の腕前を貸してやるようなものだ。少しは恩に思つて貰いてえな」

「分つている、分つている……」周馬も、ここでお十夜に、グズられては困るので、またほどよく扱いながら、腰をすえて飲み始めた。

と。まっ白に塗つた湯女が、銚子の代えを持ってきながら、

「旦那様」

「なんだ」

「使屋の半次はんじが戻ってまいりました」

「たいそう早いな、連れてきてくれ」

湯女ゆなが出てゆくとすれ違いに、一人の男が入ってきた。

「ご苦労だった」と、周馬が言葉をかけて、

「頼んでやった者は、みんな来るといったらうな」

「ところが旦那——」と、使屋は、この寒いのに汗をふいて、

「お手紙を持って行つた賭場先には、どこにも、誰もおりませんです」

「フーム……どうして？」

「なにしろ、旦那、とても、神田一帯は火の海になりそうな騒ぎです。大概のお屋敷は、見舞を出すやら、火事頭巾でくりだすやらで、いくらのおんきな部屋でも、今夜ばかりは、人の影もございませんよ」

「なるほど——」いわれてみれば道理であつた。

「火事はそのなにひどくなつてきたか」

「ひどいのなんのつて、高台から焼け拡がったので、八方移りに燃えそうです。こつち側は昌平橋御門から佐柄木町すじ、連雀町から風呂屋町の辺りまで、すっかり火の粉をかぶっています」

「と、すると……」周馬は急に色を変えて、

「火元はどこじや、火元は？」

「なんでも、怪し火だという噂ですがね」

「怪し火？ フーム……して駿河台の、甲賀組の墨屋敷などは、かけ離れてもいるから、さしたることはあるまいな」

「どう致しまして、旦那、その怪し火てえのが、そもそも墨屋敷の、何とかいう古い家から出たんです」

「げっ！」と、仰天したのは、周馬ばかりか、お十夜も同様、カラリと手の盃を取り落して、言いあわしたようにヌツと立った。

「使屋、今の話に間違いはあるまいな」

「ええ、嘘なんざア申しませんが、このお手紙はどうしましょう」

「ウーム、弱った……」と、明日の手筈も急なら、今夜も急！ 周馬も孫兵衛も当惑した

が、それは、使屋に頼んでおいて出なおすことにきめ、二人はバラバラと喜撰風呂きせんの二階から駈け下りてきた。

怪し火とは気がかり、周馬の胸は、穴蔵部屋の財宝と、そこに押しこめてあるお千絵の安否に騒ぎ立ち、お十夜はまた、とり残してきたお綱の身が、もしやと心配になってきた。空を仰ぐと一面の火の粉！

二人は、肩をならべて駈けだした。

「ちえツ。しまった！」

護持院ごじいんケ原まで飛んでくると、周馬はそこで、茫然ぼうぜんと足を止めてしまった。

「ウーム、だめだ！ やっぱり火元は墨屋敷だった。今さら駈けつけてみたところで、間に合わねえ」

それを聞くと、お十夜も、ガツカリとして太い息を吐きながら、

「駄目だろうか」

「あれだもの！ ……」

周馬はいまいましたように、そこからあきらかに仰がれる高台の焰ほのおを指さして、

「無論、屋敷は焼け落ちてしまったさ」と、捨鉢すてぼちのように言い放った。

「——残念だな。すると……お綱はどうなってしまったろう。オイ」と急に思いついたように孫兵衛。

「あの、鏡の裏から、どこかへ逃げ道があったのか」ときはじめた。

「逃げ道などがあるものか。ないからこそ安心して、お綱を置いてきたのではないか」

「えッ、じゃ今頃は」

「灰になつてしまつたらう。ああ……そつちは女だけのことだが、この周馬の身になつてみる、多年心を砕いて、手に入れようと計つていた財宝と恋人、二ツとも一緒に失なくしてしまつた……」

泣かんばかりの落胆らくたんである。

と、お十夜が、不意にまた、

「オイ、周馬——」と呼びかけてきた。

「なんだ。おれはもう、返辞をするのもいやになつた」

「そうしよげるのはまだ早い。さっきの使屋の話では、火元は、墨屋敷から出た怪し火だといつた」

「ウム、怪し火だといった」

「その怪し火に、何か曰くいわがありそうじゃねえか。とにかく、ここでベソを掻いていたところで始まらねえわけだ、もう一息駈けだして、現場の様子を見た上の思案としよう」

「なるほど、それももつともだ」

くじけた元気をとりなおして、お十夜孫兵衛と旅川周馬、ふたたび、韋駄天いだてんの足を飛ばした。

鳶とびの光、火事頭巾、火消目付ひけしめつけの緋ひらしやなどが、煙にまじって渦うずまく中を抜けて、勸かんが学坂くざかから袋ふくろ町まちを突つつきり、やがて己おのれの棲家すみかまで来てみると、すでにそこは一面の火の海。

世阿弥よあみの家のあとを初め、二十七家の隠密組の屋敷は、あとかたもなく焼け落ちて、垣かき塙つぼを砕いたような余燼よじんの焰は、二人を嘲あざけるごとくメラメラと紫色に這っていた。

「ウム……」と唸うめいてしまったきり、二人は口もきかずに行った。

その紫の火の色は。

お十夜の眼には、お綱の焼け溶とろける火かとも見え、また、周馬の眼には、お千絵様の焼ける焰、惜しい財宝が、燃えきれずにいる火かと恨うらめしく映る。

「才、大変だ！」

いつか風が变つてゐる。ヒヨイと気がついた孫兵衛が、ふりかえつてみると、袋町を縫つた火は、下町へまで移りだして、まごまごしていると逃げ道を塞がれそうな形勢だ。

「それ、あぶねえぞ」

幻滅げんめつの悲哀を抱いて、火に追われた二人の悪玉は、足に力もなく走りだした。大樹があるので焼け止まった堤どてがある。そこをヒラリと躍り越えようと、落莫らくぼくとした冬木立の下に、サーツと響いてゆく水音が聞こえた。

柳原へ落ちてゆく、神田川の流れらしい。

バラバラ、バラバラと、揺ゆするたびに落ちてくる枯葉を浴びて、崖がけ伝づたいに下りてゆくと、そこは、太田おおた媛ひめ神社の境内であった。枯柳や梅にとり囲まれ、神田川の水にのぞんで、火事をよそに森しん深しんと更しけてゐる。

「おや!!」

崖から境内へ、ポンと飛び下りた孫兵衛は、何か、柔らかなものが足へ絡からんだので、それを手に拾つて、常夜燈のそばへ寄つて行つたが、一目見るとともに、

「やッ、こいつア? ……」

よみがえったような、また意外に衝たれたような唸き——。  
「なんだ？」

周馬が横から顔を出すと、お十夜は、手にしていたのをクルクルと丸めて、  
「畜生ッ。——やつぱり逃げたに違いねえ！」

腹立たしげに投げ捨てた。

見るとそれは、ところどころ火に焦がされた女の被布、浮織唐草の江戸紫は、まぎれもなく、お綱の着ていたものである。

火焰の中から、無我夢中で躍りだした万吉は、喪心しているお千絵様を肩にかけ、またお綱を励ましながら、ヤツとのことで、太田媛神社の境内へ逃げ下りてきた。

ここは、お茶の水の崖を屏風にしているので、火が森を焼き抜いてこぬ限りは、まず安全な場所であった。

ホッ……と一息。

万吉は、拝殿の前へ、お千絵の体を迂り下ろした。紅蓮に巻かれた苦しさで愕きの果てに、かの女は意識を失っている。

白<sup>しろぬめ</sup>統のかいどりにくるまれたまま、グツタリそこへ仆れる……。お綱は驚いて肌をさわつてみた。

肌は温かであった。美しい曲<sup>わきげ</sup>下の黒髪も、幸いにして焼かれなかった。

「おう、お綱——」と万吉は、すぐに気転を働かせて、

「すまねえが、御<sup>みたらし</sup>手洗の水を掬<sup>すく</sup>つてきて、お千絵様を介抱して上げてくれ。おれはその間に渡し船を探してくる。とても、この火事騒ぎじゃ、橋を越しちや行かれねえから」

「あい、よござんす——」

気を失っているものの、ここに凍<sup>こご</sup>えさせておいてはと——お綱は、お千絵の体へ、自分の被<sup>ひふ</sup>布を脱<sup>ぬ</sup>いで着せかけようとした。

で——初めて、気がついたのである。

「おや、どこで脱<sup>ぬ</sup>げてしまったのだろうか？ ……」と。

何を思い出すゆとりもなかった。お綱の頭は今のところ、何もかもが昏<sup>こんめい</sup>迷している。

万吉とても同じであろう、川<sup>かわべり</sup>縁へ駈<sup>か</sup>けだして行くと、無論、誰か持主のある物だろうが、委<sup>いさい</sup>細<sup>さい</sup>かまわずもやいを解いて、手頃な小舟<sup>やしろう</sup>を社<sup>やしろ</sup>の裏へ曳<sup>ひ</sup>いて来る。

その間に。

白い素足を闇に見せて、お綱は向うへ走つて行つた。御手洗に張つた薄氷を割つて、小柄杓こびしやくに水を掬すくつたのである。

気はいらいらと急せきながら、掬つて来た柄杓びしやくの水をこぼさぬように、お綱は小刻みに戻つてきた。

赤い空から地の闇へ、火の粉がバラバラと降つてくる——。火事はまだまださかんらしい。神田川は夕焼のようだ。

「あつ……」

柄杓の水がこぼれてしまった。

お綱の足もとへ、何かフワリとした物が、絡からみついてよろけたので——。

常夜燈の前だった。淡い明りが流れているので、ヒヨイと見ると、それは、自分の着ていた江戸紫の被布ひふであった。

「こんな所へ落したのか……」と、お綱は一目に思ったが、もとよりそれを拾う気はなく、小柄杓こびしやくを持つてもう一度、水を掬すくいに戻りかけた。

すると、その時だ。

ここに落ちていた被布を見て、先ほどから、しきりに人の気配を探っていたお十夜孫兵

衛が、常夜燈のうしろからヌツとうねりだして、

「むツ！ ……」

物もいわずに、お綱の襟えりをつかんでしまった。

「あつツ」と、お綱。

右手めでに持っていた小柄杓で、驚きの力任せに、かれの真眉間まみげんを狙ってヒュツと打った。

さつと、身をかわされて柄杓の首は、お十夜の柄つかに当ってパキンと割れる！

さらに、首の抜けた柄杓の柄えで、お綱はお十夜へ突いてかかった。が、身は綿のように疲れているので、苦もなくそれをもぎ取られた上に、ドンと一と突き飛ばされた。

乳のあたり！

お綱は、ふたたび起たつ力がなかった。精がきれて、罵ののしる声も出なかった。

「……………」

ただ、口惜し涙と怨うらみをこめて、カツと孫兵衛を睨みつけた。と、相手のほうも、女に反抗力がないことを知ると、ぬツと片手ふたこころを懐へ入れて、物もいわずにその姿を見すえていた、いわなくツても分っているだろう、フフン、ざまを見やがれ——というふうに。

何の悲鳴も立てないので、万吉は、こうとは知らずに小舟を曳ひいて、近くの岸へその縄

を絡からげていた。

と、誰かの躑あしおと音が、後ろを抜けた様子なので、ヒョイと振りかえってみると、総そうはつ髪にした若い侍が、いきなり拝殿の前へ寄つて、気絶しているお千絵の体へ手をかけた。

その人影は旅川周馬であつた。

万吉が、アツ——とおどろくまに、周馬は、何の拒こばみもない白いかいどり姿を横に抱いて、

「おい、お十夜！ そんな女一匹を持って余して、いつまでグズグズしているのだ」

とばかり、一方へ声を投げながら、自分は自分の恋人を取り戻して、一足先にスタスタと急ぎだした。

周馬だ！ 万吉はなんとなくこう思った。

「畜生ッ」

ブルブルツと身をふるわせて、

「焰ほのおの中から、命がけで救つてきたお千絵様を、うぬに、取り返されて堪るものか！」  
何の猶ゆうよ予があるものではない。

彼は、周馬の影が、ものの二十歩と拝殿の前を去らぬまに、一気に、うしろへ追いついた。

「待てッ」

ムズと、その腰帯をひつつかむ。

一振りふつてねじ倒すつもりだったが、周馬もさる者、どっこい、そうはさせねえと万吉の手を払って、横へ七尺ばかり、つつ——と体を避けたかと思うと、

「なんだ、てめえは？」

怖ろしい目で、万吉を睨めた。

あの総髪を風にそよがせ、美女の姿を引つ抱えた旅川周馬の影、その時、昔物語にでもありそうな悪鬼かなんぞのように見える。

万吉は、こいつの度胆どきもを抜いてやろうという気で、

「おお、おれは法月弦之丞様に頼まれて、お千絵様の蔭身かげみに添う万吉という者だ」

ふところの十手をつかんで、明らさまに名乗ってしまった。それで、ぎよつとするかと思うと、周馬は、鼻の先で、

「ふム……弦之丞の差さしがね金か」

「その弦之丞様が江戸へ帰ると、うぬの首も危なくなるぞ。悪いことはいわねえから、お千絵様を俺に渡して、今のうちに、どこかへ姿を隠す算段でもしやがれ」

「よけいなことを申すな」

片腹痛い——というふうには、旅川周馬、ゲタゲタ笑っているのである。

万吉はかツとなつて、

「野郎ツ、どうでも渡さねえといや、十手にかけても受けとるからそう思え！」

「だまれツ、察するところ、墨屋敷へ火を放つたのも汝なんじであろう」

「悪因悪果、天罰の火よ！ 呪のろいの火よ！ こうなるなア当り前だツ」

「よし！ そう聞く上はなおのこと、お千絵を渡すことはならねえ。弦之丞に逢つたら、いつてくれよ、世阿弥の娘のお千絵様は、旅川周馬が可愛がつてやりますとな」

「エエ、しぶといことを吐ぬかすな！」

「待てツ、万吉」

「くそツ——」とばかり、十手を真まつ向こうに飛びかかつてゆくと、周馬はまたも五、六歩逃げて、キラリと前まえ差さの小太刀こだちを抜いた。

片手に引つ抱えているお千絵の咽のどへ、その切きツ尖さきをピタリと向けて、

「おい」と周馬、万吉と切ツ尖きさきとを、七分三分の眼くばりで、

「下手へたにあがくと玉なしになるぞ。どうせ墨屋敷の財宝を灰にして、破れかぶれになって  
いる旅川周馬だ。さ、おれに指でもさすなら、差してみろ、その代りにや、貴様が一足ふ  
み出す前に、お千絵の咽笛のどぶえを突きぬいてくれる」

ハツと思つたが、万吉は、ただちにそれが、周馬の狡ずるい脅おどしにすぎないことをみやぶつ  
た。

「ふざけた真似まねをするなツ」

鋭い気構えを見せて、彼の小太刀を、十手で叩き落そうとしながら、ジリジリと近寄つ  
て行つたが、今度は旅川周馬、あとへも退ひかずにニヤリと白い歯を見せた。

と——思うといつの間にか、万吉の後ろへ、ぬうと立ったお十夜が、そぼろ助広に手を  
かけて、据物斬すえものぎり！ 息を計つていたのである。

あッ！

声と、剣と、孫兵衛の気合い。

三ツの力が瞬間にそこを割つて、ほとばしった孫兵衛の切ツ尖きさきから、あやうくも、髪  
の毛一すじの命拾いをした目明し万吉、

「ちイツ……畜生！」

齒<sup>はぎし</sup>軋りをかんだが、力の相違はぜひもなく、りゆうと、しごきなおしてくる孫兵衛の銀<sup>ぎ</sup>蛇<sup>んだ</sup>に追われて、タタタタ……と十歩、二十歩。

追い詰められた土壇場<sup>どたんば</sup>である。

「かつ！ ……」と、孫兵衛が口を曲げた。

含み気合いに斬りつけた、片手伸ばしの助広の切ッ先へ、ザ——ツと揚がったのは血けむりではなかった、神田川の水しぶき——。

足をすべらして、目明し万吉、真<sup>ま</sup>ツ逆<sup>さか</sup>さまに落ち込んだのである。大きな波紋<sup>なみぎ</sup>が蛇<sup>じゃ</sup>の目<sup>め</sup>を描く……。

それを見捨てて、お十夜と旅川周馬は、思いがけなく取り戻したお綱とお千絵とを、これからどこへ運んで行こうか——と、暗闇に立ってコソコソ相談しはじめた。

「お綱は？」

と、周馬は義理でたずねると、孫兵衛は刀を鞘<sup>さや</sup>に納めながら、

「ちよつと当身<sup>あてみ</sup>をくれておいた」

悦えつに入った顔である。もう、あの女はどこへ持つて行こうが、どうしようが、完全におれのものだと安んじているものらしい。

「それはよかつた。だが、万吉とかいう奴は？ ……大丈夫だろうな」

「なアに、この寒さだ。川の水を食らつて、たいがい凍こじえ死んでしまふにきまつている。

——ところで周馬、お前はその女を引つ抱えて、これからどこへ落ちつく気だ」

「なにしろ、かんじんな巢から焼け出されてしまったので、それにはこのほうも当惑たごいたした」

「まさか、お千絵様とかいう別べつ嬪びんを抱いて、そこらへ野宿もできねえしなあ」

「しかたがないから、一時、喜き撰せん風呂ぶろの奥でも借りて、そこへ隠しておくとしようか」

「永えことはおられねえが、それも一時の妙案だろう。女をきれいに洗い上げて、ゆつくり楽しむには誂あつらえ向きだ……。ウム。おれもお綱を連れて、一緒にそこへ落ちつくとしよう」

「だが、どうする、途中を？」

なるほど、いくら惚れた女にしても、あの通りな火事騒ぎの中を、背中に掛けて京橋まで歩いちゃ行かれなかつた。

「どこかで駕屋かじやを呼んでまいろう」

「待ちねえ。駕といやあ、さつきその鳥居とりいわき側に、提灯かんぼんが二つ見えていた筈だが……」

「えつ、駕が置いてあるツて」

「悪運の強い時には、何もかもトントン拍子というやつよ。ここは太田媛おたひめ神社の境内だ、神様は粹すいをきかして、呼んでおいてくれたのだろう」

「なにしろ、時にとつてありがたい。どこだ、その駕は？」

二人はノソノソと歩き出した。

周馬はお千絵を引つ抱え、お十夜は当身をくれたお綱の体を抱いている。

鳥居につづく玉垣の蔭、そこに、なるほど最前から、二挺ちようの駕がすえてあつた。

提灯は灯ともつているが、駕屋もいず、垂たれもシンと下ろしてあるところをみると、そこらへ来かかった者が、火事に道をさえぎられて、ここに避難ひなんしたものか、或いは、不用意にここへ来た矢先、周馬とお十夜の暴行をみて、ビックリして駕屋が逃げてしまったものであろうか。

なにしろ、二人にとっては、渡りに舟。

周馬は先に、その一挺の駕へ寄り、お千絵の体を垂たれの中へはねこんだ。そして、手早

く細<sup>ほそ</sup>曳<sup>びき</sup>を引ツぱずして、駕のまわりを蜘蛛<sup>くも</sup>手<sup>て</sup>にかがりだす。

と——後からお十夜も、その側にある駕へ寄つて、片手にお綱の体を支え、片手で何の気もなく駕の垂れをはね上げたのである。

するとその途端に。

駕の中からヌツと出た手が、不意に、お十夜の足をさつとすくつた。

一挺<sup>から</sup>が空<sup>か</sup>駕<sup>かご</sup>だったので、全く油断しきつていた孫兵衛、もろくも仰むけざまにひっくり返されたが、

「おのれ！」というと、助広を鞆<sup>さや</sup>走<sup>ばし</sup>らせて、地へ腰をつくと同時に、手ははね上がった駕のすだれを、パラリと虚空<sup>こくう</sup>へ向けて斬つていた。

「な、なに奴だツ」

さすがなお十夜孫兵衛も、立つて身構えを取りなおしたものの、語勢<sup>ごせい</sup>ははなはだしく乱れている。

「周馬、手を貸せ、手を！」

こうあわてて息まくと、旅川周馬も驚いた。いくら悪党<sup>あくどう</sup>づきあい<sup>ずる</sup>で狡<sup>ずる</sup>く立ち廻っているとはいえ、まさかにここでこの場をはずしもならず、また得意な詭弁<sup>ぎべん</sup>でゴマ化しているい

とまもない。

ぜひなく周馬、ギラリと一刀を抜きつれた。

「おお、心得た」

劍の光をジリジリとよじらせて、お十夜と共に、怪しげな駕かごを挟み打ちに、左右から肉迫して行つた。

で——二人は、中の奴が駕からヒヨイと出たが最後まで、充分大事な氣構えを取つておいて、さて何者だろうか？ と密ひそかに相手をうかがつてみると、向うの者は、一向静かなものごしである。

吾から、お十夜の足をすくい飛ばしたからには、それ相当な用意もあるべきに、ガタとも騒けしきぐ氣色がない……。

見ると、駕の中うちにいることはたしかにいる——一人の侍。

ゆつたりと駕蒲団かごぶとんに身を埋めて、怒りに燃えた二本の白刃が、身に迫りつつあることも、どこ吹く風かという様子でだ。かれは、深編笠ふかあみがさの紐ひもを結んでいるのである。

相手の者が、あまり落ちつきはらつているので、業ごうを煮やしたお十夜が、

「ヤイ出る！」というど、

「お、ただ今——」

皮肉な答えと一緒に、駕の中から一本の鉄扇てっせんが、ヌーと二人の間へ伸びてきた。

それにしたがって、侍の体が、周馬と孫兵衛の斬りこみに充分な要意を備えながら、徐々にすべと迂りだして駕の外へ立ち上がった。

孫兵衛の注文は見事にはずれてしまった。鉄扇の隙なき構え、立ち上がる間まの気配きくばり——どこにも斬りつける破綻はたんがない。

ちイツ……この野郎！ と孫兵衛は刀の背みねから鋭い目を通して相手を睨んだ。

「意趣いしゆか遺恨いこんか、何でおれの足をすくった！」

「だまれ」

「何をツ」

「なんで足をすくったと問われる前に、なんでこのほうの駕へ無断で手をかけたか、それをこのほうから訊ねたい」

「ええ、小癩こしゃくなツ——」と、応答の隙を狙って、周馬がいきなり切ツ尖きを飛さばしてしま

空を斬ると編笠の侍は、右手の鉄扇に力をくれて、旅川周馬の顔をハタキつけた。こうなつては孫兵衛も、大事をとつていられない。

「おのれツ」と叫んでそぼろ助広を振りかぶつた。——途端に、周馬を打つた鉄扇が、ポンと返つて、孫兵衛の目つぶしに飛んで来る。

顔をかわしたので、鉄扇は肩越しに通り返けたが、刹那に、手元へ躍つてきた深編笠が、孫兵衛の肱を平手で打つた。

「くそうツ」

勢いよくふり下ろしたが、切ツ尖の行き所は見事に狂つていた。あっ——と二の太刀、飛び退いて持ちなおそうとしたが、その腕首はもう相手にねばり強くつかまれていた。えい！ えい！ えい！ 二、三度もぎ離そうとしたが、離ればこそ、足を割り込まれて将棋倒れに、デンとそこへ組み敷かれる。

「周馬！ 周馬！」

苦しまぎれに助太刀を求めたが、相手が手強いと見たので、旅川周馬は、いつのまにか姿を隠してしまつてゐる。

「周馬ツ……後ろを、後ろを」

もがく孫兵衛を押し伏せて、深編笠の侍、ウム、と何かうなずいた。

「最前から、どうも覚えのある奴と思つたが……果たしてそうじゃ。汝はこの夏頃まで、住吉村のぬきや屋敷にいたお十夜孫兵衛という浪人者だな」

胆をつぶして、下から笠の裡を覗いた途端に、孫兵衛、思わずブルブルツと身をふるわせた。しまった！ そう感じたものらしい。右手に持っている助広の柄頭で、イヤという程、喉を締めている相手の腕を撲つた。

襟の力が緩んだので孫兵衛は死に身になつてはね返つた。と一緒に、突き飛ばした深編笠の影へサツと斬りつけたが、かれも咄嗟に尺ばかりな物を懐から抜いて受けとめた。

小太刀かと思えたが、それは銀磨きの十手である。もぎりへ迂りこんだ孫兵衛の刃が、鏘然として火を降らした。

と、孫兵衛は、腕の筋へ稲妻が来たように、ブルブルとしびれを感じた。十手のもぎりに刀を絡み込まれたのである。あつ！ と引っぱずしたがその刹那に、駄目だ！ 齒が立つ相手ではない！ こういう見きりをつけてしまった。

で、お十夜孫兵衛は、心に周馬の卑劣を憤りながら、やむなく、自分もそこを逃げだした。

編笠あみがさの侍は、野袴のばかまの土をはらって後ろに立っていた。そして周馬が念入りにからげておいた駕の方を差し覗のぞいて、

「才オ……やはりお千絵殿に相違ない」とうなずいた。

やがて駕屋を呼び立てると、その侍は、にわかになどどこかへ向って息杖いきづえを急がせた――

一挺の駕にはお千絵様の体をそのまま乗せ、後の駕には自身が乗って――

焰ほのおの空はまだ真まツ赤かだ。

駿河台すまがたいから蜿蜒えんえんと下町へのびた火は、その夜、川を越えて外神田の一角を焼き、東

は勸学坂かんがくざかから小川町の火消屋敷を舐なめつくし、丹後殿前たんごどのまえの風呂屋町、雉子町きじちようあたり

の脂粉しふんの町も、春を控えてみじめに焼けた。

その火の海を遥かにみて、お千絵様をのせた二挺の駕、牛込見附から番町の台へ上ったが、さて、それから先はどこへ行つたか、皆目行方が知れなくなった。

倅さいわいにして目明しの万吉は、墜おちた所が浅瀬であつたので、ヤツと河から這い上がって

きた。――けれどそこには、氣を失っているお綱の姿を見出しただけで、お千絵様の姿は遂に見えなかつたのである。

## 自来也靴

こんな日に、気まぐれな返り花が咲くのであろう。めったにない、暖かな冬日びよりである。神奈川かながわ宿しゆくの立場たてばを出て、少しあるくと、左は鴟もずの啼なく並木のままつづいて、右は松の途切れた所から、きれいな砂浜の眺めがひらけ、のたりのたりと波うつ浦が江戸まで六里。風が東南風とみえて、寒色かんしよくの海の青さもさまでには覚えぬ。ざこ場の小屋にも人影がなく、海草や貝がらや、蟹かにの甲羅などが陽ひに乾いていた。と、どこかで、一節切ひとよぎりの音が流れた……。

尺八は近くがよく、一節切は遠音とわねがいい。さて、どこの風流子であろうかと思うまに、その音はふツと絶えてしまった。

やがてであった。

ふと見ると浦づたいに、江戸のほうへ向つて、サク、サク、ときれいな砂へ草鞋わらじのあとをつけて行く、一人の虚無僧こむそうの姿がみえる。

一節切の吹き人ふてであろう。

それらしい竹を、紫金欄しきんらんの笛袋へおさめて、平ぐけの帯の横へ刀のように差しこんで、

そして、とある所へ立ち止まったかと思うと、かれの天蓋は、強い感慨に衝たれでもしたように、沖を眺めて動かなくなつた。

「おお、江戸が見える！……」

こうつぶやいたようである。

波に縫れ、波に散りひろがる陽のかげが、笠の下から虚無僧の顔へ映っている。白い腮、丹の如き唇——もつと深くさし覗くと凜とした明眸が、海をへだてた江戸の空を、じつとみつめているのであつた。

何を思い耽つているのか、美男の虚無僧、そこにややしばらく忘我の態で立っていたが、やがてまた少し足を早めて、スタスタと立ち去つて行く——。子安、生麦、鶴見、川崎——、浦づたいの道はそこで切れて、六郷川の渡舟——、乗合いの客はこんでいた。

「まったく、この年の暮へきて、えらいこつてございましたなあ」

「えらいにもなにも、お話にやなりませんて」

「いつたい、どこが火元だったのでしょうか？」

「さア、そいつはよく分りませんがね、なんでも怪し火だということだ」

「怪し火……ふうン、まア魔火でございますな」

「それでもなければ、あんな宵に、駿河台するがだいから外神田まで焼けツちまうなんて、ばかなことはありますまい。おまけに、小川町にはお火消屋敷があるんですからな」

合羽かつばをきた旅の者と、風呂敷づつみを持った手代ふうの男。どうやら話は火事のことらしい。

「ちよツと伺いますが」

舷ふなべりへあわただしく煙管きせるをハタいて、横から口をだしたのは、とちめんや北八きたといったよ  
うな、剽ひょうせん軽ひょうせんな顔をした男である。

「なんですか、どこかに火事でもあったんで？」

「知らないのかい、お前さんは」

「ちツとも。——いったい全体、その火事つてえのは、どこでいつの話なんです」

「ゆうべさ」

「へえ、ゆうべ？」

「しかも大火だ、おまけに目ぬきな神田から駿河台、あの辺のお屋敷町まで、この暮へきて焼け野が原だ」

「とすると——佐久間町あたりは、どんなものでござんしょう」

「まず、たいがい焼けたでしょうよ」

「ば、ばかにしてやがら」

「怒ったつてしようがねえやな。お前さん、やつぱり神田かい？」

「その佐久間町の四ツ角かどでさ。願掛けがんかがあつて、大山の石尊様せきそんさまへお詣りに行つてきたんですからね、冗談じゃありませんや、神詣りに行つた留守にまる焼けになつちまうなんて、そんな篋棒べらぼうなチヨボイチがあるもんじゃねえ。もし歸つてみてまる焼けになつていたら、この正月を控えてどうするんだと、女房子をつれて石尊様へ掛合かあひに行かなくツちやならねえ。ねえ虚無僧ぼろんじさん——そんなものじゃありませんか」

と、側に腰をかけている虚無僧の方へ向つて、その笠のうちを覗のぞきこむようにいった。

渡しが六郷へつくと、舟の客はわれがちに陸おかへ上がった。神田大火の噂——駿河台も焼けたという話——などを小耳にはさんで、不安らしい色を浮かべていた虚無僧も一番あとから渡舟場わたしほを上がつてきた。

そして、蒲田かまた、鈴ヶ森、浜川と足を早めて、一步一步と江戸の府内へ急いでゆく。

心なしが浜川の海岸へ立つて、ふたたび、江戸の方角をみると、大火の余燼よじんがまだ残つ

ているのであろうか、どんよりした黒いものはるかな空をおおっている。

なんとも案じられて堪らなくなったかのごとく、品川へかかるやただちに宿役人しゆくやくにんらしい者の溜りたまの前に立って、

「ちと、ものを伺いまするが……」

と天蓋てんがいの縁へりへ指をかけた。

「はい、なんでございますな」

「昨夜御府内に、大火がありましたとやらでござるが……」

「さよう。ございました」

「駿河台の辺はどうでございましょう」

「焼けました」

「お茶の水の上にある組屋敷は？」

「組屋敷……というと？」

「大府だいふの隠密方、甲賀組の家ばかりがあります所で」

「おお、あれも皆焼けたそうです」

「えっ、焼けましたか」

「そんなふうで」

「ウム……」と思わず太い嘆息ためいきをもらして、茫然ぼうぜんとしてしまった。

この虚無僧こそは、いうまでもなく法月弦之丞のりづきげんのじょう、かれであつた。

大阪表から東海道へ下つてきた——。かなり急いできたのである。

禅定寺ぜんじょうじ峠の上で、あえない死を遂げた唐草銀五郎からくさぎんごろうの真心にうごかさされて、初志をひ

るがえした弦之丞は、まず、安治川の蜂須賀家の様子をほぼ見届け、阿波守が帰国する船出までを確かめて大急ぎに、江戸へ引つ返してきたのである。

江戸には、先に万吉をよこしてある。いづれ万吉はもうお千絵様ちえと会つて、銀五郎があなつたことや、また自分が来るべきことを、とうの昔に話して手筈をしているだろう——とばかり思つてここまで来た。

意外や、その墨屋敷は、前の夜の怪し火とやらで焼失したという。

もしお千絵殿の身に異変いへんがあつたら、すべては水泡すいぼうに帰してしまふがと、彼の心は気が気ではなくなつた。何のために、二度と足をふむまいと誓つた江戸へ、急いで帰る必要があるか、弦之丞の奮起はまったく徒労にならねばならぬ。

そうだ、かれは江戸へ帰るべき筈の人でなかつた。終生、旅で暮らそうと誓つていた弦

之丞である。銀五郎が死の刹那に、ああまでの熱と俠氣とを見せてすがつたればこそ、では——と、お千絵様のために、かれの意思をついで起つたのだ。でなければ、まだ五年も十年も、いや、あるいは死ぬまでも、一管の竹にわびしい心を託して普化の旅をつづけて終るつもりであった。

がしかし、神奈川の浦に立ち、品川の海辺に立つて、江戸の姿を眺め、だんだんと御府内へ近づいてゆくにつれて、かれはなんともいえぬ愛着をよびさましていた。やはり郷土というものには、母性のような魅力がある。そこには仇があり、迫害があり、うるさい情実や陥穽があるにしても、土地そのものだけに懐かしみずにはいられない力がある。ではなぜ、そんな親しみのある江戸を捨てたのであろう？

二度と、帰るまいとまでして、かれは求めて漂泊していたのか、深い理由がなければならぬ。

それは、なすべからざる恋をしたためにである。お千絵と恋をしたことが、かれを余儀なくそうさせた。

お千絵と恋をしたことが、なぜいけないかといえ、かの女は甲賀組の娘である。幕府の政策として、隠密方の者は、必ず、同役以外の者とは縁を結べぬ掟であった。

笹の間詰、お庭の者、などと称される隠密の役は、駿河台の甲賀組、四谷の伊賀組、牛込の根来組、こう三カ所に組屋敷があつた。

いづれも柳營の出入り自由で、將軍家と会う時も、笹の間かお駕台とよぶ所で、直問直答のならわしである。いわば当時の御用探偵で將軍自身のささやきをうけて、疑わしき諸国の大名を探りに出るのであるから、一倍その機密のもれるのをおそれたのだ。で、この三組の者にかぎつて、同役以外の家すじとの養子縁組が固く禁じられて、みな神文血判の御誓書を上げてある。

だのに——お千絵は恋をした。

弦之丞にとつても、それは、なすべからざる恋であつた。

その恋は、旅川周馬に呪われて幕府の耳に入ることになり、かれが江戸に止まる以上は、かれの父法月一学の家も、またかれ自身も、恋人の身も亡びることになるのであつた。弦之丞が虚無僧寺にかくれ、そのまま旅へ去つたのは、こうした切ない理由からであつた。

「とにかく急いでみるに如くはない。御府内へ入れば、なお詳しい様子も分り、いづれお

千絵どのの安否もおよそ知れるであろう」

弦之丞は、茫然ぼうぜんと気ぬけのしてゆく、吾とわが心に鞭むちを打った。

江戸朱引内しゅびきうちの境、八ツ山下の木戸を通りこえたのは、やがてその日の七刻過ぎななつ——。こうして、法月弦之丞は、いよいよ江戸へ着いたのである。

旅川周馬の脅威。

お十夜が恋の仇と寝刃ねたばをとぐ彼、そして、お綱の思いあくがれている彼の姿が、江戸の地へ立ったのである。

すると。

「おお、弦之丞だ」

と一歩、かれが江戸へ入るとすぐに、こういつて、その姿を凝視ぎようしした者がある。

その男は、高輪岸たかなわぎしの支度茶屋したくに腰かけて、午ごろひるから、しきりに往來を見張っていたのであるが、弦之丞の過ぐるを見ると同時に、

「これ、茶代は置いたぞ」

あわててそこを飛びだした。

とも知るや知らずや、弦之丞は大木戸から裏通りへ入って、三田から芝のほうへ急いだ。

後からそれをつけて行つた者は軽捷な旅いでたちで、まず服装のいい武芸者という風采、野袴を短くはき、熊谷笠をかぶり、腰には長めな大小をさし、それは朱色の自来也鞆であるように見られる。

弦之丞が右すれば右へ——辻で立ちどまれば止まり、歩めばそれに従いて歩みだすのである。いわゆる影の形に添うごとく、どこまでも後をつけまわして行つた。

その者こそ、蜂須賀阿波守から、弦之丞を刺殺せよと命ぜられて、大阪表から後になり先になつて、ここまで尾行してきた原士の天堂一角だ。

五十三次の宿駅をこえてくる間に、かれは幾度か、弦之丞の身に接近したが、遂にここまで斬りつける隙がなかつた。

一角の目算はずれていた。

相手の姿が江戸の雑沓へまぎれこむと、容易に討ち難くもあり、影もくらまされる怖れもあるので、ぜひとも、東海道を旅する間に、討つてしまふつもりでいたのが——どうそれを果たされなかつた。

「今日こそ、どこかで——」

一角の殺意はしきりと動いていた。折から相手の弦之丞は、都合よく人通りのある道を

避けて、芝の山内へ歩いてゆく様子——、増上寺の山内は、もうドツプリと暮れていた。

と——先にゆく弦之丞は、

「また一角がつけて来るな……うるさい奴」

と、舌うちをした。

かれは後から身を狙っている刺客のあることを、とうに覺つていたのである。

「——はて、どうしてくりよう」

撒いて影をくります思案をしているらしかった。ヒヨイと立ち止まって後ろを見る——、と、後ろの一角も、素速く足を止めて物かげへ身を潜めた。

途端に、弦之丞は、何思つたか、増上寺の門内へ、ツイと身をひるがえして駈けこんだ。以心伝心。

その挙動が飛鳥のようだったので、天堂一角はハツとした。

「あつ、これは油断がならぬ。弦之丞めは感づいているのだ。うぬ、見のがしてなるものか——」

早足に駈けだしてきて、石段の下へ身を潜め、そつと、中へ入った影を見送ってみると、そこは通りぬけのならぬ道だと知つたか、弦之丞らしい白衣天蓋の人影が、ふたたび

こつちへ戻つてくる……。

「おお、今だ！」

と考えた一角は、ヒラリと山門の外に身を寄せて、刀の柄つかいと糸へしめりをくれた。

ピタリ、ピタリ……とこつちへ戻つてくる人の蹙あしおと音。……と何気なく山門の外へ、ひ

よいと白い人影が出てきたので、天堂一角が、躍りかかつて、一刀の下もとに斬つて伏せた。

「うツ——む……」

といつて白衣の影は、肩の傷手いたでをおさえたまま、天蓋をあおむけにして、よろよると石畳の上へぶつ仆れた。

夜気にただよう血ちなまぐ腥さい闇の中に、斬つて曳いた一角の白刃しらばと、しめた！ という笑えみに歪ゆがんだ顔とが、物凄く泛ういて見えた。

不意を狙つて、見事に相手を斬つて仆したことは仆したが、いかにも、無造作だったことと、弦之丞にしては、余りにもろかったと気がついて、天堂一角、

「や、これは、いぶかしい」

と、すぐに自身の得意をあやしみだした。そして、虚空こくうをつかんで仆れた者の側へ、血

刀をさげてソツと寄つて行つた。

違つてゐる。

虚無僧には違いないが、それは似ても似つかぬ別人であつた。

とすると——弦之丞は、折よく山門の中から出て来る虚無僧があつたので、尾行の眼をくらますために、わざと姿をそらしたに違いない。

「ええ、騙たばかられた」と一角は、われとわが不覚ののしを罵りながら、地団駄をふんで、ふたたび相手のかけを血眼で探しはじめた。

そのころ。

一方の法月弦之丞は、御みたまや霊廟のわきの築ついで土をヒラリと越えて、もうとつくに、芝の山内を駈け抜けていたのである。

「まず、これで一角の目も、当分の間は、自分を見つけたせぬであろう」と、かれの心は爽さわやかに晴れていた。

そして、疲れと寒さをこらえながら、その夜のうちに、駿河台まで辿たどつてきた。見るにたえない焼け跡のさまが、荒こうりよう涼として彼を迎えたのみである。

墨屋敷のあともなければ、お千絵様の姿もない……。

ここまで来たら、その人の安否や、難を避けている所も聞かれようかと、かすかな望みをつないできたのも空むなしかった。

余よじん燼は消されつくしても、まだ人の不安と怖ろしい昨夜ゆうべの騒ぎは消えていない。火消改めの提ちようちん灯ちんだの町与力まちよりきの列だの、お布施米ふせまいの小屋だのが、大変な混雑である。

その血眼の人たちに、お千絵の消息をたずねたところで、もとより分かる筈がないのは知れていた。で弦之丞は、「ぜひがない……」と、空しい諦あきらめの心をいだいて、何物もない闇を茫ぼうぜん然と見つめていた。

すると、自分の立っている所から、四、五間ほど離れた所にも、同じように、茫然たるかたちで、立ちすくんでいる者があつた。

二人の侍である。

二人は腕ぐみをして突つ立つたまま、石のように肩を並べて、いつまでも、黙もく然ねんとして焼跡を眺めていた。

そのうちに、チラ、チラと白いものが空から落ちてきた。

雪である——牡丹雪ぼたんゆきが降つてきた。

でもまだ、向うの二人は立っていた。弦之丞も立っていた。

「ウム。そこにいるのは、やはり家を失ったこの辺の組屋敷の者であろう……。同じ甲賀組の者とすれば、多少のことは分るかも知れない」こう思って、弦之丞は、しずかに側へ歩み寄った。

「少々、おたずね致しますが……」

二人の侍は虚無僧ずれの会釈をうるさく思うのか、または、焼け出された憂うれいに暗然としていて耳に入らぬのか、それにも答えず、チラチラと、顔や袖にかかる雪も払わずに立っていた。

「おたずね致しますが……」

もう一度こういうと、

「なんだ」

と、にべもなく、端の一人がふり向いた。

「まことに失礼なことを伺いますが、やはり貴公方は、甲賀組のお武家でござりますか」

「なに？」

「焼けた組屋敷のお人でござるか」

「そうだ」

「おお、それならば、或いはご承知ではござりますまいか？ ……」

「何をじゃ」

「組屋敷のうちでは第一の旧家——世阿弥殿よあみの娘お千絵と申す者の行方を？」

「や、お千絵を！」

「はい」

「貴様、たずねているのか」

「いかにも」

と弦之丞が、ふと天蓋てんがいの小縁こべりをあげて、その侍の顔を覗のぞいた刹那である。

ほとんど、双方が一緒に、

「おお！」

「あっ！」

とおどろいて、火と水とが触れ合ったように弾はじき返った。

と——弦之丞が、次の言葉をかける間もあらばこそ、怪しげな二人の侍——霏ひ々とふる雪のあなたへ、脱兎だつとのごとく逃げだしてゆく——。

家のうつばりがミシリミシリと軋きしむほかは、音もなく降り通していたゆうべの大雪。今朝は厚ぼったく積っていた。

カラン、カタンと、小桶の音。

喜撰きせん風呂のざくろ口には、もう湯気の中に洒落本しやれほんのだじやれをまる呑みにしているよ  
うな、きぎで通つうがりで、ケチで、色男ぶった糸びん頭の怠たけ者が、ふさ楊子ようじをくわえて真  
つ赤にゆだりながら、

「アアいい気持だ、どうも、こたえられねえ」

「朝風呂はオツでげす」

「この雪を見ちや、また今日も帰られませんて」

「おぬしの買った女はなんとという湯女やっだっけ」

「エへへへへへ」

「いやに納まつてるじやねえか。浅黄あさぎはおよしよ」

「どうも、すみません。なんしろここに来ると、めつきり瘦やせてしまうんで、やりきれませんて」

などと、神田界隈かいわいでは、この大雪に焼け出された人々が路頭こごに凍えているのも思わず

に、いけしやアしやアと、気のいいことを吐かしている。

客を相手に夜をふかして、まだねむたげな湯女たちは、しどけない寝乱れ姿で板の間の雑巾がけ、暖簾口の水そうじ、雪をかけたあとへ盛塩を積んで、

「オオ寒い、まだ降ってるよ」

とあわてて重い戸を閉める。

朱塗の広蓋へ、ゆうべの皿小鉢や徳利をガチャガチャさせて、またそこへ、だらしない女が二階から持って降りてくる。

「どうしたの、奥は？」

「まだ寝ているんだよ」

「今日もいるつもりかしら？」

「なんだか知らないけれど、二人とも、神田で焼け出されて宿なしになったんだから、ここで正月をするっていつていたよ」

「ああ、そういえば旅川さん、あの人は駿河台とかいつていたから、ほんとに焼けだされてしまったのかもしれない」

「だけれど、もう一人のお十夜さんとかつていうお浪人、何だろああの人は、気味の悪い

お侍だね」

「額風呂がくぶろへきて泊りながら、ちつとも風呂へ入らないじゃないか」

「なに、入ることは入るんだよ。だがね……それもいつでも仕舞風呂しまいぶろさ、そして流しの戸口を閉めきつて、誰もいない時にだけ入るんだから、まったく妙ちくりんじゃあないの」

「だれ？ あの人へ出ているのは」

「いやだね、まア」

「あら、お前さん」

「ああ」

「よかったね」

「おからかいでないよ、ひとを！」

「だって、まんざらな男振りじゃないじゃあないか」

「だれかに代って貰いたいよ」

「どうしてさ」

「怖こわくつて……なんとなく怖こわくつて」

「人みしりをする柄がらでもない癖に」

「だけれど、恐ろしい声をだして寝言をいうんだよ。女の名を呼んでね、そうかと思うと、人でも斬りそうな呻き声を出すし……。まだそればかりじゃない、あのお十夜頭巾を、寝てまでとつたためしがないんだもの……」

梯子段をふむ音がしたので、二人の湯女はびっくりして奥のほうへ隠れてしまった。だが、そこへ来たのは噂をしていた者ではなく、丹前を着た別なお客、太り肉でいい年をして、トロンとした目で手拭を探している。よくもよくもこの家の軒下には、やくたでもない人間ばかりがたむろをしているとみえて、ひよこひよこ出てくる者が、一人としてロクな人物ではない。

ひとつ二階を覗いてみようか。

梯子を上がると鑑文部屋、ビタモン部屋というのは小銭百文か二百文で湯札を買って、半日ここで湯気をさまして遊んでいる、金にならないお客をさす湯女の悪口。碁、将棋、貸本、細見などが散らかっているが、ここは七刻限りといって夕方は追い出しとなり、夜は屏風を立て廻して、ボロ三味線に下手な甚句や弄齋節がはじまるのである。

あとは小部屋がいくつもある。

その一番奥のかけ離れた二間つづき、裏梯子があるので人と顔を合せずに出入りができ

るので、喜撰きせんでは特別いい部屋としてある。

そこには、お十夜と、そして周馬。

いろんなことのあてが外れて、少しばかり、やけのやん八気味——けさもまだ起きないで、

「雪の一丈もふればいい」

と、フテ寝をしている恰好である。

「おい、周馬」

夜具の中から首をだして、こういったのはお十夜である。体を腹ンばいにして枕の上に顎あごをのせ、朱羅宇しゅらうのきせるで、

「まだ寝ているのか」

と側そばにいる周馬のふとんをソツと突いた。

湯女ゆなの開けて行った小窓の障子は、こんにやく色に明るくなっているが、世間の音もない雪の日は、朝とも昼ともケジメがつかない。

「もう眼をさましたらどうだ」

「という、不承不承に、

「うむ？ ……」

と周馬は、ふとんを猫の背のようにして、ムクムクとこつちを向いた。

総髪そうはつの毛が寝くたれて、にきびだらけの顔の脂肪あぶらにこびりつき、二日酔いの赤い目を、  
 渋そうにしばたいたかれの顔は、けだし女性に好意をもたれる顔でなく、いかにも手の  
 つけられない都会の青年武士が、恋と慾の幻滅で、やけのやん八、どうでもなれという顔  
 だ。

まだその時代には、耽溺たんできという字がなかった。だが、そんな按配あんはいが二人の今の気持  
 だろう。

「どうだい、お十夜」

「なにが」

「考えついたかつてことよ」

「ウム、あいつか」と、煙管きせるの口を前歯に鳴らして、

「やっと思いついた、分ったよ」

こういつて後は眉をしわめたまま黙ってしまった。

あいつという符牒ふちようは、無論、大火の夜に、駕かじのなかからヌツと鉄扇を出した侍を指すので、それを考えあぐねていたのである。

「分つたと？」と周馬がやつと眼をさました声を出す。

「ウン」

「誰だ。なにせよ、よほどの腕達者だ」

「ありや、常木鴻山こうざんという、もとてんまよりき一元天満与力をしていた奴にちげえねえ」

「ふウン。そいつが、何で江戸表へ来ているのだ」

「おれにも合点がゆかねえが、たつたいつペン……そうだ、住吉村のぬきやの巢にいた時、あいつに踏み込まれたことがある」

「とすると、何かを探しに来ているのかな」

「まさか、俺をつけているのもあるめえ」

「しかし、お千絵とお綱の二人は、いったいどうしてしまつたらうな。そのほうが眼目だ」

「あの後で、太田媛おおたひめ神社の境内へ行つてみたが、駕もなければ二人の姿もみえず、まったく、何が何やら判断がつかなくなつた」

「その鴻山とかいうやつが、どこかへ連れて行つたのではないか」

「まずそう考えるより思案がない」

「弱ったなあ」

「当分はお綱の行方を探し廻らなけりやならねえ」

「身どもはお千絵をつきとめる」

「わかるかい」

「広いようでも江戸の中なら、きつと知れるにきまっている」

「じゃあ、余りあせらぬことにしよう」と、孫兵衛、腹ばいがくたびれたので、ゴロと仰むけに寝ざまを変えたが、まだ起き出そうという気は出ずに、じつと天井へ眼を向けている。

周馬も、それを真似まねして仰むけになる。

しばらくは、どっちからも口を開かず、沈思黙考、天井板と相談をしているというふうである。

雪の日だ。悪智をめぐらす頭も、自然にシンと落ちついてくるらしい。

「ウーム……」やがて周馬がこう唸うなった。

「どうした？」

「凶兆歴々。どうも吾々の前途は暗いな」

「ばかいやがれ」

お十夜が、肯ぜない。

「イヤしかし、ゆうべも焼け跡で、現に、法月弦之丞の姿を見かけたではないか」

「あんなに肝を消して、逃げる奴があるものか。そっちが泡を食って駈けだしたので、おれまで釣り込まれてしまったが、今度いい折があつた時は、叩ツ斬つてしまふことだぜ。いいか周馬、また逃げ腰にならねえようにな」

「ムウ……」といつて目を閉じたが、旅川周馬、悪党のくせに大火以来、また、弦之丞の姿を見たりしてから、少し神経衰弱のきみで、スツカリ気をめいらせてしまった。

空しい日が幾日か過ぎて、いよいよ年の瀬も押しつまつてきた。喜撰風呂の奥にいるお十夜と周馬は、弦之丞を討つ機会をつかめずお綱やお千絵の消息も知れずに、ただ、いらいと暮らしている。今日も二人は酔つていた。そのご機嫌を見計らつて、取りまきの湯女のお勘とお千代が、しきりに浅草の景氣をそそつたので、つい、駕を四つあつらえてしまった。

茶屋町で駕を降りる——そして二人は二人の湯女を連れて、いい身分でもありそうに、

仲店なかみせから観音堂の界限かいわいへわたる、羽子板市はこいたいちのすばらしい景氣ふんいきの雰圍氣ふんいきにつつまれて行つた。

「あら、いいこと」

「もう、ふるいつきたいねエ」

「成田屋の暫しばらく——」

「あたい、浜村屋が好きさ、菊之丞きくのじようの女鳴神おんななるかみ——当たったねえ、あの狂言は」

「佐野川万菊さのがわまんぎく、悪くないね」

「あれは？」

「宗十郎じゃないか、梅の由兵衛よしべえだよ。あの由兵衛のかぶっている頭巾ずきんから、宗十郎頭巾というのが、今年の冬たいへんな流行はやりになったんだとき」

「オヤ、お十夜さんみたいだね」

湯女のお勘とお千代が、こくめいに、端から一軒ごとに見て歩くので、周馬と孫兵衛は、つまらない所へ来たものだと、今さら人に揉もまれて後悔こうかいしている。こういう所へ来ると、女を連れてきた男は、いつも女の随ずいぞく属ぞくになって、吾ながらテレた顔を撫なでているよりほかはない。

「あれは誰だろう。見かけない役者だねえ」

お勤がまた立ち止まって指さしたのを、不思議に、お十夜だけが知っていた。で、少し得意に、

「あれか、ありや大阪のあねがわしんしろ姉川新四郎よ」

「自来也ですね」

「新四郎の自来也ときては、もう古いものだ。今頃江戸の市へ出るなんて……」

「へえ、そんなに当たり役？」

「あの押絵おしえの自来也がさしている朱塗の荒きざみの鞆さやは、新四郎の自来也が舞台でさして流行はやらせたものだ。で、阿波の侍でもさしている者がある」

「おや、じゃあお十夜さんの故郷くには、阿波なんですね」

「はははは……つまらねえところで、お里を出してしまったものだ」笑ってそこを立ち去った。

奈良茶飯ちやめしか何かへ寄って、まだ少し早い支度をすましてから、観音堂を一周りして、さて、帰ろうかと、雷門から並木の方へブラブラと出てくると、湯女のお勤が、

「あら、さっきの人——」とつぶやいた。

わき見をしていた周馬が、それを聞きとがめて、

「だれだ、さっきの人というのは」

「いいえ、羽子板の自来也が歩いて行くから——」と、他愛のないことをいつている。

「なんだ、くだらない」

「だって、そっくりじゃありませんか、あの前へスタスタ行くお侍の姿が。笠といい、袴はかまといい、そして何より差している刀が、押絵にあつた自来也ざや靴くつと同じ物ですよ」

「そういわれてみると、江戸には見かけぬ珍しい朱靴しゆざやを差している」

「押絵が、抜けだして、市いちの景気に浮かれているんじゃないかしら……」

「まさか」と、お千代も周馬も笑ってしまった。

だが、孫兵衛は笑っていない。

お勘の見つけた自来也靴ざやの侍を、じつと見つめていたかと思うと、にわかにな、

「周馬、おれはここで別れるから——一足先へ帰ってくれねえか」

プイとそれで、人と人との間を縫いながら、暮れかける町を足早に行く、自来也靴のあとをつけて行った。

「オイ、天堂一角」

ふいに、肩を叩かれたので、

「おう」と、少しびつくりして振りかえった自来也鞘の侍。

くまがいがさ熊谷笠を横に向けて――、この江戸表にこう親しく呼びかけられる者はない筈だが、  
けげんと怪訝そうにしていたが、

「ウム。せきやまごべえ関屋孫兵衛か」

と膝を打つて、きびす踵をめぐらした。

関屋とはお十夜の本名である。かれも元は阿波の原土はらしであるから、天堂一角とは、その  
当時の剣友か飲み友達であるらしい。

「奇遇きぐうだなあ」

「変ったなあ」

同じ言葉を投げあった。

「珍しい……何年ぶりになるであろう」

「もう、ざつと一昔だろう。なにしろ、おれが阿波を飛びだしてから、ぶらついているのも七、八年だ」

「では、いまだに御浪人か」

「不思議に食えてゆけるものだから、ツイ、この着流しがやめられねえのよ」

「縮緬ちりめんぞつきに雪駄せったばきかなんぞで、たいそうりゆうとしていないか」

「どうして、ふところ手をしている代りにや、暮がきても米一粒あての的はねえ身だ。なかなか苦労があるんだよ。は、は、は、は……。そりやそうと、九鬼弥助、森啓之助、あの連中はどうしているな？」

「弥助はこの秋、禪定寺ぜんじょうじとうげ峠という所で、間違いがあつて落命らくめいいたした。だが、森啓之助の方は、只今お国詰くにづめで相かわらずにやっている」

「そうか——そして貴公は」

「どうして分つた？」

「あまり江戸で見かけない、自来也鞘をさしているの、ちよつと、ハテなど目をつけたのよ」

「ウム、なるほど、これは自分でも気がつかずにいたが、そういわれてみれば悪く目立つの」

「目立つたほうがいいじゃねえか。この江戸表という所は、劍術使いは使い手らしく、い

「い女はいらしく、何でも人に目立たせなけりや損な所だ」

「それでは少し都合が悪い。実は、少しつけ狙っている者があるのだから」

「ふうむ……だいぶ話が面白そうだ。じゃあ一角、貴公は仇討かたきうちにでも出ているのか？」

「なにさ、そんな読本物の筋ではない」

「じゃあ、どうなんだ」

「ちと、手軽には、話しかねる」

「水くせえことはよそうじゃねえか。おれも昔の関屋じゃねえ、お十夜孫兵衛とかつてい  
う、妙な通り名をつけられて、少し垢抜けあかぬをしかけている人間だ。やくざ者はやくざなりに、  
打ち明けてくれりや、力にもなろうし、儲かることなら乗ってもいいし、また縁のな  
い話なら、口外ご無用、それでアバヨとしようじゃねえか」

「それは、話さぬと申す訳ではないが、殿様より直命じきめいをうけてまいった大事……路傍ろぼう  
はちと畏れおそ多い気も致してな」

「と、いわれると、なお聞きたい」

「実は、お家にとつて、生かしておけぬ一人の男をつけてきたのじゃ」

「男だけでは分らねえが……それは？」

「——法月弦之丞というやつ」

「おい！」

いきなり腕くびをつかんできたので、一角はぎよツとした。

「なんだ」

「法月弦之丞？」

「いかにも」

「ちよツとこつちへ寄ろうじやねえか。ここは土手へ出る馬道の本通りだ、吉原へゆく四ツ手や人通りが多くつて、おちおち話もしていられない」

と、手を引つ張つて、人気のない所へしやがみこんだ。隅田川の西河岸である。

猪牙舟がのぼる——猪牙舟がくだる——。

吉原がよいの舟である。

川向うは三囲の土手、枕橋から向島はちようど墨絵の夕べである。宵闇を縫つて、

チラチラ飛んでゆく駕の灯も見えだしたが、まだ空も明るく川も明るかった。

陸へ上がった水鳥のように、そこへしやがみこんだ十夜頭巾と自来也靴。

だいぶ話に実が入つたとみえて、陽の落ちたのを忘れていたが、やがて孫兵衛が、

「いや、そういうわけか……」

と、聞き終つて、腕組みをした両の袖に、三ツ鱗の紋が白く浮く。

「今話したこと——なにせよ、阿波の大秘事でござる。必ずとも、他言してくれては困る」  
「浪人はしても、おれも元は阿波の原士だ。なんで国元の秘密をペラペラしゃべるものか」  
と、お十夜も、一角の口から大阪表のことを、聞けば聞くほど不思議な思いに、たえなかつた。

旧主の阿波守をめぐつて、影絵のごとく動いている、法月弦之丞をはじめ常木鴻山や目明しの万吉や、それはみな、自分と妙な因縁をもっている者ばかりで、一角の話がいちいち自分の過去であるのが妙である。

それのみか。

聞けば天堂一角も、阿波守の内命を受けて、どこまでも弦之丞の命を絶たんだために、この江戸表までつけてきたのだというから、かれはいよいよ驚きもし、また乗気にもなった。これはまったく、何かの巡りあわせみたいなのである。——旅川周馬、天堂一角、そして、おれ自身——期せずして弦之丞を殺害せんとする者が、ここで三人数えられる。い

よいよ事<sup>こと</sup>成<sup>じょう</sup>就<sup>じゆ</sup>の前兆だ。

これは一つ、天堂一角に出世の蔓<sup>つる</sup>をつかませる態<sup>てい</sup>にケシかけて、喜撰<sup>きせん</sup>風呂へ連れこんでやろう——こうお十夜は考えた。

そこで周馬にひきあわせる。

ざツくばらんに話しあう。

話は早いだろう——目的は一つだ。

弦之丞を、暗殺か、惨殺か、どっちみち片づけてしまうことが、三人ともに一致しているから、すこぶる都合がいい。

ばらした上の報<sup>ほう</sup>酬<sup>しゆう</sup>は。

おれはお綱を自由にする。周馬はお千絵を探して勝手にするだろう。そして一角は、国元へ帰つてこの由を阿波守へ報告する。莫<sup>ばくだい</sup>大な恩賞と加増<sup>かぞう</sup>と面目をほどこすのは分りきつたこと、これもずいぶん悪くない。

「うむ、一角」

「なんだ」

「その話なら安心しろ」

天堂一角は、まだ自分の目的を洩らしたただけで、孫兵衛のほうの話はきいていないので、何を安心しているのか分らなかつた。

「三人組だ。おめえと俺と旅川周馬と」

「周馬？ それは一体何者なのだ」

「まあいいから、俺と一緒に桜新道さくらしんみちの喜撰風呂呂まで来るさ。そこでその男にもひきあわせるし、うまい相談もしようじゃねえか」

「いや、拙者は一刻も早く、見失つた弦之丞の宿だけでも突きとめねばならぬせわしい体、これでご免をこうむるといたそう」

「野暮をいうなよ、湯女遊ゆなびをすすめるのじゃねえ、底を割って話すと、この孫兵衛も、そこにいる周馬という男も、少し仔細しさいがあつて、弦之丞めをつけ狙つていたところなのだ」

「えつ、きやつを？」

「だから、ひとつ三人組で、それを相談しようというのだ」と、熱を上げて説きつけていると、ちようどその河岸ツぶちへ、バラバラと駈け寄つてきた二人の子供。

見ると、お獅子の姉きょうだい弟いである。

きょうも角兵衛を稼いで、家へ帰る途中だろうに、そこらの小石を拾い取つたかと思う

と、

「——ニアつ切った——」

「三ツ切った！」

「——こんどは四ツ」

掬すくい投げに小石を打って、その小石が川の面おもてを、つツ——つツ——と千鳥に水をかすつて飛ぶ数をかぞえて興きんがりだした。

「えい、びつくりした」と、お十夜が睨にらみつけると、その血相ちぢに縮ちぢみあがって、逃げだしながら、お三輪みわと乙吉おときち。

「こわいおじさん」

「泥棒どろぼうずきん」

「ずきん流行ばやりはロクでもない」

「ないしよ話はみな聞いた」

「いいこと聞いた、二度聞いた」

「三度目にやア忘わすれた」

「四たび目にや言いいつけた——」

かわりばんこに歌いつづけて、ドンドン向うへ行ってしまった。

みかえ やなぎ  
見返り柳

目明しの万吉は、その後もたえず駿河台するがだいの焼け跡に立ち廻っていた。

暮から正月の二日をおいて、明けて——明和三年となつた四日目のこと。

鉄砲てっぽう策をかつがずに、素のままの姿で、今日も万吉が例の焼け跡へ来てみると、そこに果たして、彼がこの間うちから心待ちにしていた消息があつた。

人目につかぬ石堀いしほりの隅へ、消し炭で書いてあつた文字である。それは、法月弦之丞のりづきげんのじよが、自分へ意思を伝えようとしたものであるのはあきらかであつた。

「予は江戸よに着いて、お千絵どのの居所いどころを求めつつあり。また予をたずねんとする者は、下谷したや一月寺げつじ、普化宗ふけしゅう関東支配所にて問われなば知れん」  
としてある。「うむ。弦之丞様も、やつぱりこつちで察していた通り、江戸へ着いて迷っているのだ」

万吉は、それを読むとすぐに引返してきた。

かれの心は、一刻も早く、一月寺の支配所へ急いでいたが、大火の晩以来、万吉も妻つま

恋の家へ身を寄せていたので、とにかく、お綱にもこのよろこびを早く知らしてやる義務があると思った。

「いるかい？」

と、少しはずんだ足どりで、お綱の家の門口かどぐちを開けて入ると、

「おや、万吉さん——」

奥の長火鉢で、何か考えこんでいたらしいお綱が、猫板から肘ひじを離して、いきいきとした万吉の顔色を見つめた。

「お綱、よろこんでくれ、やつと一方の目星がついた」

「そうですか、じゃああの晩、お千絵様を連れて行った者が誰だか、その見当がついたのですね？」

「なにさ、そのほうは残念ながら、まだ手懸りはねえんだが、いい按配あんばいに、弦之丞様の居所がやつと分った」

「あら法月さんの？ ……」

お綱の顔に美しい赤味がさした。

年の暮の火難から、怖ろしいあの夜の出来ごと——倅さいわいに、万吉に助けられて、この妻

恋の家へ帰つて正気づいたものの、お綱は今年ばかりは暮も元日も夢のように何も手がつかないのであつた。

だが——今万吉の口からよろこばしい便りを聞いて、初めて、お綱の心と顔が、ふくじゆ福寿草のように明るく笑つた。

「まあ、それが本当なら、これで一つの苦労はとけたというもの……、早く弦之丞様にお目にかかつて、何かの相談をしようじゃありませんか」

「——で、すぐにこれから、一月寺の支配所へ、訪ねて行こうと思ふんだが……」

「じゃあ、私も一緒に行きましょうよ」お綱は手早く支度をした。そして、羽織は着ずに、ぶどうぞめ葡萄染の縮緬ちりめん頭巾をかぶり、火鉢の側の煙草入れを帯に挟はさんだ。

万吉は、にわかにはずんで、いそいそとするお綱の気持がよく分つた。そして、それを拒こほむことはできないのである。

「お前めえがお千絵様を救いだしてくれば、おれも、どんなことでも力を貸してやろうじゃねえか」と、墨屋敷の窓の所で、固く約束したことがある。そのために、お綱は命がけであの屋敷の穴蔵部屋へまで身を墜おとしたのだ。よしや今ここに、お千絵が完全に助けきれていないにしても、その約束を破ることはできなかつた。

「困つたなあ……」

口には出さないが、万吉は心の底で呻うめいていた。——とんだ約束をしてしまったものだ——と今さら後悔するのでもあった。

やがて、弦之丞に会った時、お綱から、約束を迫られて、恋の橋渡しをせがまれた時には、さて、どうして諦あきらめさしたものでらう？

実をいうと万吉は、今度のいきさつがあつてから、お綱の気性を見込んで、すべての真相を残らず打ち明けていたのである。

だが——たつた一つ、弦之丞とお千絵との仲だけは話さなかつた。それは、それを話す前に、お綱の方から先に、切ない胸を打ち明けられてしまったから——。

お綱はまた、自分の胸だけで、どこまでも、弦之丞や万吉たちの、阿波の密事をさぐるという目的のために、力を貸そうと誓っていた。

万吉から、いろいろな話を聞いた時に、かれはどんなに、自分の罪を怖ろしく思つたらう。天王寺で掬すり取つた紙入れ一つが、やがて多市の死となり、銀五郎の最期となり、ひいてはこの江戸の空へまで、幾多の怖ろしい禍わざわいを波及してきた。

それは皆、自分のこの指がしたいはずから起つた罪だ。お綱は初めてスリという商売の何と怖ろしい悪業かということを知つた。そして、唐草銀五郎にも弦之丞にも、それを何よりすまなく考えてきた。

これから後は、見返りお綱の命にかけても、その罪を償わなければならぬという、けなげな意気を持たずにはおられなかつた。

それはまた、弦之丞へひそかに寄せる恋の力もあるので、鉄石のように強かつた。

妻恋からお成道へ出て、二人は無口に歩きつづけた。お綱のいそいと燃えてゆく気持は、自然と足を早くさせ、万吉が密かに持つ苦勞は、ともすると遅れがちの足どりになつた。そしてやがて、

普化宗 江戸番所、一月寺末頭——

山門の札を読んで立つた二人は静かな寺内へ入つて、松の多い境内を見廻した。ここは、勤詮派の虚無僧が足だよりとする宿寺であるので、境内へ入ると、稽古の尺八や一節切の音がゆかしくもれて聞こえた。

万吉が訪れて、ここに、法月弦之丞という者が、宿泊しているかどうかという由をただすと、院代の者が寄宿帳を繰つてみて、

「うむ……法月弦之丞……寄竹派きちくはの者でござるが、都合によってお泊め申してある。どう  
いう御用向きでござりますな」

「じゃあ、たしかにおいででございますか——」

万吉は初めてホツと安心した。

お綱はそのうしろに待ちながら、もう、奥から洩れる一節切ひとよぎりの音に、吾を覚えず胸騒  
ぎをさせていた。

「——では、まことに恐れいりますが、万吉という者がお目にかかりにまいったとお取次  
ぎ願います。へい、万吉とさえおつしやつて下さりや、ご存じの筈でございますから」

「ああさようでござるか。では、六刻過ぎむっに出なおしてお訪ね下さい。その御人ごじんは、今朝  
から市中ちゆうじゆうへ合ごう力りきに出ておられます」

「へえ、では今はお留守でございますか」

「夕景ゆうけいには戻られるであろう。戻った節にはお言伝ことづけいたしておく」

「じゃあ、またその頃に伺いますから……」二人は是非なくそこを出てきた。けれど、そ  
れは軽い失望にもあたらずものであった。むしろ、久しぶりで、さまざまな話したいこと  
を持つて会うには、会うという楽しみと心のゆとりをつけておくに好ましい時間であった。

「これから妻恋の家へ帰って、また出なおすほどの間もねえから、そこらで飯でも食べて待ちあわせようじゃありませんか」

「そうだね……」とお綱もちよつと首をひねって、

「じゃあ、私の行きつけた家があるから、池の端まであるいてくれないか」

「江戸のことは他人任せがいい、どこへでもお供をしますよ」

「お供なんていわれちや気恥かしいけれど、やはり食べ物はあるの辺がいいから……。それに、弦之丞様に会う前に、改めて私から、お前さんに頼んでおきたいこともあるし」

万吉の胸底へ、その言葉が強くひびいた。

あの時の約束をふんでくれ、そして弦之丞との恋をとりもつてくれ——こう迫られるに違いない。

二人の姿は、まもなく、不忍の池を見晴らした蓮見茶屋に上がっていた。

日が暮れたら、もう一度弦之丞をたずねる筈なので、酔うまいと気を締めていながら、蓮見茶屋で二、三本の銚子をかえている間に、お綱もホンノリと耳を染め、万吉もポツと赤い顔色をしてきた。

「勘定を払って、そろそろ出ようじゃないか」

「だって、今から行ったところで」

お綱は座敷の障子を細目にあけて、

「ごらんな、陽ひがあたっているじゃないか」

「待つという時刻は永えものだ」

「それよりは万吉さん、これから、私がつたずねたいことがあるんだから、まあ、もう少し腰を落ちつけておくれなね」

「うむ、そりや何でも聞くけれど……」と万吉、飲めない口のくせにまたうっかり一盃ひとつほして、

「おれにやあおよそ分っている」と独りでうなずいたものである。

「分っている？　まあ、八卦屋はっけやさんみたいなこと」

「そりやあ、へぼにしる目明しの万吉だ。お前めえがおれにはツきりと話しておきてえことと  
いうのは、いつか墨屋敷の窓の下で、お千絵様さえ見つけてくれたら俺おれも何なりと相談相  
手になるといった、あの約束をふんで、弦之丞様へ、お前の恋を取次いでくれというのだ  
ろう。どうだお綱……」

「万吉さん……」お綱は酒の上の頬に紅を増して、「……察しておくんなさいよ」

繻子の襟へあごを埋めて、聞こえぬほどの声でいった。

「だが……そのことは、もう少し時機を待っていねえ。な、いつかもお前に話したように、弦之丞様は本来なら法月一学という大番組頭の御息だ。恋に身分の分けへだてはねえにせよ、一方には、おめえも知っている通り、これから俺たちと手筈をあわして、阿波の本国へ忍び込んで、蜂須賀家の内部をすつかり探りきわめてしまおうという大望のある人だ」

「ええ、そりやあもう、深い事情を伺っておりますから、今が今とはいいませんけれど……。どうか、その末になった後にようござんすから、私という気のねじけた女、日蔭の女を救うと思つて……」

「そりや、いつか一度は話してみるがね……」

「浮いた話じゃございません、真から思つているのでござんす。心の底から、今の私を打ちなおしたい、見返りお綱の根性を、真人間に近づけたいと——がらにもなく苦しんでいるのでございますから」

帯の間へ手を入れて、石のようにこわばったお綱の物言いぶりが、あまりにも真味に迫

つていたので、よいほどにあしらっていられない責任感が、万吉の心をまで、締木しめぎにかけてきたのである。

「ふうむ……、するとなにか、お前は今の自分というものを、本当に、ねじけた女だ、浅ましい境きょうがい界だ——イヤ、もつとはツきりいえば、外道げどうの渡世わたりをしている女スリだということを、自分で恥じる気になつてきているのか」

「天王寺で掏すった紙入れ一つが、あんなにまで、多くの人へ迷惑をかけた因果いんがを聞かないうちは、まだそんなにまでは思いませんでしたが、江戸へ帰つた後にお前さんから、いろいろな話を打ち明けられてみて、初めてスリという渡世わたりが、自分ながら怖ろしくなつたんです。万吉さん、私やあ、今度かぎり、キツと悪事の足は洗うつもり——そしてその罪つみ滅ろぼしに、及ばずながら弦之丞げんじやう様が望みを遂げなされるまで、この身を粉こなにしてもいいとまで、ひとりで覚悟をしております」

「うむ、なるほどなア！ そうなくつちやならねえ筈だ」と万吉も、お綱お綱が悔悟かいごした真情に衝うたれて、思わずこう共鳴してしまつたが、そうなるといよいよかれは、お綱お綱がスリの足を洗うためにも、あの約束を固く守つてやらなければならぬ負担を強く感じる。事実、こうした性しょう悪あくの女を、その本然ほんねんな純情へ立ちかえらせてやるには、神の力よりも、

仏の功力くりきよりも、はたまた、幾度とない獄吏ごくりの責めせよりも、ただ一人のよき恋人が手を取って明るい道へいぎなつてやるにかぎる。

お綱はそうして、怖ろしい魔道から救われたいと思つた。自分だけの悔悟や意志ではなおりきれない悪心の習性も、弦之丞のそばにいたら、キツと、子供の昔に返つて、まじめな女に帰れるに違いないと信じられた。

自分だとして——女スリのお綱だとしても——まだ若い女だもの。

奥座敷の客が呼びこんだのであろう、初春はつはるらしい太神樂だいかぐらのお囃子はやしが鳴りだした。

外には羽子はねの音、万歳まんざいの鼓つづみ——。そして、ふと万吉の耳に、角兵衛獅子の寒げな太鼓が耳についた。

楊子ようしをくわえて、二人が茶屋の軒を出たのは、それから間もないことであつた。ちょうど、陽もころあいに暮れてきた時分——。

すると、その出合いがしらに忍しのぶ川がわの方から、いつさんに、バラバラツと駈けてきた二人の角兵衛獅子があつた。

オヤ？ と目をみはつていると、すぐ駈けつづいてきた三人の浪人に追い詰められて、

向うの空地でヒーツという悲鳴を揚げた。

いきなり、殴りつけられたものらしい。

「ごめんなさい！ ご免なさい！ ……」という泣き声まじりに、おさないお獅子が二人、地べたへ蹴けた仆おされていた。

「なんだなんだ、喧嘩か」

「喧嘩じゃねえ、いつも来る角兵衛獅子だ」

「可哀そうに、無礼打ぶれいうちだ、浪人に何かして斬られるところだ」などと、もう口々にいつて、それを見かけたあたりの弥次馬やじうまが、ワラワラと寄って人垣を作る。

万吉は足をすくませて、

「お！ ありやいつぞや、外神田の飯屋で見かけた、お三輪と乙吉——」

思いあたって、お綱の顔をソツと覗のぞくと、お綱も酒の気をさまして、まっ青になっていた。

「万吉さん、ちょツと待っていておくれな」眼色を変えて駈けだしたので、かれもただちに、

「おれも行く！」

こういつて後から続いた。

が、すでにそこには、寄つても付けない人ばかりとなつていた。角兵衛獅子のお三輪と乙吉は、蹴き仆されたまま土まみれとなつて、オイオイ泣き声をあげている様子。

「この餓鬼がきめ！」と、その上にも土足をあげて、この抵抗力のない姉きょうだい弟をさいなんである三人組の浪人は、よりによつてたくましい者ばかりだ。ふと見ると、それは自来也じらいや鞆をおびた天堂一角と、総髪の旅川周馬とお十夜孫兵衛なのである。

「まあ、いい加減にゆるしてやれ」

あまり人だかりがしてきたので、周馬がこういうと、孫兵衛は頑がんとして、

「いいや、いけねえ」と、姉弟ふたりの襟えりがみを両の手に吊るして、

「今日だけのことならとにかく、いっぞやも山やまの宿しゆくの河岸ツぶちで、おれと天堂一角との話を立ち聞きして、なにやら悪たいをついて逃げやがったのだ。これッ、あの時の角兵衛獅子も、たしかにてめえたちに違いなからう」

「あッ——小父さん！ かんにんして」

「ごめんなさい！ ……あれーッ」

乙吉とお三輪が、金切り声をしぼつて謝あやまるのを、お十夜は耳にも貸さないで、

「こいつめ、ヒイヒイいうとぶった斬るぞ。ではなぜ、今も今とて、向うの田楽屋でんがくやで飲んでいたおれたちの後ろへ廻つて、葭簀よしずのかけから人の話をぬすみ聞きしていたのだ。このすれつからしめ、餓鬼だといつて油断のならねえ奴だ」

そういえば三人とも、三橋みはしの田楽屋で飲んでいたものか、少し酒気をおびているふうだ。泣き叫ぶお獅子の姉きょうだい弟みはしを軽々と引つさげて、なおも何か問いつめるつもりなのである。

「どけどけ」

と弥次馬を追いちらして、向うの森へ連れ込んで行こうとする。それを見ると無心な群集も、これを単なる路傍ろぼうのものとはかり、興味に眺めてもおられないとみえて、

「あつ、誰か口をきいてやれよ」

「どうするんだ、お獅子が可哀そうじゃねえか。誰か助けてやらねえか、あれツ、連れて行かれてしまうぞ」

「試し斬りためぎにされるんだ、試し斬りに——」口々に騒ぎたててはいるものの、相手が生やなまさしい御家人ごけにんやなんぞと違って、いかにも一癖ありそうなのが、三人までも揃っているの、ただいたずらにわめいてみるにすぎないのである。

と——その混雑の中をくぐつて、走り寄つてきた見返りお綱は、今しも孫兵衛や、一角の手に引きずられてゆくお獅子の姿を見ると、吾を忘れて、

「あッ——お三輪ちゃん」

肉親の愛情、その對手が何者であるかも目には止めないで、帯のあい首くちに手をやるが早いか、キラリと抜いたのを袖裏へ逆手さかてに隠して、

「おい、お待ちッ！」と、癩走かんぱしつた声を投げた。

可憐な姉弟きょうだいを取り返そうとする一心である。お綱がその時の血相の前には、お十夜の怖るべきことも、周馬や一角の太刀たちの凄みもなかった。

お綱が向う見ずに駈けだしたので、万吉は、あッと胆きもをつぶして、その後ろから力の限り抱き止めた。

「ど、どこへ行くんだ！」

「知れているじゃないか——。あれ、可哀そうに」

「まあ、待ちねえ。待ちねえッてことよ！」

「ええ畜生。ま、万吉さん——そんな悠長ゆうちやうなことをしちやいられない——今向うへ引

きずられて行く姉弟は、ありや実の私の小さい妹きょうだい弟ななんだよ……」

「うむ、お三輪と乙吉——それがお前の親身しんみだというこたあ、おれもうすす知っているが、なにしろ相手がお十夜にまだ二人の連れがある。でなくてせえあいつらは、お前の姿めえを探し廻っているところだ」

「かまわない！ かまわないから離しておくれ」

「ばかをいつちやいけねえ、飢うえた狼のような者の前へ、自分で餌えさになってゆく奴があるものか。イザといやあ俺だつて、黙つて眺めていやしねえから、まアも少し様子を見ていねえ」と、今の騒ぎに崩れだした人混みにまぎれて、万吉は、力の限りお綱の体を抱き止めていた。

すると、そのちりぢりになった人群ひとむれの中から、ただ一人、足早に駆けぬけて、向うへゆくお十夜の三人組へ、「しばらく！」と声を打つて響ひびかせた者がある。と、すぐにバラバラと追いついて行つた。

鼠木綿ねずみもめんの手て甲こう脚絆きゃはんに掛絡けらく、天蓋てんがい。いうまでもなく虚無僧である。

「待て待て、浪人ども待て！」

こう浴びせかけたが、周馬も一角も、場所がらではあり白昼なので、知りつつ知らぬふ

りを装よそおいながら、お三輪乙吉の背なかを突いて急ぎだすと、虚無僧はムツとした様子で、大股に寄るが早いのか、今度は無言で、

「待てと申すにッ」

強く、孫兵衛の利腕ききうでをとつて、いたいけな角兵衛獅子の姉弟ふたりを、かばうように左の手で後ろに寄せた。

「なにをするツ？」

周馬と一角が肘ひじを並べて柄手つかでをかける。虚無僧は冷然とそれを見すえて、

「あまりといえば不愆ふびんでござる。このいじらしい角兵衛獅子の姉きょうだい弟——なんと、放しておやりなすツてはどうじゃ」

「やつ、てめえは!!」

そういう横合いから、こうおめいたのはお十夜である。左右の手を綾あやにして不意に虚無僧の胸倉を引つとらえた。

「——おのれはのりつきげんのじょう法月弦之丞だな」

「なにッ、弦之丞だ？」

周馬と一角とは、その途端に、足元から白刃しらばをずり上げられたように、パツと踏みはい

て物々しい構えをとった。

こうなると、事はにわかで、お獅子の姉弟きょうだいなどは問題のほかである。お十夜たるものは、一たんねじ取った弦之丞の襟もとを、締めて攻めるか、投げて倒すか、あるいは腰の助広にものをいわすか、どツちみち、ただでは別れ難いききさつとなってしまうた。

だが、弦之丞はそうでない。あたりまえの態度である。

ニヤリとして天蓋てんがいを払った。

普化ふけの作法として、とるべからざる天蓋をとったのは、間髪かんはつを思う心支度である筈だが、それが、白刃しらばを渡す宣言とは思えぬほど、あくまで神妙に見せて脱いだのだった。

脱げば——フツサリと切り下げた根元ねもと、糸で巻き締めたのが凜りんとしている。かれが天性の色の白さも際きわだつのであるが、こう見くらべたところ、お十夜の色悪いろあくな、一角の魁か偉いな、周馬のにきびだらけの面相などは、やや性格なり修養なりの奥行の差を現わしているように見える。

で、やんわりと棘とげをたてずに、お十夜の諸手もろでを抜けて、法月弦之丞。

「おお、旅川周馬——天堂一角——お十夜孫兵衛殿——いずれも珍しいお揃いで」と、いとニコやかに会釈えしやくをした。

すると、そこを離れた三橋の角では、やっと、お綱のはやり立つのを抱きとめていた万吉が、

「おや、ありやあ弦之丞様じやねえか」

地獄で仏のよろこばしさをそのままに、ここで幾月かの間、張りつめていた神経がいつぱんにゆるんで、膝ツ骨の蝶番いがクタクタになるかと思われると、お綱も遠見に気がついて、

「ああ、法月さんが——」と、思わず背を伸ばして、もう懐かしさをからませる。

だがしかし、それが弦之丞であると知ると、江戸の大道で、かくも明白に出会した仇と仇が、どうなりゆくのか、それも心配。

面と面とを向いあわせた途端に、ハツと思つたが、弦之丞の挨拶、意外にいんぎんであつたので、かえって薄気味悪く思つたお十夜と一角とは、ひそかに鯉口を整えて、顔の筋を怖ろしげにこわばらせてしまった。

そこへゆくと、旅川周馬、腕に器量はないが人を食つてもいるし、鼻ツ先の機智もあるので、ギョツとした気振も見せずに、

「よう、のりづきうし法月氏か！ 意外な所でお目にかかった。いつもご壮健か、イヤ、それは何よりちようじよう重畳、して、いつ江戸表へお帰りでござった」

久きゆうかつ潤の情を誇張して、いかにも親しげな表情である。もう少し弦之丞が白い歯をみせれば、その囟に乗って肩を叩き、あわよくば襟首にでもからみついてきそうなあんばい按配。だが、もとより弦之丞は、このにきび侍のけいちよう軽佻浮薄とじゃしん邪心とを以前から見抜いている。ましてや、ここには蜂須賀家の天堂一角や、大阪表でチラチラ噂に聞いたお十夜という悪浪人まで道づれだ。

油断のならぬ三人連れである——。ははあ、さてはこの三人、一味同腹となつて、自分をつけ狙つているのではあるまいか。

彼のけいがん炯眼は、疾とく、こう見破つていた。

だが、この人通りの多い盛り場で、それを表に現わして立ち争つては面白くない。第一、自分は本来まだ公然と白昼笠をはらつて江戸の巷ちまたを歩くことのできぬ身——という立場からも、弦之丞はあくまでここを無事に別れようとする。

で、周馬のそらひようじよう空表情を、他意たいなくうけいれるさまに、

「そこもともいつに変わらぬご様子で」

微笑をもつてむくいると、周馬。

「イヤ、ところが大変りなのでござる——」浅黒い唇を上へ舐めた。

「まだご承知ないか、墨屋敷を初め、甲賀組一帯が焼けたことを」

「おお、その話は聞いているが、いずれお上かみから相そう応おうなお代屋敷かえやしきを賜たまわるのであらう」

「さあ、それは平常、まじめにお役目を勤めている連中のこと。拙者はもう隠密組などという、泰平の世に無用なお役儀には飽き果てましたよ。で、こん度をいい機しほに浪人いたして、これからはちと自由なほうへ生き道を伸ばす考え」

「結構でござります」

「無論、そう行かねば生き甲斐がござらん。ところで、弦之丞殿、お身も大番頭おおばんがしらの子息の身で、自由な恋をし、拘束のない境地へ去られたのは賢明でござるよ。その段、周馬も敬服いたしている。イヤ實際、五百や六百石のこぼれ米まいを貰かって朝夕糊のりづ付けの袴かみしもで、寒中に足袋たび一つはくのものにも、奉書のお届を出さなければ足袋がはけないなんていうような幕府勤めはまツぴらでござるよ。アハハハハハ。おう、それはさておき、法月氏のりづきうじ、江戸へお帰りになったからには、さだめし、お千絵殿とお逢いであらう。ただ今あの方は、どこにおられますな？」

と、余談にまぎらして、巧妙な探りを入れる。この貉め！むじなと弦之丞は心で冷蔑して、れいべつ「その消息は、トンと承りませぬ。お千絵殿の行くえはこのほうより、むしろそこものほうも二百も二百もご承知あつていい筈だが……」

逆に言葉の鋒ほこぎ先をねじ向けると、

「と、とんでもない！」と周馬はあわてて、「知っているくらいならおたずねは致さん。

——いずれそのうちには分りましようよ、分つた節には、誰より先に貴公の所へご通知たす。で法月氏のりづきうじ、ただ今のご宿所は？」

「一月寺げつじ関東の支配所」

「アア下谷の虚無僧寺でござるか。そのうちに、是非とも一度おたずねいたす」

「その節には——」と弦之丞、右と左へガラリと眼光をやつて、「——そこにおいでの一角殿や孫兵衛殿をも、ぜひお誘い合せてお越しありたい」

「ウム……」と一角は、その言葉の裏を胸にこたえて、咄嗟とつさにばつのいい返辞に窮した。

お十夜は目知らせで、しきりに、抜こう！ 斬ってしまおう！ という殺気を誘つたが、一角の常識でも、今は地の利と時とを得ていないと思つた。ことに、中に挟まった旅川周馬が、優柔不斷で髪の毛ばかりを撫であげて大事な機を逸してしまつたので、一角は、ま

ずい、抜くな、と目と目でお十夜をおさえている。

こなたの<sup>ひとむれ</sup>人群の中に隠れて、ハラハラしていたお綱と万吉も、どうやら、この分ならばとホツとしていた。

「ではまた、時を改めて会うとしよう。ただし——その節には、このほうから、ちと所望するものがあるかもしれぬが」と天堂一角が、少し<sup>すこ</sup>凄味をみせた気で、弦之丞へ捨てぜりふを投げたのをきツかけに、お十夜、周馬の三人組、互に目くばせをし合つて、スタスタと辻から横丁へ立ち去つてしまった。

かかるいきさつの間に、角兵衛獅子のお三輪と乙吉は、賢い気転をきかして、人立ちのした間かどこかへ素早く姿をひそめている。

「なんだ、ばかばかしい……」

群集は失望した。

「あの<sup>あんばい</sup>按配では、さだめし斬合いになるだろうと思つていたら、イヤに馴れ合つてしまやがった」弥次馬声をヒソヒソ交わして、皆ちりぢりに歩きだした。——弦之丞は禁じ得ぬ微笑を笠のうちに隠して、誰よりも大股に上野の山の裾<sup>すそ</sup>にそつて急ぎ足になる——。

それを見つけるとお綱も急に、「万吉さん、早く行かないと、法月さんの姿を見失ってしまう……」人を縫ぬって小走りに追い慕った。そのあわてようを見ると万吉は、あれほど、気の勝っている見返りお綱も、恋という魅力のためには、こうももろくなるものかと、心でおかしく思いながら、

「なアに、もう急ぐことはねえ。弦之丞様の帰る先は、いずれ一月寺ときまっている。それに、向うもこつちもなるたけ世間から忍んでいたい体だ。もう少し、人通りのねえ所へ行つて声をかけよう」と、場所を計つてついでに行く。

四、五町来ると、屏風びょうぶ坂から鶯うぐいす谷のさびしい山蔭、もう、ここらでよかろうと万吉、

「もし、弦之丞様、弦之丞様」

と、呼びかけた。向うでハツとふりかえると、お綱は胸を躍らせて、思わず足を止めてしまった。——弦之丞は天蓋てんがいをこなたに透すかして、

「おお、万吉ではないか」ピタピタと戻ってきて、お綱には目もくれずに、

「どうしたのじゃ？ 江戸表へまいって以来、どれほどそちの姿を探していたかしれぬぞ」

「イヤどうも、お話にならねえ手違いだらけで、私もあなたの居所を知るまでどんなに、

気をもんだかしれません」

「ではこのほうが、先日焼け跡へ印してきた文字を読んだか」

「あれを見なかった日にや、それこそ、まだお目にかかることはできなかつたでしょう。

で、実は早速、一月寺の方へ伺いましたところ、今日は合力ごうりきに出ていてお留守だとい

話。もう夕方までは間もねえからと、今しがたまで池の端の茶屋に休んでおりますと、あなたをつけ狙っている三人組の奴らが、角兵衛獅子の子をいじめているので、思わずあの弥次馬の中にまじっていたのでございます」

「おお、そうか」

「ところが、あの二人の角兵衛獅子というのが……まことに妙な因縁でして……」と万吉は、不得要領ふとくようりょうに、ちよつと鬻まひを掻きながら、うしろに隠れているお綱を指した。

「——そこにいる見返りお綱の、実の妹きょうだい、弟にいなんでもございます。で、本人に聞いてみると、弦之丞様とは、大津の打出ヶ浜うちでとやらで、一度シンミリとお話をしたこともあるそうです……かたがた只今のお礼も言いたいそうですから」

と、うまくひきあわせをしてしまった。で、初めて弦之丞は、そこにあだめいた女がはにかましげに立っているのを見出したように、

「大津の打出ヶ浜と申すと? ……ウム、あの嵐のあとの月夜に、瓦小屋かわらこやで会った女子おなごか」

「はい……お久しゆうござりました」

お綱は精いつぱいに、これだけいった。そして、後はなんにもいい得ないで、ポツと耳の根をあか紅くしたまま、万吉へ、救いを求めるような眼を向けた。

「で、弦之丞様、このお綱でございませう」と、なんのことはない、とりなし役になってしまった万吉。ここで手っ取り早く、お綱の過去と今の気持や、また墨屋敷の変事をも、話してしまおうと語をつぎかけると、

「まあ待て」と、弦之丞が軽くおさえて、

「この路傍では、何かの話もなりかねる。一月寺の宿院はすぐこの先じゃ、そこへ落ちついてきこうから、私の後についてまいるがいい」

「へい、それじゃそこへまいりますから」

「万吉さん、私は? ……」お綱は少し甘えるように、万吉の袂たもとを取ってはにかんだ。

「二人ともに来るがよい」

笠でさしまねいて弦之丞が、先に立って歩きだしたので、お綱の心は甘い喜びにとけそ

うだった。宿院へ来いとゆるされただけを、もうすべてのことのように思つて——。

そして、前へゆく弦之丞の後ろ姿に、磁力のような愛あいしゆう執を感じながら、足も心もその人へ引きずられて行く見返りお綱。

「私は……私は……」お綱はついて歩く足もともうつろに、めくるめくばかりな熱情でこ  
う思つた。

「死んでもこの人を忘れまい！ 命がけでこの人の胸にすがろう……、そしたら、怖ろしい  
胸摸すりの足もきツと洗える」

するとその時、屏風坂びようぶざかの辺から近道をして追いついてきたのであろう。こけつまろ転びつ  
——声を揚げて追いついてきた角兵衛獅子のお三輪と乙吉。

「姉ちゃん！ ……姉ちゃん！」  
ねえ

「姉ちゃん、待ツて——」

なかば、必死の泣き声で呼び止めた。

「姉ちゃん！ ——」

と、お獅子の声のありツただけが、弦之丞の後ろについてゆくお綱の吾われをハツとさしました。

常々も、忘れてはいない可憐いとしい妹！ 可愛い弟！ それを、今は、なんとという魔がさしたのか、弦之丞の姿を見た刹那せつなにフイと忘れて、あそこへ置き去りにしてきてしまった。耳をつんざかれて、甘い幻想は霧のように散った。そして、なぜか、お綱はうろたえた。「あつ……」

こう洩らして、ふりかえるまもあらばこそ、息せき切つて飛んできた乙吉とお三輪は、永い間、氷のようにカジカんでいたおさな心に、会いたい会いたいと念じていた姉を見つけて、それこそ本当の児こ獅子が牝め獅子の乳へでも狂い寄るように、お綱の袂たもとがほころびるほど、両方から、むしやぶりついてきたのである。

「おお！ 三輪ちゃんだったかい」

と、両の袂へ、鉛のような情じょうの重目おもめをかけられて、お綱は、飲のんでくれな父はとにかく、自分という大きな姉がありながら、こんな無邪気な者へ、こんなしがたない稼かぎ業ぎょうをさせておいた、自責の念にせめられて、思わずよろよろと足を乱した。

「姉ちゃんだ！ 姉ちゃんだ！ あたいの姉ちゃんだ！」

「まア、乙吉も——」と、本能的に、ひしと二人を抱きしめて、見返りお綱、血の気もななく横にそむけた顔をおののかせて、

「もう久しい間、家へもよりつかないこの姉を、よく覚えておくれたッたね。おお、ほんとにお前たちも、すっかり大きくおなりだこと……」弦之丞や万吉の前も忘れて、止めあえぬ熱い涙を、さすがに女らしく注ぎかけた。

お三輪もシヤクリあげていた。

乙吉も大粒の涙をこぼして、筒袖の腕をあてていた。

「三輪ちゃんご免よ——、乙吉もかんにんしておくれよね。今に私が家へ帰ったら、角兵衛獅子なんかさせておきやあしないから。——いい着物も買ってあげる……おいしい物も食べさせてあげる……そして寺小屋へも勉強に通わせてあげるから……ねえ」

「うん、姉ちゃん、ほんとにネ」

「ああ、嘘なんかいうものじゃない。——だから……いい子だから、暫く我慢して働いておくれ、私が家へ帰るまで……」

「……………」

「分ったかい！ 姉さんはこれから、ほれ、向うにいるお二人の方と一緒に、大事な用があつて行く途中なのだから、日が暮れないうちに、早く家へお帰りなさい」

「いやー！」

ハッキリとかぶりを振った。

そして、どこまでも離れまいとするように、袂たもとの端を握りしめる。無邪気なだけに、純情であるがゆえに、こうなるといくらいいすかしたり、わけをいつてきかせても、ウンと承知して帰る気ぶりはないのであった。

お綱は、当惑してしまった。

無理はない、無理はない！ この子たちには、酒飲みで無理解で乱暴な男親はあるが、貧しい中にも、稚おさない心を温めてくれる女親の肌がない。——吉原裏のおはぐる溝どぶ、黒い泡がブツブツと立つ、あの濁り水のような裏うらたな店で、情けも仮かしゃく借もなく育てられては、こんな姉でも、こうまで強く慕う気になるのである。

そうも思うし——お綱はまた一方には、ここで、弦之丞にすげなく別れてしまうのが、一時にせよ、何としても辛かった。それは、幼い二人がたまたま巡り会った姉に別れるより、お綱にとつては、なおさらせつなく感じられる。

法月弦之丞は、わざと少し道ばたへ身を避けて、何かしきりと、万吉がささやくのを聞いていたが、

「お綱とやら——不愼ふびんではないか」

「は、はい……」

「およその事情は万吉から聞いたが、そちを慕うて離れぬのは無理ではない。拙者も万吉も、どの道しばらくは一月寺の宿院に滞在することになるうから、とにかく妹<sup>きょうだい</sup>弟<sup>きょうだい</sup>どもを送り届けて、明日なり、また四、五日おいてなり後に、改めて一月寺へ尋ねてまいるがよい」

「そうだ！」万吉も口を合せて、

「そうしねえそうしねえ。なんぼなんでもお前<sup>めえ</sup>、あれほどまでにすぎる者を、蛇<sup>じや</sup>か鬼<sup>き</sup>じゃあるめえし、振りもぎツて行かれるものか。弦之丞様がおっしゃる通り、その子たちを送り届けて、家の様子も見てきた上に、後から訪ねておいでなさい。——え、大丈夫だよお綱さん、その間に、弦之丞様が消えてなくなる気づかいはねえから——」

お綱はそこで、弦之丞と万吉に別れた。がんぜない妹<sup>きょうだい</sup>弟<sup>きょうだい</sup>たちを得心させた上、後からきつと一月寺へお訪ねします——と固く誓つて。

お獅子のお三輪と乙吉は、すっかり元気がよくなった。嬉々<sup>きき</sup>として、お綱の後になり先になりして目まぐるしくじやれ歩く。

「姉ちゃん」

「あいよ」

「姉ちゃん」

「なんだい」

「なんでもないの」

無<sup>むじょう</sup>上に嬉しくつてたまらない。

用もないのに呼んでばかりいた。そして、あたいの姉ちゃんなる人の顔を見ては、ニツコリ笑つて寄り添つた。お綱もニツコリ笑つてやる。求め難い男に執<sup>しゅうじゃく</sup>着<sup>ちゃく</sup>し、求めがたい恋に苦しみあえぐより、無邪気な目下に喜ばれるつて、なんていいものだろう。けれど人は、淡いものには飽きたらないで血みどろな恋の修羅場を選んでゆく。なぜだかお綱にも分らない。お綱もやつぱりそうだから。

「姉ちゃん」

「ええ」

「なぜ姉ちゃんは家にいないの」

お三輪にきかれて、お綱はギクリと言いつまった。江戸はおろか東海道から上方へかけ

で、すり 掏摸を働いているなんていうことを、どうして、この純な神様たちへ話されよう。

「あの、私はね、よそのお屋敷へご奉公に出ているからさ……。それで、お前たちのことを思い出しても、めったに家へ帰れないのだよ」

「そう？ ……じゃ姉ちゃんは、立派なお屋敷に出ているんだね。それを、角のかど 荒物屋の小母さんてば、お前たちの姉さんは、見返りお綱つていう金箔付きだつていったよ。姉ちゃん——金箔付きつて何のこと？」

「そら、立派な、お屋敷のことさ」

「それで姉ちゃんは、家みたいなの、きたない所へ寝るのがいやなの？」

「そんなことがあるものかね。たとえ、お施米小屋せまいのような中へ、藁をかぶつて寝ればとて、みんなと一緒に暮らしているほど、倅しあわせなことはないんだよ」

解げせないような顔つきで、お三輪は姉を見上げていた。それならば、なぜ家にいないのだろう、という疑問がおさな心にもあるとみえる。

町通りにポチポチ灯の色が見え初めた。松の内の夕暮は、道行く人も店飾りもことのほか美しい。サヤサヤと竹に吹く風が耳に痛くなってきたので、お綱は、折り畳んでいた頭巾を出して、形よくなぶった。

黙っているが、ひもじそうに見えたので、観音堂の境内で、串にさした芋田楽を買つてやると、お三輪も乙吉も、歩きながらムシャムシャ食べる。あんな物が、どんなに味覚をよろこばせるのかと思うと、熱い涙がにじみ出て、お綱は、放縦にぜいたくのし放題をやつてきたことが、この二人だけにすまない気がする。

観音堂から田町の裏田圃——向うを見ると吉原の一廓が宵の空に薄黒く浮いていた。赤い灯の数の一ツ一ツは花魁たちの部屋なのであろう、田圃をこえて、大尽舞の笛や、すががきの三味線や太鼓が、賑やかに流れてくる。

その廓を取りまいているおはぐろ溝のふちに添つて、頭巾のお綱はうつむき加減に、お獅子の二人は後先に、トボトボ歩いてゆくのである。

文字どおりな鉄漿の使い水や、風呂の垢や、台の物の洗い流しや、あらゆる廓の醜悪がこの下水へ流れこんで、どす黒い泡を立てていた。そこへは、籠の鳥の女がしぼる涙もしたり落ちてくるであろうし、あたりの空気もその下水のように濁っている気がして、なんとなく、息づまるものが澱んでいた。そしてこの溝どろの空気の漂う町が、お綱の育った故郷である。

「じゃあ……」かれは思いきつて足を止めた。

「もう家の側まで来たから、姉ちゃんはどこでお別れするよ。ね、またそのうちに、お屋敷のご奉公がすんだら、お前たちの側へ帰ってたくさん可愛がって上げるからね……」

こういつて、帯の間からつまみ出した小判を四、五枚、お三輪の手へ握らせてやったが、小判はチラチラと足元へこぼれ、お三輪も乙吉も、目に涙をいつぱいためて、急に悲しい顔をした。

「さつきも話した通り、お屋敷奉公をしている身だから、この姉ちゃんは、家へ泊ってゆかれない体なんだよ。ネ、いい子だから聞きわけて、今日はここで別れておくれ」

「え……」

「分ったかい。そのうちに、きつとお前たちを幸福しあわせにして上げるからね。廊なかへ売られた姉ちゃんも、今に私が身うけをして、家へ戻れるようにする。だから、そんなに泣かないで……」

お綱にだましますかされて、やつとうなずいたお三輪と乙吉は、ぜひなくトボトボと歩きだした——別れともない泣き顔で。

その影が、おはぐる溝どぶのドンドン橋を左に越えて、九尺二間の軒と軒とが挟はさみ合っ

る孔雀長屋の路次へシヨンボリ消える。

細い月が空にあつた。

廓は人出の潮時である。

大きな雪洞を向けたように、不夜城の空は赤く映えていた。

おはぐる溝のへりにしやがんで、お綱は肩をすぼめたまま、子供のようにしばらくすすり泣きに泣いていた。

ここは自分の育つた土地で、この溝もこの廓もこの辺の家も、皆昔ながらであるだけに、なんとなく小娘頃の気もちがヒタヒタとよみがえってくる。それがいつそう悲しかった。

「お母さんさえ生きていたら、私はこんな女にもならず、ほかの妹弟たちも、あんな不幸せにはならなかつたらうに……」しみじみ思いだされるのである。

親父は廓の遊び人で、紋日の虎という手のつけられないあぶれ者だが、死んだ母だけは、今も温かく甘く涙ぐましく、お綱の胸に残っている。

その母は、お才といつて、やはり根は廓者であつたけれど、いわゆる仲之町の江戸前芸者で、名妓といわれた女であつたそうなの。だのに、どうして紋日の虎なんて、箸にも棒にもおえない地廻りと夫婦になつたのか——お綱は子供心の頃から、それが不思議に目

に映った。

で、ある時、まだ母のお才が生きていた頃、聞いてみたことがある。

「お前、そんなことに気がついていいのかい。油断のならない子だね」

睨むようにいつたけれど、また、抱き込んで、頬へ頬をつけながら、たった一語、こ  
ういった。

「お前だけはネ、今のお父さんの子じゃないんだよ」

この謎は、解いて聞かせてくれなかった。

女親のお才が死ぬと、怠け者で飲んだくれな紋日の虎は、家財をあらかた博奕ぼくちでハタいて、お綱を廊なかへ売ろうとした。

「イヤなこツた」という調子で、お綱は家を飛び出したのである。こうした家庭と罪悪の町中で育ったかれには、いつか立派に、一本立ちのできる技術がついていた。それは虎のところへ遊びにくる商売人が、おもしろ半分に教えたスリだ。

養父の非人道な行いに反抗して、家をとびだしたお綱も、いつか、人の道からそれてしまった。おもしろ半分に覚えた指わざで、思う存分な日を暮らした。でも、たとえ捨てるほどの金があった日も、養父へ貢みつごうと思つたことは一度もなかった。ただ、不愼ふびんなのは、

お三輪と乙吉と——廓へ売られたもう一人の義理の妹。

「どう考えても、ほかの子たちは可哀そうだねえ」そこを立つて、沈みきつた足どりを運ばせたが、お綱はふと廓の灯を仰いで、この中にも、むごい男親に売られた妹が一人いるのかと思つて、ほつと太い息がもれた。

ああ、救つてやりたい。

養父の行いは憎いが、罪のない妹たちを。

一つ——久しぶりに、たんまりとありそうなふところを狙つて、妹の身請の金と、あと二人が幸福になれるだけの金を稼いでやろうか。——なんの造作もない朝飯前のひと仕事に。

ふつと、そんな気がさした。

おはぐる溝の暗いかげから、お綱は明るい方へあるきだした。しだれ柳、辻行燈、編笠茶屋の灯などが雨のように光る中を、土手から大門へと、四ツ手が駈ける、うかれ客が流れこむ、投げ節がよろけて行く。

お綱の名と姿に似る、衣紋坂の見返り柳——その小暗いかげにたたずんで、かれは、密かにあてを狙つていた。

金のありそうな人間のふところ。

へんげこうじ  
変化小路

二百両もあつたらいい。

廊くるわにいる妹をひかして、余つた金は意見に添えて、養父にくれてやるとしよう。そして、少しは心を入れ代えて、お三輪や乙吉にも、あんなむごい稼ぎはさせまい。

二百両——大したことでもありやしない。

だが、その金は、お綱が自分のふところの物を勘定するのではなく、これから、行きずりの人様から、拝借しようというのである。

かれは、頭巾姿の身をすぼめて、見返り柳から土手のあたりを、小刻みに歩きだした。

田中田ぼの寒風もいとわず、土手はチラチラと廊さがよ通いの人影がたえない。と——向うから、俳諧師はいかいしか何かを取巻きにつれて、おさまった若旦那がほろ酔いでくる。

お綱の目が輝いた。

あいつ！ と目星をつけたら、決して遁のがしたことがないお綱だったが、妙に指先がこわ

ばって、その人間をやりすごしてしまった。

「ちツ……」と舌うちをして、残り惜しそうに振り向いたが、やがてまたもう一人、たのもしい金持ちがお綱の前を歩いて行った。

それは紺股引こんももひきにわらじをはいた爺さんである。わらじがけであつてみれば吉原帰りでないことは知れている。お綱の目をそそつたのは、蛇が蛙を呑んだように胴ぶくれのしている内ぶところ。たしかに、まとまつた金がある。

今戸いまど、馬道の四ツ角かどへきた。

人通りが乱れている。今だ！　と思ひながら、お綱は、フツ——と前へ駈けぬけようとしたが——。

なんだか、妙に、気が重くなつていた。

「魔がさしたね！　見返りお綱！　お前のもち前の魔がさしたね！」

それは自分で自分にいう、心の底の声であつた。

そう思つた刹那に、お綱はなぜか、ブルブルと身がふるえてきた。かくも、自分をはつきりと意識するようでは、とても、隼はやぶさに人の物を掬するなどという神技かみわざに近い芸ができるものではない。

「お綱の腕のヤキが戻ってしまつたのかしら？ ……」こう思う間に、いつか自分は自分ひとりで、涙橋の上に立っていた。

「ああ、よそう、よそう……とんでもないことをするとこゝろだつた。スリはやめると万吉さんにぎんげをした私じゃないか。自分でも、二度とこの悪い指は使うまいと、心に誓つていたんじゃないか……。上方かみがたの四天王寺で掬すつた紙入れ一つから、どんな因果がむくわれて、幾多の人を不幸な目に会わしたか、その怖ろしい輪廻りんねをまざまざ見ている今じゃないか……」

今夜のお綱の心というものは、まつたく冷静であり純であつた。お三輪や乙吉の感化かも知れない。けれど、そのために、不幸な妹きょうだい弟が救えなくなつた。

「すみません……」

誰にいうのでもなく、お綱はこういつて、涙橋の欄干へうツ伏した。過去の罪を思うて、唐草銀五郎にわびるのか、不憫な妹ふびん弟きょうだいたちへ詫びるのか、或いは、神のような形なきものへひれ伏したのか。

橋の夜霜が袖に着く。

下には堀の水がゆるやかに流れていた。隅田川から入ってくる猪牙舟ちよきや屋形船やかたが夜寒の

灯を伏せて漕ぎぬけてゆく。

頭のしんが痛んできたのか、お綱は顔を上げなかった。——早く弦之丞様の所へ帰って、一切をざんげしてゆるして貰いたい気もち。また、あの浮世のおはぐる溝どぶに埋められている妹きょうだい弟を見捨ててもいられぬ悩み——。

声もなく、川千鳥が白く渡った、待乳まつちの山から水神すいじんの森あたりへ。  
と。

お綱がうつ伏しているまに、かれの足元へ、黒々と、墓がまのような人かげが這いつながった。

橋の右と左から、その影は、欄干の根を這って、ジリ、ジリ……と寄りつめてきつつある。

捕手とりてだ！ 足がついた。密かに伏せた、十四、五本の十手。霜より真っ白に光ってみえる。

もう手が廻った！ およそ悪事に名を染めた者が、その故郷ふるさとや肉親のいる家の近くに立ち廻れば、必ず、足がつくにきまつている。

ああ、それを知らない、お綱でもなかつたが……。

元は知らず、未来は知らず、今、涙橋の上に、うつ伏している間のお綱は、まことに浄じやう心しん、純情な女であつた。

だが、なんで捕手に、仮借かしゃくがあるう。

五十間けんの番屋にいわせられた町役人が、いち早く、お綱の姿を見かけて、ここに手を廻まわしてきた以上、もう袋の鼠とみられている。

先に這い寄つた一人の捕手が、いきなりお綱の足を狙つて、

「御用ッ！」

すくい飛ばしたのが合図となる。

「あつ！——」不意をくつて、お綱は霜の欄干をツウ——と五尺ばかりすべにすべつた。きつとみると、もう八方は、黒々とかがんだ捕方の影。

「御用だッ！」

「御用ッ、御用ッ！」

続けざまに二、三人、銀磨きの光を射いさして躍つてきた。飛びかかるが早いか、お綱の驚きのまも与えず、

「神妙にしろッ」

欄干の楯をもぎ離して、タタタタと橋のまん中までひっ立ててくる。

「な、なにをするんだい！」

と痾走ったお綱の声に耳も貸さないで、いきなり頭巾に手をかけた一人が、

「しらを切つてもムダだ！ てめえは女スリの見返りお綱、とうから立ち廻ってくるのを待っていたのだ」

力まかせに頭巾を引いた。

「あつ——」というと、夜目にもきわだつ凄艶な顔がむきだされて、頭巾に飛ばされた珊瑚の釵、お綱に、もうこれまでと思わせた。

「笑わせちやいけないよ。番屋廻りの下ツ端に、見返りお綱が自由になって堪るものか」  
肘はずして、一人の捕手を勢いよく投げつけた。途端に、サツと持ったヒ首が、青い光流を描いて横に走った。

「うーむッ……」

血が飛んだ！ お綱の白い手へもサツと返り血が散ってくる。

「うむ、上役人に手向いするか」

同心とみえる。十手よりやや長めなハチワリを持って、真まつ向こうから、かれの小手を叩き伏せようとした。——が、お綱はヒラリと横に避けて、近づくものを斬りとぼしながら、まっしぐらに駈けだした——今いま戸まど河がし岸がしから 聖しょう天てん町ちやうのほうへ。

続いて十四、五人の捕手、バタバタとあとを慕う。霜の夜の御用の声は、ひときわすごくひびいて戸を開あける窓もない。

「どこへ曲った」

「たしかにこの路次」

「抜けられるな——しまつた——早く先へ廻れ、番屋の前をみたらお手を拝借とどなれ、おお、みんなそっちへ行つちやいけねえ、半分はここから後を追いつめろ」

長蛇は二つに別れて横丁へ入る。

路次から路次をかけ廻りながら捕手は、ゴミための蓋ふたから空家の床下まで覗のぞいていったが、とうとう姿が見あたらなかった。

だがどうしても、この一劃かくから出たとは思われないので、番屋の者の手を借りあつめて、なおもくまなく尋ねたが、それに似よった女にも出あわない。

では、お綱は一体どこへどう消えてしまったのだろうか？ というに、あえて女だてらに

屋根や高<sup>たか</sup>塀<sup>べい</sup>伝いの離れ業をしたのでもなく、また変<sup>へん</sup>幻<sup>げん</sup>自<sup>じ</sup>在<sup>ざい</sup>な忍<sup>しの</sup>びの技<sup>わざ</sup>を弄<sup>ろう</sup>したのでもない、明々白白と、裸<sup>はだか</sup>体になつているのである。

どこにといふと、それが少しおかしい。

鵜<sup>う</sup>の目鷹<sup>たか</sup>の目の捕手や、六尺棒をもつてつきあいに出た番<sup>ばん</sup>太<sup>た</sup>郎<sup>ろう</sup>が、みすみす二度も三度も前を通つていゝ、横丁の銭湯へ七文の湯銭<sup>ゆせん</sup>を払つて、その女湯に、のびのびとして温まつている。

もうもうと白い湯気が立ちこめて、数<sup>あまた</sup>多<sup>た</sup>の女の肌が人魚のように混んでいるので、誰が誰とも分らないが、風呂へつかつて、

「ああ、いいお湯加減……」

こういつたのがお綱らしい。

「ええ、人<sup>にん</sup>参<sup>じん</sup>湯<sup>ゆ</sup>でございますからね」と、乳<sup>ち</sup>吞<sup>の</sup>み児<sup>ご</sup>を抱えた、近所の若いお内儀<sup>かみ</sup>さんらしいのが話しかける。

「お子さんがあると、お風呂もたいていじやありませんね」

「まったくですよ。それに冬は、風邪<sup>かぜ</sup>をひかしてはと思ふもんですから、自分の体も洗えやしません」

「少し、抱つこしてあげましょうか」

「いいえ、いいんですよ」

その時、番台の側の戸が開いた。

向うからもこつちからも、湯気でよく見えないからいいようなものの、いきなり女湯の戸を開けたのは、一人の男だ。

「あ、お間違いでしょう」

と番台がいうと、かぶりを振って、下から、何かささやいた。と、みるまに番台のおやじ、青くなつてぎくろ口の湯気を見つめた。

安永頃にはもう江戸は混浴禁止になっている。男のくせに大手を振って、女湯へ入つてくるのは、お上の御威光でもなければできないこと。

無論、それは捕手の一人。

ことによつたらという疑念をもつて、銭湯をねらつてみたが、まさか、自分も裸になつて、湯気の中の女を一人一人あらためてみることもできないので、何か、番台のおやじに吹っかけている。

「入ったろう、そんなふうな女が……」

「さア、なにしろこの通り混んでおりますから」

「不注意な奴だ」

「申し訳がございません……ですが、どうぞ流し場でおあらためただけは一つご勘弁を。へい、男湯の方なら、ちツともかまやしません、その……ほかのお客様がお気の毒でございます。なんなら、その脱いである着物をごらんくださいまして」

「夜分なので、衣服にはよく覚えがないのだ。では、必ず裏口などから突っ走らぬように気をつけてくれ」

「へい、その辺はよろしゅうございます」

「きツとだぞ」

ツウと外へ出て行つた。

湯屋の暖簾のれんを出た男は、左右の路次を向いて、手をさし招いた。ゾロゾロとすぐに十八、九人の人数が集まる。ヒソヒソと耳うちをして、やがてあたりの物蔭へシンと鳴りなをひそめてしまう。

驚いたのは番台のおやじ。

えらいお客がまぎれこんでしまった。いったいその女<sup>す</sup>掬摸というのは、どの客であろうかと、<sup>ぜにばこ</sup>錢<sup>ひきだし</sup>筥の抽出から<sup>めがね</sup>眼鏡をだして、上がってくるのを一人一人見張っている。

たいがいなお客は入れ代つてしまったほど、かなり時間がたつたが、どうもそれらしい女は上がつてこない。みんな、近所の顔見知りな人ばかりだ。ばかにしてやがる、不<sup>ふじよう</sup>淨<sup>じよう</sup>役<sup>やく</sup>人<sup>にん</sup>め、女湯<sup>のぞ</sup>覗きをして行きやがった。

おやじは眼鏡をはずして手に持った。すると、その時、近所の若いお内儀<sup>かみ</sup>さん——<sup>なじみ</sup>馴染<sup>こいき</sup>なので顔を知っているが、その内儀さんと親しい口をききながら、一緒に出て行つた小<sup>こ</sup>粋<sup>いき</sup>なのがチラと目についた。

オヤ！ といいたかつたが、そうもいえないので、番台から、

「ありがとう、おしずかに——」

ひよいと振りかえるまに戸を閉めて下駄を取っている様子。何かいいながら、<sup>かみ</sup>馴染<sup>かみ</sup>の内儀さんは、湯道具やらおむつやらをいっぱい抱えて、ねんねこにくるんだ乳呑み児の方は、も一人の女の手へ預けていた。

「すみませんです、ほんとにご親切様な」

「どういたしまして、お互い様ですもの」

「おかげ様で今夜ばかりは」

「おう、外へ出るといい気もち——赤児やもスヤスヤ寝ていますよ」

「まア、のんきなものでございます。どうもありがとうぞんじました」

「せっかく、いい気持そうにしているのに、目をさますといけませんから……」

カラカラと夜寒に下駄をひびかせて、濡れ手拭を下げながら湯上がり姿を風に吹かせて出ていった。

捕手は足をしびらせていた。今か今かと息をひそめて待ち切ったが、まさか、今乳呑み児を抱いて出てきたものが、見返りお綱であろうとは、誰も見破る者がなかった。

そのうちに、アラ、私の下駄がない、と湯屋の門かどで騒ぎだしたものがある。

さてはと、初めて思いあたったが、もう長蛇はとツくに逸していた。お綱は、風呂の中で、女同士のありがちな親しみを向けて、その人をおとりに、まんまと重囲を脱してしまつた。

しかし、今夜虎口ここうはひとまず遁のがれ得たにしろ、お綱がお三輪と乙吉に会ってから、一そう切実になった悪と善心の闘い、恋と環境の添わぬなやみは、かれの行くところまた走るところへ、影身かげみにからんでつきまとって行くであろう。

そのせいか。

一月寺では万吉が、弦之丞とともに、お綱の訪れを待っているのに、二、三日たっても、その姿が見えなかつた。

### 投げ十手じって

お江戸日本橋。いつも織るような人どおりだ。

ついそこの魚河岸うおがしから、威勢のいいのが鮪まぐろや桜鯛さくらだいをかついで、向う見ずに駈けだしてくるかと思うと、お練りの槍ねが行く、お駕かごが従つく——武士や町人、雑多な中に鳥追とりおいの女太夫が、編笠越しに富士をあおいでゆくのも目につく。

「あら……」

と驚いて、太鼓たいこ反りの橋の上で、塗齒ぬりばの下駄かかとの踵かかとを上げた女があつた。

蔵前くらまえふうの丸曲まるわまげ鬘あけぼのぞめに、曙あけぼのぞめ染ひふの被布ひふをきて、手に小風呂敷したくをかかえている——、  
で、二、三日前とは、すっかり服装したくが違っているの、ヒヨイと見違えてしまうけれど、それはまぎれもないお綱の変身。

「ちイ……」と、舌打ちをして踵かかとを上げたのは、向うへ駈けだしていった子供の奴やつこ 尻こが、お綱の白い脛はぎへからんだのである。

「辻占つじうらが悪い」

面倒くさそうに糸を取りのけて、そのまま四、五間歩きだしたが、橋の袂たもとで、ちよつと足を止めていた。

そこには今日も相変らず、珍しからぬ人立ちがしていた。何かというと、心中のしぞこないだ。御法ごほうによつて男女ふたりとも、生きながらの曝さらし者となり、鰻食うなぎくつたむくいとはいえ、浮名うきなというには、あまりにもひどい人の目や指にとり巻かれている。

「あれツ？」

馬鹿な顔をして、それを見ていた一人の男が、不意に、すつ頓とんきよう 狂きやうな声をだして、ふところや袂たもとをハタき始めた。

「す、す、掏摸すりにやられたツ」

「えつ、掏摸すり？」

「今、瀬戸物町せとものちやうで、四十両の勘定をとつてきたばかりなんだ。それがねえ！ 財布ぐるみだ！ 財布ぐるみ掏すりられてしまった」

血眼になつて騒ぎだした。

誰だ、誰だ、というふうには、群衆の目が、お互いにウサン臭い目つきをし合う。掏すられた男は、狂気のようになつて番屋へ訴えに駆けだすと、おせツかいな人間が、それ、向うへ大股で行つた法被はっぴが怪しいの、今おれの後ろに立つていた男の人相が悪かつたのと、その間にもワイワイと騒ぎ立つていた。

お綱は、いつのまにか、河岸通りを右へそれて、金座後藤の淋しい裏を歩いてゐた。ずいぶん澄ましたものである。

ちよつとあたりを見廻して、袂たもとの八ツ口から出したのは、商人あきんど持ちの革財布かわ、中身なかみを抜いて、

「しようがありやしない——、こんな端はした——」

財布かばの殻からを、ぽんと、河の中へ投げ捨てた。そして、少しじれ気味に、

「ああ、もう少し、まとまつた金が入らないかしら？ そしたら、これを最後に、スリの足をきれいに洗つて」

いつもならば、同じ場所ばしょで一日に、二度と仕事はしないものを、しきりにあせているお綱は、また金座屋敷の長い堀ほりに添つて、本町の問屋町を、軒のきづたいに歩きだした。

すると、山善やまぜんという薬問屋の店に、一人の侍が、編笠をかぶったまま、買物をしていた。侍は、真鍮しんちゆうの獅噛しがみ火鉢に片手をかぎして、

「ウム、では、薬種やくしゆはこれで残らず揃うたの」

と、書きとめてきた処方しよほうと薬の数とを読み合している。

「はい」

手代てだいは、五、六種の小袋をまとめてあらためながら、

「揃いましてござります。この中の、南蛮薬草などは、手前どもの店以外にはございませぬ物で、はい、ありがとうございます」

「今日はこの処方を揃えるために、かなり尋ね歩いたわい。して、代は何程になるの」といいながら、紙入れを出しかけると、手代は侍の風采を見て、

「いえ、そのうちに、お屋敷の方へ、ちようだいに伺わせますから、どうぞお持ち帰りを」「いやいや、わしは浪人者じや。取りに来るといっても、定まる屋敷などはない」

「ご冗談じようだんを……。ではかえつてお手数でございましょうから」と、算盤そろばんをパチと弾はじいて、

「どれもお値の高い物ばかりなので……。ちようど、三兩二分に相成りますが」

「さようか。ではこれで取つてくれい」と、払っている紙入れを、通りすがりに、お綱がチラと見てしまった。

何の薬を求めたのか、本町通りの薬種問屋をでた編笠の侍は、そのままスタスタと大通りへ向つたが、フイと道をかえて、横丁の刀研屋へ入り、その店さきで、また小半こはん刻きほど話していた。

やがて出てきた。

前ともつかず、後ろともつかずに、お綱の姿がからんでゆく。

刀屋の店にいた間も、眉深まぶかにかぶつている編笠をとらないので、その面おもさしはうかがえぬが、一見、丈高たけく肩幅かた広く、草履をすつて外輪そとわに歩いてゆく足どりなど、どうも、心得のある武士らしく思われる。年はザツト四十前後か、衣服大小も立派、ただちよつと異いなことに、御府内だというのに、緞子どんすの野袴のばかまをはいている。

野袴は、野がけ支度、または旅中の物である。主持しゆもちの侍が市内で裾すそべりの旅袴をはいている筈がない。では、浪人かというに浪人ふうでもなし、また旅の途中という様子もない。

しかも、人品賤しいやしからず、という風格ふうかく。

なんだらう。この侍は？

密ひそかに、こんな細かい観察をしながら、お綱は、間髪まはの隙を心に計っていた。

しかし、容易にその機会がなかった。編笠の姿は、どこ吹く風かという態度で、石ごくちよ

町ちやうから裏道へそれ、やがて、呉服橋をこえて、丸の内へ入ってゆく。

はてな？

この橋から向うは、江戸城の外濠そとぼり、大手門、桔梗門ききようもん、日暮門ひぐらしもん、

屋敷というものも、およそは皆大名の邸宅で、普通の住居はない筈だが、あの侍、一体ど

こへ帰るのだらう。

「ええ、そんなことに、気をとられている場合じゃない」

お綱は度胸をきめて、その侍へ近づいて行った。

と——都合よく、とある屋敷の角から、絢爛けんらんな乗物と供人ともびとが列をなして流れしてきた。

それがちようど、出あいがしらであったので、前へゆく編笠の侍が、トンと足を踏み戻した。

「あつ——」

その瞬間に、お綱の体は、小石にでもつまずいたように、侍の横へ、フワリとよろけていったのである。

「おお」

「あぶない」

からんですり抜けた緋縮緬ひぢりめんの蹴出しは、その時、もう二、三間行き交かわっていて、

「ごめん遊ばせ……」

艶えんに笑つて、チラとこつちへ振りかえつた。

そしてそのまま、見返りお綱、燕つばくろの飛ぶかとばかり逸いちはや早く走つて、あツと思うまに、

宏壮な屋敷塀べいの角を曲つて、ヒラリと姿を隠しかけた。

途端とたんに！

ブーンと閃ひらめいてゆく一本の短剣。

キラキラと風を縫ひぎよつて、飛魚のごとく飛んだかと思ふまに、今しも、角かどをそれようとし

た、お綱の真白い踵かかとのあたりへ――。

なんでたまるう。

「あッ！」とやってよろめいた。

足をすくつて、カラリと地に落ちた銀の光——短剣かと思えたのは、房ふきのつかない尺四、五寸の十手であった。

「ア痛ツ……」と足を押さえながら、お綱が身を泳がせるやいな、一足跳そくとびに寄つてきた編笠の侍は、

「これツ」

と一喝かつして、お綱の利腕ききょうでをねじ上げてしまった。

「掏摸すりだな汝なんじは？ 虫も殺さぬような顔をして、武士の懐中物をかすめるとは大胆な女やつじや」

「ア痛ツ、ア痛……旦那、今わたしの掏すつた紙入れは返しますから、どうか、このところは、見通みのがしてやつておくなさいまし……、どうしても、せっぱに詰まることがあつて、魔がさしたのでございます」

「イヤ、ならぬ！ たとえ一流の武芸者でも、めつたに斬りかけられまいこの身すきの隙を計つて、見事に、ふところの物を抜きおつた汝てぎわの手際、出来心とは思われない……ウム」とうなずくと侍は、お綱の利腕を取つたまま、有無をいわせず、グングンと歩き出した。

そして、宏壮な一構えの大屋敷、漆喰塗しっくいぬりの塀際に沿つてしばらく歩いたかと思うと、

その屋敷の裏門へ、ポント、お綱をほうりこんだ。

自分に屋敷は持たぬ——といったこの侍、お綱を引つ立てて、その裏門から、さつさと奥庭へ進んで行った。

しかもそこは、善美をつくした庭作り、丘あり池泉あり馥郁と咲く花あり、書院茶室の結構はいうまでもなく、夜を待つ春日燈籠の灯が、早くもここかしこにまたたいてい

かなしき友禅

捕まえられた恐怖よりも、引つ立てられてきた屋敷のすばらしさに、お綱は気を奪われてしまった。

なんとという豪華な庭、数寄な建築。

いずれ何十万石という、大名の屋敷には相違なかるうが、女掬摸を成敗するため、わざわざ引き出した白洲にしては、あまり舞台が勝ちすぎる。

「いれ」

編笠の侍は、お綱の肩を軽く押して、

「しばらくそこに控えておれ」と初めて笠の紐を解きにかかった。

ひよいと見ると、色浅黒く、眉毛の濃い顔だち。——オヤ、どこかで一度見たような……とお綱はフイとびつくりしたが、どこで見たというほどな、はつきりとした記憶はない。

「御前様、御前様——、只今帰りました」

廊下へ身を寄せてこういうと、すぐ前の一室、書院か主人の居間であろう、スーと一方の障子が開いた。

銀泥の利休屏風に、切燈台の灯がチカチカと照り返していた。青螺つぶしの砂

床には、雨華上人の白椿の軸、部屋の中ほどに厚い褥を重ね、脇息を前において、

頬杖をついている人物があつた。

いうまでもなく、当屋敷の殿。金目貫、白鮫巻の短い刀を差し、黒染の絹の袖に

は、白く、三ツ扇の紋所が抜いてあつた。——三ツ扇は誰も知る松平左京之介輝高の紋だ。

輝高は、かの寛永年間に腕の冴えをみせた智慧伊豆、松平信綱の孫にあたる人物である。智慧伊豆の名声に圧せられて、その孫の左京之介輝高には、さしたる聞えもなかつ

だが、今から十一年前、かれが所司代しよしだいとして京都に在職していた当時——宝暦の事変が起つた時には、自身、竹内式部たけのうちしきぶをしらべ公卿十七家の処分をして、相当にその手腕をみせたものである。

「おお、今帰つたか」

と、左京之介は、茶をすすりながら、

「当分の間は、なるべく、外出無用であるぞ」

「心得ております。しかし、今日はちと是非ないことで、自身買物に出かけました」

「買物にじや？ はて、なぜ家来どもにいいつけぬか」

「それが、ちとむずかしい蘭薬らんやくの調ちよう合せをいたしますため、薬名や何かも、自分でなければなりませんので」

「ほほう、さては、あの病人にのます薬かの」

「御意にございます。所詮しよせん、ああまでの状態になりましたは、漢薬の利き目おぼつかなく存じますので、実は、今日ふと思いつきました蘭薬の処方を持ち、本町薬種屋町ほんちちようやくしゆやまちの問屋を一軒ごとに歩きまして、ようよう望みどおりの薬種を揃えてまいりました」

「ふーむ、そちも、かなり博識と聞いたが、医学にまで精通しているとは、今日初めて知

つた。近頃はだ**いぶ蘭葉流行**であるようじやな」

「いえ、なかなかもつて、この処方は、手前の**究学**ではござりませぬ。大阪表におりました頃、しばらく一緒におりました、**鳩溪平賀源内**と申す男の秘とする処方です」

「ああ、源内であるか。なるほど、あれなら蘭学の方も詳しい筈じや。して、その源内は、ただ今どこにおろうな」

「いつか、殿にもお話しした通り、住吉村で別れまして以来、トンと音沙汰もござりませぬ」

住吉村と聞いた刹那に、お綱は初めて、アツと思ひ当つた。今、左京之介輝高となれなれしく話している深編笠の侍——それは、自分がお十夜と一緒に、住吉村のぬきや屋敷にいた時、目明し万吉を救うべく、俵一八郎や源内と一緒に、不意に、そこを襲つてきた、もと天満与力の常木**鴻山**！ おお、その鴻山に違いない。

どうしてあの常木鴻山が、この松平家にいるのであろう？ イヤイヤ、そんなことよりは、知らぬこととはいえ、とんだ人のふところを狙つたものだ。天満の鴻山といえは、常木流の十手術にかけて天下に比のない人だとはお綱も噂を聞いている。

その人の懐へ手をかけたのだもの、捕まるのが当然であつた。知つて見れば、今さら身

の毛がよだつ心地がする。

「誰じゃ、そこにいるのは？」

気がついたか、松平輝高、脇きょうそく息から頬杖を外して、不思議そうに庭先を見透かした。

「御前、これにおります者は、見返りお綱と申す、名うてな、女すり掬摸でござります」

「なに、掬摸じゃと申すか。女だてらに——」

「これでどうやら、尋ねる者の手がかりがあるうかと存じます。で、おそれ多うござりますが、じきじきに一つお調べを願うとう存じます」

「では、この女ものが、たしかに弦之丞の居所を存じていると申すのじゃな」

左京之介が、褥しとねをずらせて前へ進むや、お綱も弦之丞という一言をきいて、思わずハツと正面へ顔をあげた。

「手がかりになる者とあらば、貴賤きせんを問う場合ではない、鴻山、まずそちが口を開あかせて  
みい」

左京之介は、上からジツと、お綱の姿を見つめていた。

「はっ」と、一礼をして、常木鴻山。

「お綱——」と、おごそかに向きなおった。

「そちは拙者を知っているであろうな」

「ハイ、存じております」

「ウム、たしか二度ほど見かけている。一度は大阪表にいた当時、住吉村でそちを見た。

また、一度はツイ先日じゃ——おお、駿河台<sup>するがだい</sup>大火の節、太田媛<sup>おたひめ</sup>神社の境内で……」

「えっ……」お綱はあきれたような顔をして、

「あの墨屋敷<sup>すみやしき</sup>が焼けた晩に？」

「そうじゃ、しかし、そちは知るまい。氣を失っていた筈だから。ちようどあの夜、この鴻山は所用あつて、飯田町から戻る途中であつた。火に行く先をふさがれて、ぜひなく駕<sup>かじ</sup>を休めていると、そこへそちと、もう一人、由<sup>よし</sup>ありげな女子<sup>おなご</sup>とが、氣を失って引きずられてきた」

「あ！ その、もう一人の女子こそ、お千絵様でありました！」と、お綱は心で叫んだが、口には出ずに、ただ鴻山の言葉に氣をとられていた。

「しかし、その晩には、そちを助ける氣はないので、もう一人の女子だけを駕に乗せて、はるか、四谷の台を迂回<sup>うかい</sup>して、焰の中から逃れてきたのじゃ。ところが、後になって後悔

いたした。なぜ、その時、そちをも一緒に連れてこなかったかと……」

アア、さてはお千絵様の身は、あの時、無事に鴻山の手に救われて、この屋敷の内に守られているのかと、お綱は初めてうなずいた。

が、どうして、常木鴻山がこの屋敷にいて、そして、かくも詳くわしく、何かを知っているのであろうか。

それにも、径路けいろがなければならぬ。

去年の夏――、蜂須賀家の原土はらつちに斬りこまれて、住吉村を去ったかれは、あれから幾月かを、紀伊の山奥に暮らしていた。

その後、かれは、阿波守が安治川屋敷を引きあげたと聞いて、ソツと平賀源内の住居すまいを訪れ、そこで、法月弦之丞のりつきげんのじょうの話をきいた。

かけ違つて、弦之丞と会わなかったため、鴻山もすぐに、江戸へ立った。

そして彼は、松平輝高てるたかの門を訪れた。

左京之介とは古くから面識がある。

十一年前、鴻山が宝暦の事変で血眼になって活躍していたころ、左京之介も京都にあつて、事件の要路にあたる所司代であつた。

で、かれは、今日までの苦心を、つぶさに打ち明けた。

与力や目明しの中には、一つの事件に、四年五年の根気をつづける者もあるが、十一年——しかも、職をはがれて今なお意志をかえない鴻山の話には、左京之介も、心を動かさずにはいられない。

折も折とて、輝高てるたかは、ちょうどこの頃、江戸長沢町ながさわちように兵法講堂を開いている、山や県大弑まがただいにという者に目をつけていた。

この大弑も、十一年前に事変を起こした、竹内式部と何らかの連脈がありそうで、京の堂上たちと事を結んで、幕府の虚をうかがっているらしい疑いがある。

けれど、確たる証拠はない。

ところへ、鴻山こうざんの話があつた。

宝曆変——反幕府思想——不平な公卿くけ——竹内式部——その一味——山県大弑——。こう考えあわせてみると、その黒幕に、阿波という謎の強国が、ありありと浮かんでくる。

禍根は阿波だ。

公卿を踊らす者は阿波だ。無禄の兵学者を踊らすものは公卿だ。不平な浪人を踊らすものは兵学者だ。まず、この禍わざわいの根を刈るには鴻山のいうがごとく、阿波の密謀をさぐり、

その確証をつかんで、取りひしいでしまわなければならぬ。

こう気づいたので、左京之介は、鴻山を自邸にとめて、密かに、いろいろな便宜を与えることを約した。

で、鴻山は、まず、弦之丞と万吉を見出して、力を協せたいと願った。また一方には、世阿弥の残した、甲賀家のあとの様子、お千絵の身などについても、ぼつぼつと調べていた。

だから、お綱のあきれるほど、すべてを知っていたわけである。けれど、一つ困っていることがある。

そのために鴻山は、今日も自身で、源内秘伝の蘭薬を買いに出かけたのだが、はたして、それが利くかどうか、すくなからぬ心配である。

というのは。

大火の晩に、この屋敷へ運んできたお千絵が、あのまま、意識を狂わして、気はついて、も、あらぬことのみ口走っている。

医薬の利かぬ、もの狂いの兆がみえる。お千絵は、狂気してしまった。

「お綱、こういう訳じゃ——」と、一通り話してから、常木鴻山、こん度はほんとの調べ

口調になった。

「そちは、弦之丞と万吉のいる所を存じておろう。前夜の様子から推おしても、知っておらねばならぬ筈じや。そこへ拙者を案内してくれぬか。——さすれば、そちの罪はゆるしてやる。そして、何か事情は分らぬが、せっぱにつまる金とあらば、要いり用ようだけはそちにくれる」

刀試しか、きびしい糺きゆうもん問もんをうけるかと思いのほか、弦之丞と万吉の居所へ案内してくれば、いるだけ金はやろうという、鴻山の言葉に、お綱は思わず手をついて、

「悪うござりました……悪うございました」ただ、嬉しさに、泣き伏してしまった。

「いや、罪科ざいを糺ただすのではない。もとより初めに、このほうをつけてきた時から、そちがすり掏摸すりだということは見抜いていた。しかし、前にも話したとおり、こちらにも聞きたいことがあつたゆえ、わざとここまで釣り込んでまいった次第——、罪の半分はこの鴻山にもある訳じや」

「恐れ入りました。そうおっしゃられると見返りお綱も、穴があつたら入りたいほどございます」

「ウム、それほどまでに、しかとした性根しやうねをもちながら、なんで、あのようなあぶない芸をいたすのじゃ」

「一時のがれの、嘘いつわりは申しませぬ。実は自分の心でも、真しんから悪いと悟って、もう金輪際こんりんざい掬摸すいすりは働かぬと誓っていたのでございますが、どうしても、救ってやりたい不ふ愍びんな目下げがございますため、この一仕事で、足を洗おうと思ったのが、私の誤りごでございました……。どうぞこの上は、お腹のいえるように、御成敗なすって下さいまし」

「その言葉に偽りはなさそうじゃ。最前、そちの手にかかったこの紙入れ、過分にはないが納めておくがよい、そして、これを最後に、きつと邪心を起こさぬことだぞ」

「あ、ありがとうございます……。これさえあれば、心がかりな妹きょうだい弟だいたちを救ってやれます上に、お綱も生れ代りまする」

「わずかのことで、そちまで生れ代った女になれるとは何よりうれしい。してお綱、弦之丞殿と万吉は、ただ今どこにいるであろうか、一日も早く逢いたいのだが……」

「御恩返しという程でもございませんが、いつでも、すぐに御案内申しましょう、下谷根岸げつしの一月寺げつしにおいでなさいます」

「おお、では虚無僧の宿院にいるのか」

と、鴻山は、廊下の端から、左京之介の居間の方へ向つて、

「お聞きの通りでござりますが、こちらから出向いたものでございませうか、それとも、書面でもつかわして、密かにここへ招しやうじ寄せませうか」

「そうじやの？ ……」

輝高は少し考えてから、

「当家へ、あまり出入りの多いは人目につくかも知れぬ。その女を案内に、ともかく、そちが訪ねてまいつたらどうじや」

「手前も、それがよいように考えております。ではお綱、これからすぐに案内を頼むぞ」

「乗物は？」

左京之介がいうと、鴻山は支度をなおして、いつもの眉まゆ深い編笠をいただきながら、

「町へ出てから求めます」

「ウム、それもよからう。いずれ今宵のうちに、吉きつ左右が知れるであろうから、心待ちに帰邸を待つておるぞ」

「はっ、では……」

と、庭先に立つて一礼すると、常木鴻山は、お綱を目で促うながして、ピタピタとそこから歩

きかけた。所詮、生きては、この屋敷を出られまいと諦めていた結果が、思いがけなく、妹や弟を救うだけの金を恵まれた上に、これからすぐに、弦之丞のいる所へ訪ねて行かれようとは、何から何まで、夢のようなトントン拍子。お綱は、嬉しいといってよいか、悲しいといつていいか、また、恥かしいといつてよいか、自分で自分が分らぬような感激につつまれていた。

そして、四、五間歩きかけた。

すると不意に、長廊下の向うから、晴々とした女の高笑いが聞こえた。と思うとまた、「弦之丞様！ アレ、アレ、弦之丞様ツ——」

絹を裂くように叫びながら、バタバタと走りだしてきた美しい女がある。

続いて後から、付き添いの女や家来たちが、ワラワラと手を振って、

「アアお千絵様——、お千絵様がまたお狂い遊ばして——」と、あっちこっちへ追い廻してくる。

背すじへ水を浴びたように、お綱はそこに立ちすくんでしまった。そして、麗しい友禪に身をつつみ、蟬より青白い顔をカラカラと笑みくずしながら、大勢の者に抱き戻されてゆく、お千絵の姿をありありと見た。

「おお大事な薬を忘れていた」

鴻山は別な用口へ廻つて、奥坊主の者に、源内秘方の蘭薬を、お千絵にのますことを言いのこして、急ぎ足に裏門の潜戸をぬけ出した。

せきうんりゆうしんすい  
夕雲流真髓

春の夜の寒さは、襟と爪の先からしみてくる。

炉にはトロトロと紫色の火が崩れていた。

「どうしたのだろう？ ……今日でもう七日目だが」

また同じことをいって、万吉は指を繰っていた。炉に対して弦之丞は、ピシリと二、三本の枯れ枝を折り、衰えかけた櫓の火へつぎ足している。

「——あんなに熱く言っていたんだから、もう訪ねてこなければならねえ筈だが。はてな、悪くすると、またお十夜にでもふん捕まってしまったのじゃねえかしら？ ……」

独りごとを洩らすまでに、案じぬいているふうである。無論、それはお綱の身の上。

ここは根岸の奥の一月寺、普化僧仲間で、俗に風呂入とよぶ宿院である。一枝の竹管

をもつて托鉢たくはつする者は、誰でも宿泊できるが、弦之丞は京都寄竹派きちくはの本則をうけていたので、この寺とはまったくの派違いだ。で、本院へは寄宿をゆるされず、境内にある別棟の客房を借りうけていた。

それがかえつて、気ままでもあり、都合もいい。

折から目明しの万吉も、あれ以来、起居を共にして、昼は外にお千絵様の行方を探し、夜は炉の火をかこんでヒソヒソと、やがて阿波へ入り込む日の密議やうち合せに余念がない。

しかしここ数日、かなりの努力をつくしたが、お千絵の所在について皆目手がかりがなく、お綱もあのまま、此寺ここへ訪ねてこず、二人のかこむ炉には焦躁しょうそうと沈鬱ちんうつの夜がつづいた。

と。——敷石をふむ木履ぼくりの音がしてきて、客房の濡れ縁ぬれえんに、誰か人の気配がする……。

「客僧どの」

「はい」

「まだお寝やすみではございませんでしたか」

聞き馴れた番僧の言葉づかいである。

「起きておいでのご様子、ちと急用でございます。この障子を開けますが……」

「おお、差支さしつかえはござらぬ、どうぞ」

内から弦之丞が手を伸ばすと、番僧も外から障子へ手をかけた。部屋にこもっている煤すす煙けむりが、ムーツと軒へ吸い込まれて、入れ代りに、寒梅の香をふくむ冷ひややかな夜気がそこへ浸ひたってくる。

「ただ今、御院代ごいんだいのお手元へ、こういう手紙を届けてまいった男がございます」

縁に膝をついて一月寺の番僧、敷居ぎわへ一通の手紙をさしおく。

「なに、このほうへの書状？」

「はい、すぐご返事がほしいそうので、使いの者が待つております。どうぞ、ご一見下さいまし」

「はて、誰からであろう？ ……」と弦之丞、封を切つて読み下したが、巻き返しながらいつと天井を見上げて、何か思案をしているらしかった。

「弦之丞様、この夜やちゆう中に、一体どこからのお手紙なので？」

と万吉が、不審そうにきいたのには答えないで、弦之丞、番僧のほうへ向つて、「委細承知いたしたと、使いの者へお伝え願いさいいたい」という。

「はい、それだけでよろしゅうございますか」

「後よりすぐにまいりますゆえ」

「では、そう申して、使いを帰せばよろしいので」

「ご苦労ながら」

「いえ、どう致しまして……」と番僧は木履ぼくりを鳴らして本院の方へ戻って行く。——その後で、弦之丞二、三服の煙草をくゆらしてから、ゆつたりと立ち上がった。

「万吉、拙者はちよつと行つてみるから、先に寝やすんでいてくれい」

「えつ、これからお出かけなさいますツて？」

「ウム、その手紙を見るがいい……。少し腑ふに落ちぬことではあるが、何ぞの手がかりがあるかもしれぬ」

「へえ……」と万吉、あわてて炬たきべりにおいてある今の手紙を開いてみると何ぞ計らん、差出人は旅川周馬——、お千絵殿の所在が知れたから、至急、鶯うぐいすだに谷だにの古梅庵という料亭までご足労を願いたい——という文意。

先日、路傍でお目にかかった節は、連れがいたし雑沓ざつとうの中で失礼いたしたが、今夜はゆるりと旧きゅうこう交こうを温めたく思う、そして、自分がつきとめたお千絵殿の所在をお告げす

る。それを以て、自分の誠意を認めてほしい。などという美言びげんが巧妙につらねてある。

「貉むじなめ！」

万吉は、おッぽりだすように読み捨てて、

「こいつアいけねえや！もし弦之丞様、こんな物騒なものに誘われて、うっかりお出かけなさいますと、どこにどんな死神が待ち伏せしているかも知れませんぜ。およしなせえ、およしなせえ！万吉は大不承知でございます」

と、真剣になつて止めはじめた。

「なんの……」と弦之丞は、万吉の危惧きぐを笑い、その不服を軽く聞き流して、「必ずともに、深く案ずることはない。夕餉ゆうげの後の腹はらごなしじゃ、無駄足をするとおもうて行つてくるから、きつと留守をしていてくれよ」

「じゃ、どうしても、お出かけなさるおつもりなので？」

と、なおも心配そうにいう、万吉の言葉には答えないで、身軽に帯をしめなおして、外出の支度をすました弦之丞。

「だいぶ風が吹いてきそうな……周馬や一角や孫兵衛などよりは、火の用心がおそろしい。

宿院を拝借して、炉に火を残したまま無人に致しては、寺則を破ることになる。万吉、必ずわしが留守の間に、ここをあけては相ならぬぞ」

「へえ……」といったが万吉は、一緒について行こうと考えていた矢先なので、こう釘を打たれてしまうと、いよいよ面白くない。口が尖ってくる。

「わっしもお供いたしましたしよう。なアに、炉の火はスツカリ埋けてまいりますよ」

「これこれ万吉、つまらぬ情を張って、拙者の足手まといになつてくれるな。いよいよ阿波へ入り込む時やまた、向うへ着いて働く場合には、随分そちの腕も借ろうが、今はまだ目的の本道に入っていない」

「へい……」阿波と聞くと、万吉も、すなおに首を垂れてしまった。

「前途の多難は今宵ばかりでない。どこまでも大事を取って進まねばならぬ。騎虎の勇にはやつて、二つとない身を傷つけたら何といたす」

「さ、それだから俺もまた、いつそうあなたのお体を、お案じ申すのでございます」

「ウム、その心は過分である。いずれ周馬の手紙には、深い魂胆があり、企らみがあるものとは拙者も察しているが、この弦之丞の眼からみれば、およそは多寡の知れたあの三人……あはははは、久しく試みぬ夕雲流、場合によっては——」

と、無銘の一腰、笛袋に入れて腰に落した。

「そりや、弦之丞様には、腕に覚えもございませうが、足場の悪い根岸の闇、欺し討ちや、飛び道具という策もございますから、必ず、ご油断をなさいませぬ」

「そこまで物を案じては、いわゆる取越し苦労というもの。大望をもつ身でなくとも、こんな例は、道場通いの修業中にもママあることじや。申せば武士の日常茶飯事……」

スタスタと板縁から土間へ出て、塗下駄を突っかけ、行乞の深笠をとって頭につけた。そして、みずから戸を開け、みずから後を閉めて、万吉が何と口をさし挟むいとまもなく、

「では頼むぞ——」といい残して、境内を斜かに抜けて寺門へ出て行つた——。万吉は、最初の不安がまだ拭われないうらしく、その足音の消えてゆく闇を、戸の隙間から見送つていた。

「暗い晩だな……。ああ、行つてしまつた」祈るようにつぶやいた。

如月近くを思わせる、冷やかな東風が吹きだして、小さい風の渦が、一月寺の闇に幾つもさまよっているようだ。桜吹雪のような濃艶さはないが、もみ散らされる梅の点々が、白く、チラチラと、人の姿を追っている。

弦之丞の細い影が、梅の香に吹かれて寺門を出た。二、三十歩の石畳の上を、カタ、カタと塗下駄の音が静かに運んでゆく――、そしてやがて、正面の石段を降りかけたが、フイと、足もとからさす明りに足をとめてみると、草履を持ってしゃがみこんだ一人の男、そばに、仮名書きで「こばいあん」とした朱文字の提灯ちようちんをおいて、ゆるんだ鼻緒をすげなおしている。

ポツ、ポツと、提灯の明りが、男の周りに、大きく明滅の輪を描いていた。

弦之丞がその前をスツと通りぬけると、

「まず、これでよし」

と、緒を直した草履をはき、小提灯こちようちんを手に持つて、その男も、ピタピタと弦之丞について歩きだした。

「こばいあん」としてある小提灯が、弦之丞の影に添って、ゆらゆらとついてきたかと思うと、

「もし……」と、その男が声をかけた。

「一月寺においでの方は、みんな同じようなお姿なので、間違ったらご免下さいまし」と、

念入りに断わつておいて——「あなた様は、もしや私が今手紙を持って、お迎えに参りました法のりづき月様ではいらつしやいませんか」

「いかにも、わしはその弦之丞だが……」

「ああ、それはよい所でご一緒になりました。私はごらんのとおり……」と、提灯の朱文字を少し前へかざして、

「古梅庵の若い者で、旅川様からお手紙をいつかつてきた男でございます」

「そうか。では何分とも案内を頼む」

「エエよろしゅうございますとも、なにしろ、御行おぎようの松から御隠殿ごいんでん——あの水鶏橋くいなばしの辺は、昼でも薄気味のわるい所でございますからな……。夜のお使いは、あんまりゾツとしませんや。それに来る時は一人ぼっちなんで、びくびくものでございましたが、おかげ様で、まず帰りは気強いというものでございます」

「所々ところどころに見える灯は、どこかの寮りようか隠居所いんきよしょだの」

「へえ、お旗本の別荘とか、上野の宮様の別院とか、吉原に大店おおだなを持っている人の寮だとか……そんなものばかりでございますから、淋しいわけでございます。……ア、旦那、そこに小さな流れがございますぜ」

闇から闇をフワフワと来る小提灯。いつか御行の松の前を右にそれて、一面の藪やぶだたみ、ザザザツツという笛鳴きの声を聞きながら、男は縞しまの着物の袂たもとで提灯の灯をかばってゆく。弦之丞は、しきりとしやべつてゐる男の話には、よい程な生返辞なまへんじをしていながら、ひそかに笛ふえぶくろ囊ふくろの紐を解き、秘差かくしぎしの一刃へ左の手をかけて、プツンと拇指おやゆびで錨つぼうら裏を押しきつていた。

どうせこの男も、古梅庵の若いものではあるまい。旅川周馬の手先になって、自分を誘い出しにきたおとり罔むすに違いない——と見抜いたので。

そのせいも、男はわざとらしくらぬように、いつも、弦之丞の左へ左へと寄つて、小提灯の明りを、たえず、自分よりは対手あいての前へ寄せて歩いてゐる。この分で見ると、或いは、万吉がいったように、飛び道具おその懼おそれがあるかもしれない。

提灯の明りは、暗夜の狙い撃ちに、何よりなまと的であるから、心得のある武士は、くわえ煙管ぎせると提灯は決して持たない。

藪だたみがつきて、道が二股またにわかれる所へ来ると、男はツウと、また右寄りへ進もうとした。

「待て、道が違うようではないか」

弦之丞が立ち止まると、男はギョロリとすごい眼をくれたが、それは対手あいてに感づかせない程な瞬間に笑い消して、

「へへへへへ。旦那、ご心配なさいますな、私はこれでも根岸にや四年も住んでおりますから、決して道に迷うなんていうことはございませんよ」

「しかし、鶯うぐいすだに谷へ出るには、ちと、方角違いな気がするが」

「ところが、ズツと近道なんで……」グングン先に立つて進んだが、やがて赤土すべの迂りそうな崖を上がると、闇ながら四方がひらけて、どこかに行く水の音がザアーツと低く響いている。

「ええ、寒いッ……」と男は一つ身ぶるいして、「旦那、ここはどこだか知っていますか」

「ウム、御隠殿ごいんでんした下であろう」

「あすこに見えるのが水鶏橋くいなばしで……、あれを渡つて向う岸を入りますと、古梅庵はもうじきでございます。さだめし、旅川様もお待ちかねでございますよう」

「だいぶ遅いが、周馬は宵のうちからまいつているのか」

「へえ、私がお使いに出る二ふたしき刻ほど前から、奥の座敷でチビチビ飲んでおいででした」

「その周馬だけではなからうが」

ジツと眸ひとみに力をこめて、眉間みけんを睨みながらこうきくと、男は少しドギマギして、

「へい」と、うろたえ気味の提灯ちようちんを、フイとこつちへさし出して、二ツ三ツお辞儀をした。

「旦那、まことに申しかねますが、提灯これをちよつと持っていて下さいませんか……どうも尾籠びろうなお話ですが、すこし小用がつかえまして……」

うさん臭い古梅庵の男が、先に立って、御隠殿の下まで道案内をしてきたかと思うと、そこで、

「旦那、すみませんが……」

と、弦之丞の手へ提灯を預け、小用をたすふりをして、スツ——と横ツ飛びに身を交わした。

「おう」と、なんの気もなく、明りを手に持った途端に、かれは異様な臭気を知った。

プーンと、闇ただよに漂ただよってくる臭気！ 火縄だ、火縄のいぶるあの臭におい！

「あッ——」

と弦之丞が、その提灯を空へ捨てたのが早かったか、轟然とゆすつた鉄砲の音が早かったか？——ほとんど、けじめのない一瞬。

上野の森の裏山へ、一発の銃声が、ドーンと木魂返しにひびいてきた刹那、はつと眼をこすつて見直すと、空に躍つた提灯の行方は知れず、それを持っていた弦之丞の影もあらず、ただ、強い火薬の匂いと、白い硝煙とが、玉になってモクリツと闇をかすつていた。

「うまくあたつた！」

水鶏橋の袂へ、横ツ飛びに逃げだした男は、こうつぶやいて、枯草の中から、そろそろと亀首をもたげだす。

こいつ、古梅庵の提灯を、どう工面してきたものか、まことは使屋の半次といつて、周馬や孫兵衛が、京橋の喜撰風呂にごろついている間に、手馴ずけられたあぶれ者。

かまきりのように、橋袂からゴソゴソと四つん這いに寄つてきて、半次、しばらく息を殺しながら、ジイと地面をすかしてみると、そこに顎をはずした提灯の落ちているのは見えたが、弦之丞の姿は見当らない。

「おや……」と、いったが、またすぐに、

「野郎。とうとうまいってしまやがった」

すツかり安心した様子で、のツそり腰を伸ばしかけた。

と、水鷄橋くいなばしのほうから一人。向うのかけから一人、そして御隠殿のほうからまた一人……。

いかにも厳しい身構えで、一步、一步と、闇を探りながら、寄り集まってくる者があつた。かかる夜、魔手をふるつて、跳躍するには屈強な、黒いでたちという拵こしらえ。かすかに、その者の帯おびぎわにキラキラ光るのは、金か銀か四分一しぐいちか、柄つかがしらの金具であろう。

「半次か」

「周馬様で？」

「ウム」

「手ごたえは？ ……」

と、また一方の黒装束くろしやうぞく。

「関金せきがねにこたえがあつた。あつた弾たまは分る」

こう応じたのは、木立の中から短銃を引っさげてきた者の声だ。半次をのぞいて、同じ黒いでたちの頭数三人——、たしかに、旅川周馬、お十夜孫兵衛、天堂一角、この以外の

者でないにはきまつているが、闇ではあり、覆面同装ふくめんどうそう、誰がそれとも見分けがつかない。

「どこだ、彼奴きやつの仆れた所は？ ……」

「あ、その辺……。いえ、もう少し向うへ寄つた笹ささの中で」

「はてな」

「そ、そこに、白いものがぶつ仆れているじやありませんか」と、半次、及び腰で指をさした。

「違う………」

「道しるべの石だ」

「と、すると、もう少し向うだったかしら」

「油断を致されるな！」

それは、明らかに、天堂一角の声らしかった。

「仆れたに致せ、弾たまが急所をはずれていることもある」

「おう！」と思わず三方に開き分れて、ふたたび、念入りな構えを取りながら、いざといわば三本の白刃を、一度に抜き浴びせる気で、ジリジリと寄りつめて行った。

「や？ ……」

「なんといたした」

「妙だ、いない。イヤ、何者も仆れておらんぞ」

「ばかな、そんな筈が……」

と、誰か、三人のうちの一人がいいかけて、グルリと、後ろを睨み廻した刹那だった。すぐ、かたわ傍らの木の幹に、ベタリと身を貼はりつけていた影が、

「弦之丞はここだッ！」

と、大声でいった。

剣の行く前に、まず対手あいての心胆を、真ツ二つにする気殺きせつ！

それと一緒に、声と五体と剣の光流！ 一ツになって飛び斬りの真ツま向落こうおとし、あツというまに、一人の影を前伏せに斬ツて仆した。

測はからぬ虚をつかれて、まっ先に、斬られた者は誰だったか？

「あッ」

と、いったのは使屋の半次。

斬られたような声をあげて、木立のほうへすつ飛んでしまったが、その逃げようでは怪我をしたふうもないから、さしずめそこで、

「ウウムム！」と、陰惨な呻きを血煙につつまれたのは、お十夜か、周馬か、でなければ天堂一角——、その中の運の悪い一人であるには違いない。

「ちえツ！ やられた！」

危なく、後の二人は跳び開いて、パツと居合抜きに大刀を払ったが、その瞬間、一方でパチン！ と火花を降らしたかと思うと、すぐ焼刃のすり合う音がして、鏢と鏢とが競りあうまもあらず、デン！ と一方が蹴仆された。

仆されたまま、エエツ！ と、持ったる刀で地を払ったのは黒装束のほうの男。

「うぬツ——」と叫んで起き上がり、弦之丞の姿を八、九間ほど追いかけたが、その時うしろで、

「お十夜！ おい、おいつ」

と、しきりに呼びとめる声がある。それは旅川周馬らしい。

怖るべき早技で、一人を斬り、一人を蹴仆し、疾風迅雷に駆け去った弦之丞の姿は、時既に、遠い闇に消えていた。

「ええ、しまった。意気地のねえ奴が揃っている」孫兵衛は舌うちをして振りかえったが、その途端にハツとして、鋭い眼ざしで闇を探った。

「誰だ……誰だ、今斬られたのは？」

「一角だ、一角が深傷を負ってしまった」

周馬は色を失ったような声で、怪我人を抱き起こしながらお十夜の応援を求めた。

すると、その時になつて、木立の裾をつつんだ藪だたみが、嵐のように、ザワザワと揺れだした。そして、その中から、四人、五人、三人と、得物を持ったあぶれ者が、張合いぬけのした顔で、怪我人のまわりへ寄り集まる。

「間抜けめ！」と、お十夜は、時機をはずしてノコノコと出てきた大勢の面へ、唾を吐きつけるように腹を立てた。

「なんで、俺が抜いた時に、すぐに対手を押ッ包んでしまわなかったのだ。見ろッ、弦之丞の奴はとうの昔に逃げ出してしまった。やい、半次はどうした、半次は？」

「へえ、ここにおりますか」

「なぜ、てめえは、みんなに合図をしなかったのだ。ざまを見やがれ！ 対手は夕雲

流の使い手だ、てめえがまごまごしている間に、この辺にはまだミツシリと人数が伏せ

てあると気付つたから、素早く影を隠してしまつた」

「おい、孫兵衛、孫兵衛」

と、深傷ふかでを負つた一角を抱えて、旅川周馬がよろよろと立ち上がった。

「今さらそんなことをいって、ぶんぶん当り散らしていたところで始まるまい。早くこの怪我人を、どこかへ落ちつかせて手当てをしなければあ……」

「深傷ふかでか？」

「深傷だ。——だが、急所じゃない」

「助かるものなら背負つて帰ろう。何をするにも、この暗闇じゃ、しようがねえ」

「ウム、さし当つて、血止めはギリギリと巻いておいた。だが、おれの手は血糊のりでヌラヌラしてきたから、貴公、少しの間代つてくれ」

「いや、そう皆で血みどろになつては、町へ出てから人目につく。おい半次、半次、てめえ、どこか町医者うでうの所まで、天堂一角を肩にかけて行け。そしてな、役にも立たねえ、あとの有象無象うでうむでうは、もう用はねえからと追い返してしまうがいい」

「ええ、返します。ですが、旦那」

「なんだ」

「あいつらが、酒代さかてを貰もらつてくれというんですが……」

「ふざけたことを申すなッ」

「それや、きツかけが悪わるくつて、お役には立ちませんでした。賭場どばのゴロや駕かきなんぞを、呼び集めてきたんですから、手ぶらじや帰りません」

「太い奴だ。手ぶらで帰るのが嫌ならのべ金かねをやろう！ どいつだ、酒代さかてがほしいのは」と、さなきだに、弦之丞を討ち損じた腹立ちまぎれ、そぼろ助広を抜いて脅おどしにふりこむと、頼まれて来たあぶれ者は、胆きもをつぶして逃げだしてゆく。

「ああ、とても大変な血だ……」

やがて、一角を肩にかけて歩きだした半次は、顔をしかめて襟首を撫でた。周馬とお十夜は苦りきッてその後につき、手負いの一角は、時折、ウーム、ウーム、と虫の息をもらしていた。

目安箱めやすばこ

その夜、法月弦之丞のりつきげんのじょうが外へでるとまもなく、一月寺げつじの宿院へ、二人の客があつた。

どう考えても、今夜のことは不安で、今も炉ろにいらいらとした万吉が、軽く叩く戸の音に立ち上がってみると、忍びやかに入ってきた深編笠ふかあみがさの侍とのしお頭巾の若い女。

女は、心待ちにしていたお綱、ということが、万吉にも一目で分つたが、はてな？ 連れの侍は何者だろう——と膝をついて下から仰ぐと、訪れた常木鴻山こうざん。

「突然まいつて、さだめしびつくりしたであろう」と笠をぬいでお綱に渡す。

「やツ、あなたは！」といったきり万吉はただあきれ顔だ。そうだろう、天満組てんまぐみ三人のうち、俵たわら一八郎は阿波屋敷に捕えられ、鴻山はぬきや屋敷を去つて以来、紀州の奥にでも隠れているのだろうという噂をきいたままで、今は、実際のもくろみにかかつて働いているのは、自分一人と思つていたところだ。

それさえあるに、その鴻山が、見返りお綱と一緒に、突然、この宿房へ訪ねてきたのだから、かれの驚愕きょうがくはもつともだ。しかし、この訪れは、同じ意外でも、一刻前ときまへに来た周馬の訪れと違つて、まことにうれしい邂逅かいこうである。

「まず、ともあれこちらへ」

と、炉ろべりにいぎなつてきたが、さて、渋茶をくんで出すいとまも惜しい。大阪以来のつもる話、江戸表へ来てからのこと……何から何を話していいやら。

一通りの話をきき、万吉の苦衷くちゆうのある所に、鴻山もとくとうなずいて、次には、自分がここへ来るまでの経路を、飾り気なく物語った。

「この女に、ふところの金を掏すられて、投げ十手を打ったのが、そちの居所を知る機縁となつた。そこで一刻も早く、弦之丞殿へも会いたく存じたので、夜中やちゆうを押しまいたのじゃ」

と、笑いながらも、あの時のことを、あけすけにいわれた時には、見返りお綱、顔をまツ赤に染めて恥じ入った。

「いったん心を入れ代えるといっておきながら、面目めんぼくのない訳ですけど、それにも、こうした切ない事情があつたんです」

偽らぬお綱のざんげ話にも、二人は強く心をうたれた。そこへ、足音しずかに、法月弦之丞が帰ってきた。

常にかわらぬ落ちつきようだ。

万吉もその様子を見てホツとしたが、ヒヨイと見ると鼠甲斐絹ねずみかいきの袖に、点々たる返り血の痕あと——。ああ、斬つたな、何かあつたな、とは思つたが、折からの来客、それを問うまもなく、また弦之丞も話をそれに触れず、常木鴻山と初対面の挨拶をかわした。

その部屋には、夜の明けがたにいたるまで、焚き足す櫓ほたの火がつきなかつた。しつかりと手を握り合つて、互に、奥底までの胸襟きようきんをひらいたので、常木鴻山は、年来の目的を達することに、はつきりとした曙光しよこうを感じ、翌朝、眠らずとも晴々しい顔で、一月寺を辞し、左京之介さぎようのすけの屋敷へ歸つて行つた。

そしてまた、四、五日おきに、幾度となく、ここと大手町との間を往復した。

かくて、左京之介と、鴻山と、弦之丞との間に、なんらかの密約が成り立つたらしい。

ある日である。

月はじめの如月日和きげらぎびより。

ひそかに、大手町の松平家をでた女乗物は、左京之介が茶席や閑居にのみ建ててある、江戸郊外の代々木よよぎそく荘へ急いでいった。その駕には、狂つたお千絵がのせられている。

鴻山が心をこめてのませた南蛮なんばん葉草やくそうのききめもなく、お千絵の心はとりとめもなく乱れていた。

代々木荘には、前の日から左京之介が滞在し、その朝は、弦之丞と鴻山がきて、奥の一室を密閉し、家臣を遠ざけ、何かヒソヒソ半日余り密議をこらしていたのである。

代々木荘の密議の半日。午後になって、ようやく何かの謀しあわせが一決したとみえ、「では、早速がよいぞ」

と、窓の内で左京之介の声がした。その時、紅白の山茶花がポトリと黒土の上へこぼれて、上の障子が細目に開く。

脇息を離れて、窓ぎわへもたれた左京之介の半身と三ツ扇の紋がみえた。

「只今、予が申したような順序をふめば、いずれお上より、何らかのお沙汰があるに違いない。天下の大事、よも、お捨ておきになる筈はない」

「はっ」

密話がすんだので、弦之丞と常木鴻山、二、三尺ほど後へ這って、きちんと両手を膝に正していた。

「さすれば、その儀について、この輝高がお召をうけるは必定である。その時、上のお訊ねに対して、そちたちの願望、足かけ十年の苦衷、つぶさに申し上げる所存。また、この輝高の意見としても、阿波探索の必要をおすすめ申し上ぐるであろう」

「ひとえに、御助力のほど願わしゅう存じます」

「いや、そち達に頼まれいでも、大公儀にとって由々しい問題じゃ。必ずこの上ともに、

輝高をうしろ楯だてと思うがよい。しかし、京の公卿くけいたちと気脈を結んで、幕府を倒そうとする阿波そのものの陰謀、たとえ歴然たるにいたせ、確たる証拠をつかまぬうちは、どこまでも、この儀世間に洩らしてはならぬぞ」

「は、それは法月殿も、とくと心得ておりますし、拙者も、大事に大事をとって秘密を守っております」

「そういう点からも、これを、密々かみお上のお耳にだけいれて、弦之丞が大公儀の隠密役となり、阿波へ探索に入りこむということは、何より、よい策のように考える。ただ弦之丞は、大番頭おおばんがしら法月一学の伴せがれ、公儀の隠密役としての御印ごいんか可あるや否や、その点だけがちと心配であるが……」

「段々とありがたいお取り計らい、お礼の申しようもござりませぬ」と弦之丞は、この日、左京之介から何か重大な策を授けられたものごとく、いんぎんに礼をのべて、

「この上は、少しも早く一月寺へ立ち帰り、委細いさいの下書を作りました上、仰せのように致して、またのお沙汰を待ちます。では、これにてお暇いとまを……」と、立ちかけると、

「あいや」と左京之介が止めて、

「その話はすんだが、今日をよい機しおと存じて、鴻山がそちに一人の婦人と引き合わせると

申している」

「弦之丞殿。それは先日お話ししたお千絵殿でござりますが……」と、常木鴻山は氣の毒そうに語韻ごいんを沈めた。

「蘭藥らんやくを試み、いろいろ手当てを尽くしてみましたが、まだ幾分か乱心のところがあつて、時折狂いいたします。で、騒がしいお上屋敷かみやしきよりは、この代々木莊なれば養生にもよし、人目にもつかぬであろうという、御当家のお取り計らいで、ちようど、今日駕にのせて、ひそかにここへ移してまいる筈……。どうぞござりますな、よそながら、お会いになつておいでになつては」

「は……なんと、お礼の言葉もござりませぬ……」弦之丞は冷静になるべく悶もだえていた。乱れだした情熱をおさえきるまで、ジツとうつむいていたが、やがて、思慮をきめて、

「勝手のようではござりますが、只今会いましたところで、拙者を拙者とも分りませず、積もる話をするこもなりますまい。御当家のお情けに甘えて、何とぞ、このまましばらくの間お預りを……」

「なるほど」と、鴻山は、弦之丞の氣持が分るようにならずいた。

「よろしゅうござる。医養の及ばぬ病とはきくが、この鴻山が手をつくしても、御養生の

方はおひきうけ致す」

「それにて安堵あんどいたしました。何分ともここしばらくの間を」と、弦之丞はそこを辞して、茶莊の門を淋しく出てきた。

すると、入れ違いにスウと門へ入って行つた一挺ちようの蒔絵まきえ駕かご。

「あ、今のが——」

と、思わず天蓋を振りかえらせた時、玄関の方で、何か、とりとめなく口走るお千絵の声が、かれの胸へ針のような辛さをうった。

「おお……」

門柱の蔭にすがつて、弦之丞は、駕から奥へ連れられてゆく、痛ましい人の姿を見送つていたが、やがて、両眼つらへ掌てを当てたまま、鼠甲ねずみかいき斐絹ひきぬのかけ寒く、代々木の原を走つてた。

弦之丞は、今朝、起きるとすぐに机に向つていた。

何であろうか、わき目もふらず、奉書七、八枚に達筆を走らせ、草そつし終ると、二重に嚴封して、封の表に太く強く、「上じよう」と書いて机にのせ、しばらく腕をくんでいた。

これでよかろう——というふうには、やがて次の部屋に向いて、

「万吉。用事がなかったら、ちよつとここへまいつてくれぬか」

「へい」というと襖ふすまが開いた。炬あべりに砥との粉こと紅べに殻がらと十手じつてが置き放してある。暇にあかして磨きをかけていたのだろう、十手が燦さんぜん然と光ってみえる。

「何か御用でございますか」

「ウム」といって、机の上の奉書封じを取りあげたが、ふと次の部屋を覗のぞいて、

「お綱は？」と、万吉の顔を見た。

「何を思ひだしたか、今朝は朝飯も食べずに、妻恋の家を畳んでくるのだといつて出て行きましたが」

「どうも解げせぬ女ではある」

「わつしには、少しばかり、お綱の心が分つております。だが、それをこうとは、あなたへいえない話なんで……。まあ当分のうち、あの女のすることを、見ていてやって下さいまし」

「それは困る。今の場合、お綱がこの宿院におることすら、密かに迷惑と存じている」

「けれど、あの女のことですから、一念思いこんでいることは、きっとやり通すだろうと

思うんで」

「不審ふしんなことを申す。なぜじや」

「ゆうべ、弦之丞様が代々木からお帰りなすつて、いよいよ阿波へ立つ日も近づいたぞ——と俺わっしへおつしやつた一言ひとことを聞いてすら、今日はもう、早速、妻恋坂の家を片づけ、いつでも一緒に旅立つ覚悟をしているくらいですから」

「すると、拙者について、あれも阿波までまいるつもりでいるのか」

「それをお綱は、四天王寺で犯した、自分の罪の償つぐないだと信じているのですから、止とめるわけにも行きません」

「何とあろうが、さようなことはまかりならぬ。拙者が阿波へ渡るのは、大きくは公儀のお為、小さくは甲賀世阿弥よあみの消息をつきとめ、お千絵殿の……」といいかけて、弦之丞は、ふと暗い顔になった。駕から出て、代々木荘の奥へ入ったあの姿が——あの狂わしい声が、まざまざと思い浮かぶ。

と、またきツとなつて、万吉を責めるように、

「そちもまたそちではないか。お綱がさような心得違いをしておるなら、なぜとくと意見をしてやらぬ。ただの旅やいたずらごとではないぞ、他領者たりのうものきんせい禁制の関をくぐつて忍び

こむ命がけの探索。女づれの同行がなるか成らぬか、つもってみても知れたことじゃ」

「……………」万吉は、一言もなかつた。俺はまったく、お綱の心を買ひすぎている、と自分でもはつきり気づいている彼であつた。

そのくせ、お綱の今の真向きな気持——それはやっぱり事情のゆるすかぎり、容れてやりたい気がするのだ。けれど、弦之丞へ恋していることだけは、万吉には、どうも話しくくつて、ついそのまま、おくびにも出さずにいる……。

だから弦之丞には、お綱が、天王寺で紙入れを掏つた罪を深く悔悟している心もわかり、また、その悪い渡世の境界から、生れ代ろうとしている悩みも分っているが、より以上、どこまでも、自分について——しかも阿波へ渡る秘密の旅先まで、つきまとおうとする心のほどが解せないのである。

恋の力！　ときけば、彼にも一語でうなずけよう。その代り、今の如き真剣味でいる弦之丞は、キツと、お綱を悲嘆の底に落すだろう。

あの、不愜なふびんお千絵を忘れて、お綱の恋をうけいれるような弦之丞でないことは、万吉にも、あまりに分りすぎている。

「おっしゃられてみれば、まことに、ごもつともでございます」と、引き退るさがよりほかに

ない。

「折があつたら、よく言い悟さとして、得とく心しんさせておくがよい」

「なんとか、諦あきらめさせましよう」と、ぜひなく答えたものの、いつか板挟みになっている万吉、肚はらの底では、密かに弱りぬいている。

「才、話がそれた——」と、弦之丞は改まつて、「ご苦労だが、今日は一つ頼みがある。この密封の書付を持つて、大急ぎにまいつてくれい」

「承知しました。して行く先は？」

「辰たつの口くちの評定所ひょうじょうしょ——あの右側の御門にある目安箱へ、この上書をソツと投げ込んで来てくれまいか——つまりこの一書は、弦之丞がいよいよ阿波へ発足する口火となるもの。早速、行つてきて貰もらいたい」

「エ？」と万吉。それへ出された密封の書付へ目をみはつて、

「では、これを評定所の目安箱へ、ほうりこんでこいとおっしゃいますか」

「そうじゃ。ちようどきようは七の日にあたる。月に三度の御開錠日かいじょうび。目安箱りゆうえが柳やなぎ営いへあがる日である、午うまの刻こくを過ぎぬうちに、急いでそれを入れてきてくれい」

「かしこまりました」

帯をしめなおして、三尺と臍へその間へ、シツカリとそれをしまいこんだ。ついでに、磨きかけていた十手を内ぶところへ逆に差して、

「じゃあ行つてまいります——」

「頼んだぞよ」弦之丞も立つて、書き損じの反古ほごをまるめ、炬ろの中へくべて、ボツと焰ほのおにしてしまった。

「一走りでございます」

煙といつしよに、威勢よく、宿院の軒を出た目明しの万吉。大股に急ぎながら、しきりと首をかしげている。

「目安箱へこれを入れる？ ……目安箱へ？ ……ははア、さてはいよいよ昨日きのうの相談で、常木様と弦之丞様と、そして松まつ平たいらの殿様と、何かの話がまとまったな。それだ！ そこでこの御上書ごじょうしょだ、ウム違えねえ！ とすると、阿波の怪しい様子を將軍様のお耳に入れて、表向きのお沙汰となるか、それともまた、弦之丞様と俺とが、こっそり阿波へ探索に入る段取りとなるか、なんとか目鼻がつくんだろう」

ひとり問いひとり答えて、一月寺の横門から、根岸田圃たんぼを斜はすかに切ツてゆく万吉。笹ささぎの雪ゆきから車坂の途中、幾つも駕屋を抜いて、タツタと元氣な足を飛ばしていた。

「時節到来。時節到来」

こんなことをつぶやきながら、ニヤニヤ笑つて駈けて行つた。ドンと誰かに突き当たつたが、

「おツと、ごめんよ！」振りかえりもせずにもまた駈ける。足はドンドン加速度になつて、またたくうちに外神田から鎌倉河岸——評定所のある辰の口和田倉門はもうすぐそこだ。

「春が来たぜ、春が来たぜ！ お濠の柳が芽を吹いてら！ 丸の内へも渡り鳥がやってきたぜ！ 三本鳥毛の槍先にチラチラ蝶々が舞っている。——こういう春は毎年だが、この万吉には十一年目で、ヤツと巡りめぐつてきた春なんだ！ なんだか今年はすてきもねえいいことがあるそうだ。時節到来、時節到来」

かれの心が、こう叫んだ。

実際今の万吉は、春の鳥のように軽快だ、前途に耀々たる曙光がある。まだ深い話を弦之丞から打ち明けられていないが、この御上書を辰の口の目安箱へ投げ入れてこいというからには、ほぼ想像のつく内容——すなわち、急転直下に、いや急転直上に、阿波の内密、公卿浪人の策動、甲賀世阿弥のことなど、すべてを簡条書きにして、將軍家の御

覽に達し、そして？　そして？　さアその先は万吉には分らないが、なにか、いい吉きつちよ兆ちやうのある気がする。

まもなく外濠そとぼり、和田倉御門。

評定所はその筋向いにみえる。

「おお、あれだな」

と万吉、スタスタと門前へ寄つて行つた。

厳いめしい冠木門かぶきもんから奥まった式台まで、ズーと細かい玉川砂利が敷きつめてある。

その袖門そでもん、門柱から二、三尺離れた所に、いわゆる目安箱というものがかかつていた。

これは、八代將軍吉宗よしむねの時代から設けられた一つの制度で、百姓、町人、僧侶、神官、

誰でもかまわぬ、何か治政上についての得失利害、役人の奸曲かんきよく、奉行の圧政など、上じ

申ようしんしたいことがあつたら、書面にしたためて箱の中へ投げ入れておくことをゆるさ

たもの。

開錠日かいじょうびは、月三回、七の日と決まっている。お錠番は評定所付きの御小人目付おこびとめつけ、その

日の正午に箱ごとピンとはずして、柳營りゆうえいの奥坊主へ届ける、奥坊主はすぐこれを本丸

の小姓頭がしちうの部屋にもちこみ、そこで御用取次の役人がついて、將軍家休息まの間の中央にす

えておく。この間は何人なんびとでも、その箱の中の書類に指をふれることは無論、覗くのぞこともゆるされない。

その目安箱の側へよつて、万吉は、ふところから弦之丞のしたためた密封をさぐり出し、生唾なまつばをのみながら、箱の口へ、ポンと入れた。

「さて、このあとの御沙汰が、吉とくるか、凶とくるか。……この書付一本が、天満組てんまぐみの俺たちや、甲賀家のお千絵様、また弦之丞様たちが、生涯浮沈ふちんの分れ目……」

自分の手に入れた書類が、箱の底へゴソリと落ちこんだ音に、かれは一種の昂奮と動悸どうきをおぼえて、そこに茫ぼうとなっていた。

「町人！ 早く歩けッ」

門番にどなられて、万吉は初めてハツと吾にかえり、からくり人形のように、春風の中へ、ふわりと足を運びだした。

一方、その日の目安箱は、常例のとおり、評定所づきの役人の手から、御小人目付おこびとめつけ、奥坊主くぼうず、御用番ごようばんの順をへて、江戸城本丸の將軍家休息の次の間にすえられていた。

やがて、將軍自身の出御しゅつぎよがある。

つきばんじょうとりつぎ  
月番御用取次は、たちばないずものかみ  
立花出雲守。

ズーと、お座所の前へそれをすすめて、

「ただ今、評定所の目安箱、お表より上がりました」といった。

「ウム」

当時の將軍家は、十代家治いえはるであった。軽くうなずいて紅錦こうきんの囊ふくろをとりだす。いわゆる肌着はだつきのお巾着きんちやく、守り鍵かぎとともに添えてあるのを、

「開錠かいじょうせい」と、小姓頭かじらう高木万次郎の手に渡した。

ピンと、箱の錠をあけて、中の投書を揃え、將軍家の前へさし出して、空箱からばこは元どおりの順に下げ渡される。

家治はそれを持って、楓かえでの間へ入った。

四、五通の書類であった。楓の間は密室なので、小姓頭以外きんじのものは近侍しない。上から順にくり拡げて目を通してゆくと、やがて、將軍家の眼に、異様なかがやきが流れた。

それは、弦之丞が書いて、万吉が投げこんだあの奉書七、八枚の長文である。

「ウム……これは容易ならぬことじゃ」

息を殺して黙読して行くうちに、家治は強い衝動をうけた。今、柳營の春は和光わこうにみち、

天下は風のごとく治まっていると思いのほか、いつか西都に皇学の義が盛んに唱えられ、公卿と西国大名の間に、恐るべき叛逆の密謀が着々として進んでいるというのは、なんとしても彼だけには、不審であつた。

しかも、弦之丞の上書には、歴然と、それが簡条書きに並べられてある。そして、蜂須賀阿波守がその反幕府派の盟主であることが、指摘されてあつた。

阿波第一の不審は、十年前から、領土に他国人を入れぬ制度をとつたこと。

第二は、安治川の船屋敷で、堂上公卿たちとしばしば密かな会合を催すこと。

第三は、宝曆変の時に、倒幕の先鋒であつた竹屋三位卿が、幕府の目をくらまして失踪の後、いつか同家の食客となつていること。

等、等、等、いろいろ家治の心胆を驚かさぬものはない。さらに、別札には、それについて、弦之丞の目的である、一通の嘆願書がそえてあつた。

願書は、甲賀家の私事に筆をおこしている。

今から十一年前に、その内秘をさぐるため阿波へ入国した世阿弥の顛末。また、その一子が女であるため、昨年改易されて甲賀家のたえたことを誌し、最後に、自分は仔細あつて、阿波守の身边に接しもし、また世阿弥の所在を知りたいこともあるので、烏漣な

がら、公儀の隠密として、阿波探索の密命を仰せつけられたい——という熱願の文面であった。そしてなお委細のことは伝手つてを求めて、元の京都所司代、松平左京之介の手もとまで、言訴げんそしてある由をつけ加えてある。

弦之丞が、目安箱を利用して、わざとこうした手段をとったのは、代々木荘で鴻山と左京之介との相談でやったことだが、一つには、お千絵の幸福のため、甲賀家の再興のためでもあった。いかに自分が苦心しても、公おおやけならぬ、一個の法月弦之丞としてやった仕事では、無意味である。

目安箱のききめはあった。

それから十数日の後、松平左京之介、突然お召めしじょう状じょうをうけて本丸へ伺候しこうした。果たして、將軍家は、楓かえでの間の御用筆筒だんすから、弦之丞の嘆願書を取りださせ、阿波の嫌疑や、甲賀家のことや、弦之丞の身がらについて、さまざまな下問かもんがあった。

この日、將軍家は左京之介に、何か、大事な密命をさずけたらしい。それかあらぬか、左京之介は、屋敷へ帰るとすぐに、常木鴻山を別室に招いて、密談数刻の後、使いを飛ばして、一月寺にいる弦之丞を呼びにやった。

吉報を待ちわびていた弦之丞、この日だけは歩くのももどかしく思ったか、駕を急がせ

て、駈けつけてきた。

そして、松平家の奥へ入った――。

たしかに、この夜、かれは松平家の脇門わきもんから、奥座敷へ入ったに相違なかった。だが――どうしたのだろうか？ 幾日たつても、法月弦之丞、あれツきり屋敷から出た様子もなし、また、一月寺へも帰つてこない。

悪行善心あくぎようぜんしん

「喧嘩だッ」

「喧嘩だ、喧嘩だ」

朝ツばらからの騒ぎである。

五十間の両側に、暖簾のれんをならべている飲食店の内から、客や女が、いつせいに外へ飛びだしてみると、廓くわくわの大門おおもんぐち口から衣紋坂えもんざかの方へ、一人の侍が、血刀を持ったまま、盗ぬす人のように逃げて行つた。

「斬やられた！」

「誰だ誰だ、斬られたのは」

「あいて相手は逃げてしまった——早く、早くしろいッ」

「才、こいつア助からねえ、あばら肋にかけて斬られていッ」

「助からねえツて、見ている奴があるものか」

「オイ弥次馬、ばかな面をして見物していねえで、手を貸せよ、手を！」

ちようど、おおもん大門の高札場前。

喧嘩や斬合いは、この廓の年中行事。別に珍らしいほどでもないが、夜と違つて朝ツぱらの血まみれ騒ぎ、真つ黒になつてワラワラと駈け集まつた。

肩から背すじにかけて、むごい太刀傷を浴びせられ、そこにうつ伏していた男は、この辺の者とみえて吉原つなぎのあわせばんでん袷袷纏そろばんだまに、算盤玉の三尺をしめ、ウーム、ウームと、土を吹いて苦しげに呻うめいている。

「や、こりや孔雀長屋の者じゃねえか」

「もんび紋日の虎だ。紋日の虎五郎だ」

虎といえ、知らぬ者はない程なあぶれ者、驚きながら抱き起こすと、朝酒でもあおつていたところを斬られたとみえて、おびただしい血がこんこんと吹き流れている。

「この野郎め、また酒を食らやがって、人の見境みさかいなく喧嘩でも吹ツかけやがったに違ねえ。ざまア見やがれ、といつてやるところだが、悪い奴でも、こんな深傷ふかてを負つちや可哀そうだ。オオ、番屋の戸板を外してきねえ」

気転のいいのが三尺を解いて、傷口を押さえているまに、持ってきた戸板へ怪我けが人にんのをせ、祭りのように、ヤツサヤツサと五十間を急ぎだした。

ゾロゾロとついてくる弥次馬を追ッ払つて、四、五人の顔役だけが戸板と一緒におはぐろ溝とびの小橋を渡り、路次の狭い長屋の奥へ入つて行つた。

「オオここだぜ、虎の家うちは」

「誰かいるのか」

「ガラ空あきだ——誰もいやしねえ」

「隣で聞いてみねえ、隣だよ」

戸まどいをしている間にも、虎五郎の顔は土色に変わつてきて、戸板の隙からポタポタと垂れる血汐も力なく細つてくる。

「オイ、隣の衆——」と、一人が台所から首を突つこんで、

「この虎五郎の家はガラ空あきだが、誰か家の者はいねえんですか、大変が起きたんだ、大

変が」

「アア、お隣の人ですか」と羅宇屋煙管の親爺が、なんの気もなく破れ障子を開けて言った。

「稼ぎに出る子供がいますよ、三輪ちゃんに乙坊というのがネ——。それが今朝、ひもじそうにふるえているので、よけいなおセツかいだが、お隣の飯櫃をのぞいてみると、御飯なんざ一粒だつてありやアしねえ。空ツぼだア。で——今私のところで、お茶漬を食べさせてやっているところなんだが、何か御用ですかい」

「子供じゃ、しようがねえなア」

「じゃ、親父さんを探したらいいでしょう。またお決まりの茶飯屋へでも行つて、勝手な大たくらを吹いているに違いない」

「ところがよ、その紋日の虎が、どこかの侍に斬られたんだ」

「えッ、き、きられたンですか、虎さんが」

「戸板にのせて持つてきてやつたのだが、それじゃ、手当てをする者もねえだろう。もつとも、どうせお陀仏になることは、相場がきまつている怪我人だがネ」

「そ、そいつア大事だ！」

と、色を失った羅<sup>らう</sup>宇<sup>う</sup>屋<sup>や</sup>の親<sup>おや</sup>爺<sup>ぢ</sup>が裸<sup>はだ</sup>足<sup>だし</sup>で外<sup>とち</sup>へ飛<sup>と</sup>びだした途<sup>と</sup>端<sup>たん</sup>に、その家<sup>いへ</sup>で、朝<sup>あさ</sup>飯<sup>いひ</sup>を貰<sup>もら</sup>っていたお三<sup>さん</sup>輪<sup>りん</sup>と乙<sup>おつ</sup>吉<sup>きち</sup>が、手<sup>て</sup>に持<sup>も</sup>っていた飯<sup>いひ</sup>茶<sup>ち</sup>碗<sup>わん</sup>をとり落<sup>お</sup>して、ワ<sup>わ</sup>ーツ<sup>つ</sup>と一<sup>いっ</sup>緒<sup>しょ</sup>に泣<sup>な</sup>いてしま<sup>ま</sup>った。

その騒<sup>さわ</sup>ぎに、長<sup>なが</sup>屋<sup>や</sup>中<sup>ちゆう</sup>が総<sup>そう</sup>出<sup>しゅつ</sup>になつて、とにかく、怪<sup>け</sup>我<sup>が</sup>人<sup>にん</sup>を戸<sup>こ</sup>板<sup>ばん</sup>から移<sup>うつ</sup>したが、近<sup>か</sup>所<sup>つぱ</sup>合<sup>あ</sup>壁<sup>かき</sup>の同<sup>どう</sup>情<sup>じやう</sup>は、瀕<sup>ひん</sup>死<sup>し</sup>の紋<sup>もん</sup>日<sup>にち</sup>の虎<sup>こ</sup>よりは、むしろ、そばにメ<sup>め</sup>ソ<sup>そ</sup>メ<sup>め</sup>ソ<sup>そ</sup>と泣<sup>な</sup>いている、お三<sup>さん</sup>輪<sup>りん</sup>と乙<sup>おつ</sup>吉<sup>きち</sup>の方<sup>かた</sup>に集<sup>あ</sup>まつて、

「泣<sup>な</sup>くんじやない、泣<sup>な</sup>くんじやない」

と、菓<sup>か</sup>子<sup>し</sup>や食<sup>く</sup>べ物<sup>ぶつ</sup>を持<sup>も</sup>つてくる者<sup>もの</sup>があるし、

「心<sup>こころ</sup>配<sup>ぱい</sup>おしでない、今<sup>いま</sup>夜<sup>や</sup>は、わたくしが側<sup>そば</sup>にいて、面<sup>めん</sup>倒<sup>たう</sup>をみ<sup>み</sup>てあ<sup>あ</sup>げ<sup>げ</sup>るから」と、吾<sup>わが</sup>家<sup>か</sup>をほう<sup>ほう</sup>つて、泊<sup>とまり</sup>りにき<sup>き</sup>てくれるお婆<sup>おばあ</sup>さんもある。

苦<sup>くる</sup>悶<sup>もん</sup>のあと<sup>あと</sup>は昏<sup>こも</sup>睡<sup>すい</sup>に落<sup>お</sup>ちて、この界<sup>かい</sup>限<sup>げん</sup>で鼻<sup>はな</sup>つまみ<sup>ま</sup>なあぶ<sup>ぶ</sup>れ者<sup>もの</sup>も、息<sup>いき</sup>の細<sup>こ</sup>りととも<sup>とも</sup>に断<sup>たん</sup>末<sup>まつ</sup>へ近<sup>か</sup>づ<sup>づ</sup>いてゆ<sup>ゆ</sup>く。

「もう、駄<sup>だ</sup>目<sup>め</sup>でしようよ」

と、怪<sup>け</sup>我<sup>が</sup>人<sup>にん</sup>のほう<sup>ほう</sup>へは見<sup>み</sup>きり<sup>り</sup>をつ<sup>つ</sup>けて、あ<sup>あ</sup>したは早<sup>はや</sup>速<sup>そく</sup>、虎<sup>こ</sup>五<sup>ご</sup>郎<sup>らう</sup>の枕<sup>まくら</sup>元<sup>もと</sup>で、長<sup>なが</sup>屋<sup>や</sup>の誰<sup>たれ</sup>彼<sup>か</sup>三<sup>さん</sup>、

四人がヒソヒソと善後策ぜんごさくの相談。まず何よりの問題は、お葬式の費用であつた。

「しかたがありませんから、町年寄まちどしよりへ泣きついて、いくらかお慈悲を仰ごうじゃありませんか」

「駄目駄目。およしなさいよ」

「虎さんじゃネ——なにしろ、可哀そうだと、いつてくれる者はありませんまい」

「ひどい悪者わるもので通っているから——こんな時には」

「じゃ、長屋の衆に、もう少しずつ泣いて貰つて、棺桶かんおけと線香代……」

「お寺は？」

「箕輪みのわの浄閑寺じようかんじ、あすこの、投込みなだへ、無料で頼むよりしようがないでしょう」

「浄閑寺の投込みくろわは、廓くわくの女郎衆ひきとで、引取り人にんのない者だけを埋葬する所。地廻りじまわの無縁むえん仏ぼとけまで、ひきうけてくれるでしょうか」

「困つたなあ。といつて、ほかに方法はないから、そこを一ツ、泣きついてみましょうよ」

虎五郎こごろうは、ドンヨリした眸ひとみを天井へ向けて、仮面めんのような、怖い皺しわをよせていた。と、その蒲団ふとんの足の方へ、うつ伏していたお三輪さんりんがヒヨイと、

「お隣の小父さん。困るツて、お金のことなの？」

泣き腫はれている顔をあげた。

「ウム、お金だ。だがネ、お三輪坊。おめえなんか子供だから、なにも、そんなことを心配するにや当らないよ」

「でも小父さん、お金なら、まだちゃんのおふところに、小判がたくさん残っている」

「えッ、小判が？」

半信半疑で相談の上、虎五郎の胴巻をほどいてみると、お三輪のいったとおり、垢あかもつかない鑄ふき立ての小判が、古畳の上にザラザラと二百両余り。

「あ！ 小判だ」

「ほんものだ！」と、一同は、ぎよツとして手を引ツこめたまま、ただ茫ぼう然ぜんとしてしま

う。  
さて、難儀な中にまた厄しる介ものな代物が出てきた。無職で性質たちの悪い紋日の虎が、金座の垣る堀ぼから出たばかりの、うぶな小判をこう持っているのは怪しいよりは怖ろしい。この金の素す姓じょうも問わずに、手でもつけたら、それこそどんな災難が降ってくるかも知れない……と、まず筋向うの糊屋のりやの婆さん、妙に、シンミリと声を落して、

「お三輪坊……」と、側へよった。

「いつたい、どうして、こんな大金を虎さんが持っているのか、お前、なんだか知って  
そうだね……」

「ええ。知っている」

お三輪は、率直に答えている。

「こないだの晩、お綱姉ちゃんが、窓の下へきて、ソツと、あたにくれて行つたの……」  
「えっ、お綱さんがかい？」と、みんな顔を見あわせて——「なんだツて、お前にそれを  
渡して行つたの」

「このお金で、廓なかくにいる、小ちやい姉ちゃんを落籍うけだして、あとのお金で店でも出して、み  
んなで仲よく働いてお暮らしよ——、そうして、細かいことは、この手紙に書いてあるか  
ら、お父さんが帰つたら、よく、読ンでくれるように、頼むんだよ……つて、そういった  
まま——」

話しているうちに、お三輪はシクシクしゃくりあげて、後のことは言いにくそうに、蒲  
団の中へ顔を埋めた。

「ふうーム……」と、等しく、長屋の者が、目と目を見あわせていると、今まで、昏こん々こん  
としていた紋日の虎。

「ア痛……、ア痛ててて……」と、苦悶の皺しわを深くよせて、火のような喘あえぎと一緒に、なんとしてか、ポロポロと涙を流した。

「す、すまねえ。……お綱にすまねえ、お長屋の衆、後生ごしょうですから、わつしが目をつぶる前に、あいつに一目会わして下せえ。……お、お綱は、ここにおりますから」

おののく手で、つかみ出した手紙の端——、それもベツトリと黒い血にひからびて、一月寺——という字が淡うすく書いてある。

死期を悟ったものであろう、紋日の虎五郎、苦しい息で、しきりに悪あくぎよう行をざんげする。

「悪かった、すまなかつたよ……」

唇をワナワナさせて、繰り返した。

「お三輪や、乙吉や、廓なかへ売り飛ばした娘は、みんな、おれと、お才との間にできた子だ。すまねえが、おれのような悪い親父おやじを持った因果。……だが、お綱は、わつしの子じやありません。そのお綱から、意見手紙をつけてくれた、三百両の金まで、いい気になって、飲んだり打ったりしておりやした。罰ばちがあたつたんです、罰だ。こうなつたのも……」

つかんでいた手紙を、力なく離して、

「下谷の一月寺におるッて書いてあります。お長屋の衆、後生ごしょうですから、お、お綱にちよツと知らせておくんなさい。あ……あいつに一言ひとこと、い、いい残すことがあります。わつしがこのまま死いつてしまうと、お綱は、とうとう一生知らずにいるでしょう……」

何か深い仔細があるらしい。

それをお綱にいわないうちは、さすがな虎も、両掌りょうてを合すことができないふうだ。一月寺といえ、根岸の奥、誰か一走り行つてこい——イヤ、あぶないぞという者がある。アレは名うてな女スリ、この辺へ立ち廻つたら届けろという五人組のお沙汰だ。

といつて、死なんとする善よき声を、無情にほうッてもおけまい、長屋一同が口どめの誓約をして、今夜こツそり呼んできて、すぐ帰したら、まさか、番屋へも知れやしまい。

よかろう、ではこのことを、他言たごんするような不人情者は、この孔雀長屋くじゃくながやからお構いどうぞ。——というので、

「オイ、虎さん。今お綱さんと呼んできてやるから、それまで、気をしっかりしていなよ。いいかい！」

と、中で、年の若い男が、尻切しりきれ草履ぞうりを突ツかけて、あたふたと、長屋の路次を飛びだ

して行つた。

\* \* \*

目安箱の上書が効を奏して、楓の間の密議となり、元京都所司代であつた松平輝高は、召されて將軍家から内々に秘命をうけた。

その結果。

のりづきげんのじょう  
法月弦之丞

は、松平家から火急な使者をうけて、いよいよ吉報と、よろこんで駆けつけたが、不思議や、そのまま行方不明となつてしまつた。

よもやに引かれて、今日は帰るか、明日は松平家から、なんとか沙汰があるかと、一月寺の宿院には、万吉とお綱とが、痩せる思いで待つてゐる。不安な、さびしい日が二人に続いた。

けれど、遂に、弦之丞は、帰らなかつた。

お綱は憂鬱になつた。

「やッぱり私は、あの人に嫌われている……」

万吉は万吉でまた、

「こいつは、目安箱が、悪い方へたつたかな？ ……」と考へて、とかく凶事にばか

り想像される。

で、焦躁しょうそうのあまり、かれは今朝早く飛びだして行った。

松平家へ出向いて様子をきき、もし、そこで要領を得ないようなら、代々木荘まで行って、常木鴻山こうざんに会い、その後の成行きや、また弦之丞の帰らぬわけを糺ただしてくる、とお綱にいい残した。

すると、午後になつて、目明しの万吉。どこで支度をととのえたか、旅合羽たびがっぱに道中どうちゆう差うざし、一文字笠もんじがさを首にかけて、

「お綱、とうとうお別れだ」

不意に、妙なことをいって、帰ってきた。

しかし、出て行った時の不安な顔とは、ガラリと変つて、ばかに元気づいている。そして、遠旅とわたびにでも出るように、振分けや畳たたみ桐油紙とうゆしまで肩に掛け、上がりもしないで、

「常木様に会った話の都合で、急に、おれはこれから、西へ素ツ飛ぶことになった。——だが、お前に断わりなしで出先から立ってしまふのも、あんまり寢覚ねぎめがよくねえから、ちよつと、お別れをいいに戻つたが……、お綱、ここはなんにもいわないで、お前は一つ、別に考えなおしてくれ」

お綱はあツ氣にとられてしまった。

万吉の口裏では、恋はともあれ、真心だけは、弦之丞も不愜ふびんなやつと、認めてくれていらしいので、妻恋の家も畳み、妹きょうだい弟たちの始末もみて、いつでも、江戸に未練のないように、心支度をしているものを――。

その弦之丞は、出先から姿を隠し、万吉はまた万吉で、突然、帰ってきたかと思うと、上がりもせずに腰掛け話で、

「おれは急に西へ立つから、お前はお前で、別に身の落ちつきを考えなおすがいい」と、いわんばかりな、突ツ拍子とびょうしもない言葉。

サツと、お綱の顔色が変った。

自分はまだ、弦之丞様にも、誰にも信じられていない！ だから振り捨てられるのだ――。厄介な女と、二人が腹を合せて態ていよく私を振りきつてゆく――。西へ？ それは無論、阿波への旅であろう。

こう思うと、お綱は、ワナワナと唇をふるわせた。勝気なだけに、ジツとこらえてはいらぬが、こみあげてくる悲しさの後から熱い涙が、とめどもなく睫毛まつげに溜たまった。

「万吉さん——」

いきなりすりよると、万吉の手を痛いほど握り取って、

「な、なぜ、こうならこうと、明らさまにいつておくれでない。私も江戸の女、事情を明しておくのなら、どうでも自分の情を張ろうとは言いはしない……」

「だから、その訳を話して、得心して貰いてえと思つて、急ぐところを引ツ返してきたのじゃねえか。まあ、落ちついて、おれの話聞いてくれ」

「いいえ、聞かないでも、およそのことは分つています。だけれど、それじゃお前……」

「おツと、その後をいつてくれるな。墨屋敷の窓の下で、約束したことは、必ず忘れていやしねえ。またお前が命がけで、お千絵様を探りだしてくれたことも、弦之丞様としてみれば、心じゃ礼をいつているくらいだ。だが、ままにならねえのは今度の旅立ち……、弦之丞様は、この万吉にさえ一言も洩らさずに、もう半月も前に、中仙道から上方へ、お立ちになつてしまつたのだ」

「えッ……。では法月さんは、もうこの江戸にいないのだね……」

「そうよ。俺もずいぶん半間だったが、弦之丞様も弦之丞様だ。松平様のお屋敷に呼ばれて、常木様と三人で、コツソリ相談をきめるとすぐに、代々木荘から夜にまぎれて、甲州

街道をお急ぎなすってしまつたという話——」

「じゃ、万吉さんまでを置き残して？ ……」

「だから俺も、そう聞いた時にや、常木様へさんざん不服を並べてしまつた。けれど、深い仔細を聞くと……」と、にわかになを低めて、ソツとあたりを見廻しながら、上がりがまち框から身を延ばした。

「目安箱の御上書ごじょうしょやら、左京之介様のお計らいで、弦之丞様へ、ごく密々なお墨付が下つたのだ、早くいえば将軍家のお声こゑがかり——、阿波の間者かんじやろう牢ろうにいる世阿弥よあみに会い、

蜂須賀家の陰謀をあばく一ツの証拠を聞き取つてまいれ——という御内命であつたそうなの

「では、とうとうそのことが、将軍様のお指図とまでなつて？」

「公儀で表沙汰となさるには、まだ拠より所ところが充分でない。といて、これから大がかりに、所司代やお目付が手を廻せば、向うで気取けどつてしまうから、この探索は弦之丞様一人がいといふ御方針になつたらしい。そこで弦之丞様が、首尾よく甲賀世阿弥に会つて、何ぞ、蜂須賀家の急所を押すような証拠をつかんでおいでになれば、即座に、阿波二十五万石はお取潰とりつぶしとくる段取になつてゐる。無論そうなれば、あのお方ほう一代の誉ほまれ、甲賀の家にもふたたび花が咲こうし、十年以上も暗闇の手探りをしていた天満組てんまぐみの俺たちも、さす

がに目が利きいていたといわれるだろう——。けれど俺は不服だった」

包みきれぬ昂奮に、いつか調子を張はっている自分の声に気がついて、万吉は、ここちよつと言葉をきつた。

「阿波の海陸二十七関せき、そこを潜くぐつて 劍つるぎ 山さんの間者牢までまぎれこむのは、なるほど、できるだけ密ひそかがいいし、弦之丞様の身になつても、足手あしでまといがねえほうがいい。けれど俺は大不足おほいそき、ここまできて、大事な、本舞台へのり出さなくっちゃ、目明し万吉の一分が立たねえ。イヤ、そういうと、たいそう見み得えをきるようだが、大した出世にも金にもならず、ただこういう山を当てることだけを楽しみに、家や女房まで捨てて歩いている、目明し根性こんじやうにしてみりやア、ちつとばかり、役不足にも思うだろうじゃねえか」

「おれも天満てんまの万吉だ。ポカンとした面つらをして、江戸に待っていられるものか。弦之丞様に追いついて、どうでも一緒に阿波へ渡る——と、じつあ、常木様のお諭さとしもきかねえで、ぷいと、代々木を飛びだした帰り途——、これ見てくんな、柳原の吊つるしん棒ぼうで、合羽かっぱや脚き絆やはんの急仕立て、すぐに旅へ立とうとしたが、ハツと気がついたなアお前のことだ……」

しんみりと声を落すと、今まで、怨うらみがましく、邪推した心も解けてお綱は、ほつれ毛

の濡れついた顔をジツとうつぶかせた。

「その気持だけを買ってくれ。くだいようだがあかの他人で、俺ほどお前めえの今の気持を、よっく呑み込んでいる者はあるめえと思う。その万吉がこうして頼む。どうか、お前めえは得心して、今の望みを諦あきらめてくれないか」

万吉の言外にも、まだいろいろな事情があるう。まして、將軍家の内密なお墨付までうけたといえ、弦之丞が、万難を排して、阿波へ急いだのも無理ではない。

なおかつ、万吉の衷ちゆうじよう情も、いつそう同情にたえないことだ。

ただ切ないのはお綱の胸――。

事情ことをわけて頼まれてみれば、なおさら辛い立場であつた。恋の幻滅、甦こうせい生の失望。お綱の胸を割ってみれば、今は悪行の享楽もなく、帰る望みを持つ家庭もない。ただかすかに、心淋しくも、はかない思慕と、生れ代ろうとする本善ほんぜんの性さがだけがある。

「分りました……」お綱はやつとこころ洩らして、

「けれど、ねえ、万吉さん、今の私の心にもなつてみておくれ。どうしても、私は、あの弦之丞様にすがつていなくつては、生きておられない身なんだよ……」

「そりや俺も充分に承知している。承知しながら何もかも、諦めてくれと頼むのは、ちよ

うど、お前に尼あまになれという難題を吹ツかけるようなものだが」

「いいえ、尼になれる私なら、いッそ、そうなったほうがましだけれど、とても私の性質では、尼寺へなぞは住めないし、といつて、弦之丞様やお前さんの側を離れて、このまま江戸に揉もまれていれば、いつかまたよりが戻つて、癖くせの悪い指ゆび技わざの出来心が起こらないとも限らない……。私はね、万吉さん、それが一番怖ろしいと思つている」

「じゃ、お綱、これほど俺が頼んでも、得心してくれねえのか」

「決して、分らない我がを張るのではないけれど、万吉さん、私のほうからもこの通り、一生涯のお願いだから……」

「ええ、お前めえにそう手をつかれちゃ、いよいよ俺の立つ瀬がねえ」

「私という女一人を、助けると思つて、もし——お願いだから、お願いだから」

「幾ら何といわれても、俺をさえ、置き残して行つた弦之丞様のお覚悟を思うと、ウンと承知ができませんじゃねえか」

「ああ……それじゃどうしても——」

「才、才、才、おい！ お綱ツ」

「見遁みのがしておくれ」

「な、なにをするんだッ」

「私はもう、死ぬよりほかに……」お綱の手に、いつかあいくち首が光っていた。袖に巻いて、あわや、自分の喉のどぶえ笛——グサツと突き立てそうにしたので、万吉があわてて袖を引つ張ると、お綱はそれを振りもぎって、パタパタと奥の部屋へ。

「とッ、とんでもねえ真似まねをッ」

草鞋わらじばきのまま飛び上がって後から追いかぶさった。あやうく外それた切きッ尖さきが、キラリと見たのに冷やりとしながら、無理にそれをもぎ取って、

「ばッ、ばかな！ そんな、つまらぬ短氣を起こす奴があるものか、てめえも、見返りお綱といわれた女じゃねえか！ ……」

と、肩に大きな波を打たせて、真まツ青さおになった目明しの万吉、罵のしるごとく、叱のしるごとく、こう呶鳴りつつ涙は頬をボロボロと流れてくる。

乱れ髪に顔を埋めて、お綱もそこへ泣き伏してしまった。——ややしばらくのすすり泣き、万吉も棒立ちになつたまま。

すると、そこへ、戸まどいをしたような一人の男、バタバタと裏口へ入ってきて、座敷のぞの中を覗のぞきながら、

「御本院で伺いましたが、こちらに、お綱さんがおいでになるそうですが」

「あ、誰だい、お前は？」

畳の上に、脚絆わらじで突ツ立っている万吉、あわててヒ首を後ろへ隠して、土足のまま坐つてしまった。

「へい。私は、吉原の孔雀長屋にいる者ですが、お綱さんの親父さんが大門口で喧嘩をして対手の侍に斬られました。え、昨日の朝の出来事なんで……。昨夜はどうか持ち越しましたが、今夜あたりは、とても難かしそうだから、すぐに、私と一緒に来て貰いたいと——へい、長屋中の相談で、お知らせに飛んできたような訳で……」

「ああ、間に合つてくれればいいが」

枕元にいる長屋の者は、時々、深い溜息でこう祈つた。そして、お互いに、痛い心をジツと抑えて、虎五郎の容体を見まもつていた。

灯のつく頃に、だいぶ苦痛に疲れた怪我人は、もう呻く力も失せたらしい。汐の落刻に向うのではないか。皮膚の色、吸う息のもよう、刻々と悪いほうへ変ってくる。

「どうしたのでしょうか？」

「もう来そうなものだが……」

「会わせてやりたいものだ、間に合つてくれればいい。私たちはちつとも知らなかったが、お綱さんは虎さんの血を分けた娘じやないのだそうだ……それだけにねえ」

低い声でささやいてみると、また痛みが来たのか、怪我人は眉をしかめて、蝦のようにそりだした。と、その門口へ、一月寺へ使いに走つた男が帰りついて、

「来ましたよ、一緒に……」と汗を拭いた。

「エ、来たかい？」と、みんな自分のことのようにホツとすると、静かな下駄の音がして、土間の中に、お綱と見馴れぬ男が立つた。

「じゃ、そこで」

「エエ、私は、待つておりますから」と土間の隅ツこに腰かけたのは万吉で、不意な知らせと行きがかり上、ここへ一緒に来たのであった。

頭巾をぬいで上がると一緒に、

「あ、姉ちゃん……」

と、乙吉とお三輪が、蒲団の裾から飛びつくのを、側の者があわてて、

「しッ……いい子だからね」

と両の手へ抱き抑える。

その声に、意識を茫ぼうとさせていた怪我人は、かすかな気を呼び起こしたとみえ、あらぬ方へ力のない目をみはった。

枕元の者は、その耳へ口をよせて、

「お綱さんが見えましたよ。お前さんの、待ちぬいていたお綱さんが——」

顔の近くへ、指をさして示してやると、虎五郎の鈍い目は、それにしたがって、その姿を見ようとすするらしく必死にみはった。

そして、しばらくするうちに、薄暗い行燈あんどんの灯ほかげへ、ソウ……と寄ってくるお綱の姿が、やっと、彼の眸に入ったのであろう、下したまふた瞼めの肉をビクとさせて、ボロボロと涙を流したかと思うと、

「オオ……」

異様な感情の昂たかぶりに唇をふるわせた。

「お父とっさん——」

その刹那に、お綱は何も忘れて、虎五郎の側へ飛びついていった。そして、養父の出した手の上へ、自分の両手と顔をうつ伏せた。

「ア——」不意に、まわりの者が中腰になって、怪我人の顔を見なおした。瞬間であったけれど、見違えるほど皮膚の色が変つて、動かぬ眸が吊り上がっている。

「お父っさん！」

「おやじさん！」

「もし、もし……」

「氣をしつかりしておくれよ。せつかく、お綱さんが来て間に合つたものを」

「アア、もう難かしそうだ。お綱さん、せめて、お前、抱いてあげなさいよ」

「私も一言お詫をします——お父っさん！ お綱はほんとに親不孝でございました」

泣きすがると、虎五郎はホツと太い息を吐いた。そして、ゴクリと水が咽喉へ落ちると、

「お、お綱ッ」

こう一言、洩らした。

「すまなかつた……。もう、く、口ではいえない、後で、あ、あの押入れの奥を見てくれ、刀と……」

それだけであつた。

それが、紋日の虎の死であつた。

墓場のような無言のうちに、みんなのすすり泣きが起こった。万吉も土間の隅で、ジツと首をうなだれている。

ところへ、勝手口から、あわただしく入ってきた男が、お綱に大變を告げてきた。その者が、口忙しくいうことには、何だか今、手先臭い男が、此家を覗いているなどと思うと、一散に、番屋の方へ駈けだして行きました。

目前には、今息をひきとつたばかりの養父の空骸があり、側には、泣きじやくるお三輪と乙吉のいじらしい姿がある。

そして、お綱の身边には、もうひそかにその筋の目が光っている。という知らせだ。さすがのお綱も、当惑して、この成行きがどう神の手に裁かれるのか。これも、自分のなせる罪業のむくいかとしみじみと思う。

「逃げて下さい、逃げて下さい」

長屋の者は、お綱を、そこから引き離すようにして、「後の始末は、みんながどうにでも致します。なアに、お三輪ちゃんや乙坊だって、決して、心配することはないから」  
上がり框に腰かけていた万吉も、

「そうしたほうがいいだろう。ここへ捕手が踏ん込んで、枕元から縄付きになった日には、養父さんも安々と行く所へも行かれまい」

それでも、お綱は動かなかった。けれど、そのお綱自身よりも長屋の者が度を失って心配した。そして、追い立てるように支度をさせる。

「おお、あれを調べてみなくっちゃいけない。虎さんの遺言した物を……何やら押入れの奥に、お綱さんへ渡したい物があるといった……」

「刀——と一語いったようだが」

「それだけが気がかりで、ああして一目会いたいといっていたのだろうから、忘れては大変だ」

狼狽している騒ぎの中にも、こう気づく者があって、押入れの中へ首を突っこみ、ガタガタと何かかき廻していたが、やがて、二尺四、五寸程な細長い紙包みを探しだして、

「此品じゃあないか？」

と行燈を引き寄せた。

そして、埃だらけな澁紙をはいでみると、その下にもまた二重に桐油紙が掛かっている。丹念に麻糸を巻いてあるが、もうその中はあらためるまでもなく、脇差——ということが

手ざわりでも知れる。

「失礼だが、こんな物のある家ではないのに、大事に納しまつてあったところをみて、刀——といったのはこれでしょう。ではお綱さん、養父おやじさんの遺言どおり、これはお前さんに渡すから、とにかく、一時どこかへ落ちのびて、番屋のほとぼりをさますがいい。——そしてな、まじめになって、世間の噂を消しなさいよ。この養父おやじさんがいいお手本だ」  
口をそろえて、長屋の者、遠い旅立ちの門かどでも見送るように、涙にくれるお綱うながを促して、手を取らんばかり、否いやおう応なく外へ出る……。

と、遅かつたか！

見馴れぬ提灯ちようちんと侍の影が、あたりを見廻しながらこの路次へ入ってきた。

一同が、ハツと胸を躍らして、そこにいすくんでしまっていると、上役人らしくない若党を連れだした年配の武士。

「紋日の虎と申す者の家はどこであろうか」

「は、その家なら……」となお、何事かと怪しみながら、「ここでございますが」というと、

「わしは龍泉寺に住む、小池喜平こいけきへいという御徒士おかちの者じゃが」侍から先に身分を明あかして、立

話のまま来意を話しだした。

その言葉を一同が聞いていると、こうである。

自分の甥おいが、昨日吉原へきてフトした間違さきういから人を斬つたといふので、密かに調べてみると、それは、いつも附近で見かける角兵衛獅子の姉きょうだい弟いの、たった一人の男親だといふこと。実は、その獅子舞の姉弟のことは、常に家内が不愆ふびんがって、詳しいことを知っているので尋ねてきた。まことに気の毒ではあり甥おいの罪も償つぐなわねばならぬ、なんと、孤みなし児ごとなつたお三輪と乙吉を、自分の家にくれたと思つて、養育させてくれまいか。

思いがけない相談であつた。

長屋の者は、聞くと共に、嬉し涙にくれてしまう。

お綱にも、この場合、二人のために、もとより異議のない話である。なおもう一人、廓くわにいる妹の身は、この間の金の余りで、充分始末がつくだらうと、それも心安かつた。

「では、皆さん」

お綱は一同へ声低く腰をかがめて、

「お言葉に甘えて、後々のことは……」

ソツと、別れを告げたが、その侍には、わざと姉と名乗らなかつた。そして、ただ心の

うちで、浮世のドン底に棲む人々の美しい心を伏し拝みながら、桐油紙ぐるみの脇差を袖にかかえ、万吉と一緒にその路次から忍び忍びに歩きだした。

だいじだいひかく  
大慈大悲閣

ひとりになった。

もう親のない一人ぼっち。

女掬摸すりという兇状をもった姉は、あの妹きょうだい弟にいたちにもない方がいい。ただ、どうぞ、倅しあわせであつておくれ、いい芽めをまっすぐに育つておくれ……。

お綱は祈りながら、そつと頭巾の端で目を抑えた――。だが、無意識の間にも、足は自然に、暗い道を暗い道と選よつている。

いつになつたら明るい道を、明るい気もちが選ぶのだろうか。

悪い渡世とせの足は洗いました！

そう叫んでいるのに、誓っているのに、世間はそうと信じてくれない。養父が息をひきとる晩も、十手は影身につきまとう。

アア、歩けど歩けど道は暗い。今の足元も遠い先も――。

彼岸ひがんのない暗夜行路、それが、終生たじ辿らねばならない自分の生涯だろうか――と、お綱がホツと息をした時、睫毛まつげの涙の光ではなく、ボウとあたりが明るくみえた。

いつか、お綱のいる所は、冷寂れいじやくとした仏地ぶつちである。吉原尻じりから千束せんぞくをぬけてきたとすれば、そこは多分、浅草の観音堂。

ふり仰ぐと、堂閣ぼんごさしの千本廂せんぼんに、錆びた金色の仏龕ぶつがんが、ほの明るく廻廊を照らしている。「待つて……」

お綱がそこでそういうと、同じように、黙々として、先へ歩いていた万吉は、下駄の緒でも切らしたかと、

「……………」

黙って、向うに立ち止まった。

「万吉さん」

「ウム？」

「ちよっと、待つてくれないか」

「いいとも、ゆつくり休むがいい。俺も旅支度までしているくらいだから、実をいうと、

肚はらの中じや先をあせつてゐるんだが、こう夜が更ふけちやししようがねえ。明日あしたの朝の早立ちとしよう」

「私も、別に休みたい訳じやないけれど、お父いつさんが臨終いまわにまで、アア言い遺のこして行つたこの紙包みに、何か、深い仔細があるような気がするので、早く開けてみたいと思つてね……」

「ウム。詳しいことは知らないが、俺もそう考えていた。じやお綱、向うの廻廊がいいだろう。御灯みあかしが下がつてゐる」

更あけてゐるので参詣の人影もない。

たまたま、人影らしいものがあるかと思れば、宿のない病人や順礼が、大慈だいじの御廂みひさしを借りて、菰こもにくるまつてゐる冷たい寢息……。

淡島堂あわしまどうの池で、キキ……と亀の啼なくのも聞えるほど、伽藍がらんの空気は森しんとしていた。

「俺もさつきは、土間の隅で待ちながら、思わず、貰い泣きをしていたが、なんだか、其そ品れは刀だという話じやないか」

「それが、どうも私にや腑ふに落ちない一ツなのさ……。私の家は小さい時から、今も同じな長屋暮らし、こんな刀がある筈はないのだもの」

「フーム、するとそりやなんだろう、お前めえが小さい時に死んだという、お袋さんに由緒のある刀ものじゃねえかな」

「私も……もしや、そうじゃアないかと思っっているんだがね……何か、私とお母つかさんの……」

二人は、廻廊の隅へしやがみこんだ。

ちようど、内陣の薄い明りが、横の扉から流れているので、ほごこうとする、麻糸の結び目もどうやら分る。

その糸を解き終えると、お綱はフイと、

「万吉さん」

考えるような眸をあげて、

「なんだか私は、これを開いてみるのが、少し怖いような気がしてきたよ」

「何か思い当ったかい？」

「こんなシーンとした晩に、この観音様のお堂に立ったせいとか、初めてフイと思うかん  
だことがある……。それはもう、十何年前のことだけれど」

「と、すると、お前めえが八ツか九ツごろ？」

「なんでも、うすら覚えに考えると、あの弁天山や仁王門の桜が、チラチラと、散りぬいている晩でしたっけ。——その小さな時分の私が、お母つかさんの手に引かれて、この観音堂へ来たのですよ、それもたしかに夜半よなかのよう……」

刀の包みを解きかけて、お綱はこう語りだした。なつかしい、その頃の夢をおうように。「万吉さんにも、一度話したことがあるけれど、お母つかさんはお才さいといって、仲之町なかのちようでは売れた芸妓げいしや、たいそうきれいな女ひとでした——。そのお母つかさんに手を引かれて、なんの気もなくこのお堂へ連れられてきてみると、そこに、ジツと待っていたお武家様がありました。才さい恐こわい、というような気がして、私はお母つかさんにすがりつくと、そのお侍は、いきなり私の手を取って、見飽みあかぬように、涙ぐむじやアありませんか」

聲けいの音ねひとつ洩れないで更ふけてゆく伽藍がらんの下には、ただ、水底みずそこのような夜気があった。万吉には、今夜のお綱が、十か九ツぐらいな小娘にみえた。おばこか、お煙草たばこ盆ぼんみいたな髪かみに結ゆって、母の手にひかれていますお綱がそのまま目めにうかぶ。

かの女じよが、幼かりし頃の思い出ばなしに。

「どんなにびつくりしたことか——今でも分るくらいでしたよ」と、お綱は、うツとりと

なつて、話の息をつぎたした。

「——そして、この観音堂に、お母さんと私を待つていた妙な侍は、ややしばらく、怖がる私の手をとつて、ジツと涙ぐんでいましたが、そのうちに、今度は、お母さんに、シンミリと別れの言葉をいいのこして——そうでした——旅へでも立つように、名残を惜しんで、幾度も幾度も振り返りながら、花吹雪の闇の中へ、姿が消えてしまったのです……影絵みたいなお侍の姿が行つてしまつたのでした」

「ふうむ、そして？」

「それから先は、小さい私は無我夢中、おはぐる溝の裏店で、お転婆娘に育つてきました、お母さんと死に別れた頃から、時々、その影絵のお侍が、妙に思いだされてくるんですよ——、そしてね万吉さん、どうして私のお母さんが、そのお侍と別れる時に、あんなに泣いていたのだろうか？ ……とそれが解けない謎でした」

「ウム、そう話されて、俺にはうツすら分つてきた」

「私も年頃になつてから、それを覺つてきたのです」

「花の散る晩に、ここへ別れにきた侍は、お前の——」

「私の、ほんとの、父親でしよう？ ……」

「そうよ、それに違えねえ」

「養い親の人情で、虎五郎は私にそれを秘し隠しにしていますが、息をひきとる時になつて、初めて、それを明かそうとしたのじやないかと思うのです」

「なるほど……、そうすると、お前に渡した刀と一緒に、何か由緒が書いてあるかもしれねえ」

「このお堂の御廂を仰いで、ふいと思ひ浮かんだのも、何か深い因縁ずく……と、急に開けてみたくなつたもんだから……」

「まア、とにかくそれじや、早く中をあらためてみるがいい」

「ええ……」と、いつて、お綱はまた現実のときめきにうたれながら、膝にのせていた刀の包み紙を、クルクルと、静かにはいでゆくのであつた。

と——その下には、卯黄の布。

固くこま結びにしてあるのを、糸切歯で解こうとして、口の辺りへ持ってゆくと、その布の隙間からバラバラと散りこぼれたのは七、八通の書付と——手紙と——そして守り袋。

怖ろしい運命の神籤でもひくように、お綱が、こわごわと、その一通を手を拾ってみる

と、なつかしや、死んだ母の名。

お才どのへ。

また、一ツの手紙を取つてみると、それにも同じ手蹟しゆせきで同じように。

お才どのへ。

としてあつた。

そして、順々に、見ては膝へのせながら、何気なく、最後に拾つた一本の手紙の裏――。

「万吉さん、――ちよ、ちよツと体を少し避よけて」

御堂みどうの内陣から洩れる灯あかりの方へ、その手紙をさし向けて、お綱がおののく手に持った

のを見ると、ああ、それはなんとという不思議な人の名――不思議な輪廻りんねのあらわれである。

こうがよあみ。  
甲賀世阿弥。

――と書いてある。

甲賀世阿弥？

甲賀世阿弥？

なん度ジイと読み返してみても、それはやはり甲賀世阿弥としか読めない。

だが、しかし！これはまたどうしたということだろう。

甲賀世阿弥といえ、今さら、こと新しく考えだすまでもなく、幕府まふの間まづめ甲賀組宗家そうけの人。お千絵様の父なる人。そして、阿波の間者かんじやろう牢とらに囚われたまま、十年あまりも生死の消息をすら絶たれていた人。

また近くは法月弦之丞たいふが、大府の秘命をふくんで、深秘しんぴの間者牢を訪れるべく、单身江戸を立つて行った目標の人ではないか。

その甲賀世阿弥の名が、お綱の母へ——おオどのへ——と宛てた手紙の封の裏に、ありありと読まれた不思議さにくたれて、お綱は、渺びようぼう茫とした迷宮に疑心をさまよひ、万吉も、それへ驚きょうもく目をみはつたまま、ゴクリと、生唾なまつばをのんでいるばかり……まったく、いふべき言葉を忘れていたとは瞬間、二人の姿であった。

「ウーム……？」と、やがて万吉が思惑おもわくに疲れてうなっていた。お綱もそれにつりこまれて、深い息をホツと洩らして、

「……ああ、わからない……」と、指から封を取り落すと、万吉がすぐに拾い取って、中の巻紙をサラサラと夜風に流して読み始めた。

多度津たどつユキ渡船とせんヲ待ツ間、コレヲ最後ニ一札便さつぴんべつ別申シオキ候。在府中、ソモジトノ永

キ縁モ、マタ江戸出立ノミギリ、観音堂ニテ綱ツナジヨ女ノ顔ヲ見オサメ申シ候夜ヨノコトモ、  
今ナオマザマザシク覺工候エド、コノタビコソハ、阿波ニテステベキ一命、ソモジニハ、  
スベテヲ忘レクルルコソ、何ヨリモヨキ餞センベツ別ニコソ……。

こう読みかけて万吉は、あッ！とお綱の顔をみつめてしまった。

「お、おい！ 今読んだのを聞いていたか」

「聞いていました……そ、それから」

「だんだんに読んでいったら、すっかり仔細も分るだろうが、お綱さん！ お前はまさし

くこの人の娘だ！ ア——甲賀世阿弥の血をうけているお嬢様だ」

「でも……」お綱はまだ信じきれないで——

「世阿弥様のお嬢様には、あの、墨屋敷においてになった、美しいお千絵という方が？

……」

「さ、だからなおのこと、お前めえが世阿弥様の娘だということが分る。というなア、最前まへきいた話にも、また、この手紙の様子をみても、お前の死んだお母つかさんは、仲之町なかのちようの江戸芸妓げいしやだろう……。いいかい、そこで何かの機縁き縁から、甲賀様と馴染なじみになって、いつか、日蔭の腹違いに、生れたものがお前めえなのだ……イヤ、お綱さんだったのに違いない。まア

待ちねえ。もつと先を読んでみるから……」

紙背しはいを透とおすような眼まなざしで、万吉が、その手紙、またほかの四、五通、残らず読んでみた時に、すべての疑雲は晴れていた。かれの想像は当っていた。

吉原の仲之町、その夜桜よりは桐佐きりさのお才といわれたお綱の母と、まだ三十二、三であつた世阿弥とは、かなり永い馴染なじみだつた。

そして、二人の仲にお綱が生れた。

芸と意気張りで売る仲之町芸妓げいしやだ。年増となつても、よしや引手茶屋の店先に自分の子供をあそばせておいても、人気に靡すたりはなかつたが、やがて、宝曆の何年かに、世阿弥は阿波へ去つてしまつた。

お才の名は、それからまもなく、桐佐きりさのたそや行燈あんどんから隠れて、廓なかの馴染みな人を相手に、菌そのはちぶし八節はちぶしの女師匠と変つた。そして、淋しいしもたやにお綱の育つのを楽しみにしていたが、紋日もんびの虎とらにつきまとわれて、何かやむない事情にしばらくは、なさぬ仲のお三輪を生み、乙吉を生み、そして、さすがな色香も年ごとに褪あせて、おはぐる溝とびの長屋に散つた――。

「名妓の末路はなぜああでしょう？」

仲之町では、そう噂した。

そうした古い記録のほかにも、まだ確かな証拠があつた。

一緒に出てきた紅錦こうきんの守り札袋まもぶくろ——それには、紺紙金泥こんしきんでいの観音くわんおんの像すがたに添えて、世阿弥とお才おさいとが仲の一女、お綱おつなの干支えと生れ月までが、明らかに誌しるしてあつた。

もう、疑う余地もないが、残る脇差の方をしらべてみると、これは世阿弥がかたみとして、阿波入国の前にお才へ渡したものであるう、六角むすぶの象嵌ぞうがんつば鏝あいに藍あいよりの柄糸つかいと、めぬきは四代光乗こうじょうが作らしく、観世水かんせみずに若鮎わかあゆが埋めこまれ、柳しぼりの鞆さやごしらえ、なんともいえない品格がある。

「すばらしい。大名物だいみょうものといつてもいいくらいな刀だ。お綱さん、ひとつ中身をあらためさしておくんなさい」

こういつて万吉はなおも深く、装剣そうけんの美術に見とれた後、しずかに鞆さやを払つてみた。抜いてみると、目づもりは二尺二、三寸、片手斬なぐりに頃あいな肉づきである。刃紋はもんは朧ろ夜の雲うやに似る五ぐの目乱れめみだ、星ほしの青さを吸つて散らすかとはかりかがやかしい、鶺鴒うくびづく首作りうくびづくの銚きつさき子こに特徴のある太刀すがたの相すがたは——まず相州系そうしゅうけい、新藤五国光しんとうとみてまちがいは

ない。

「ウム、こう見ていると、背骨の髓まで凍えてきそうだ。こんな名刀をさしていた人の、若い姿が憫われるなあ」

抜いてあるまま、その鞘と柄とを、お綱の手へ返すと、お綱もそれをうけてややしばらく、深味のある鉞の色に、ジツと心を吸いこませたが、やがてわれを忘れかけたように、

「阿波へ行けば——」

突然に、こう独りで強く叫んだ。

「お目にかかることができる！ 血を分けた父親に会われる！ 才私はどうしても、  
劍山の間者牢へ行かなければならない」

「よし！」

と、その独りごとへうなずいて、万吉も、ここに固く意を決したらしく、

「一緒に行こう！ 阿波へ」とキツパリ言いきつた。

「えッ、じゃあ、承知してくれますかえ？」

「こう分つてみる上は、俺が止めだてをするいわれがねえ。夜明けを待つてすぐに立とう

！ 弦之丞様のあとを慕つて、木曾街道から上方路へ——」

「なんだか、私の目の前が、急にほんのりと明るくなつたような気がする……。そうなれば、弦之丞様へお尽しもできるし、真の父親にも会われるというもの。これも、死んだお母さんのおひきあわせであるかも知れない……」

無明の底から、一道の光をみたように、お綱は手に持ちさきさきえていた新藤五の刀の肌を見まもつていた。そこに、亡き母親の面影がういて、自分に、ものをいいかけるか――

すると……。あやしむべし、ジツと眸をこらしている刀の刃紋へ、ありありと、人間の顔らしいものが映つた。

が――しかし、それは美しい仲之町の名妓お才の面影ではなかつた。鋭い双眸をもつた男の悪相！ ギラリと、お綱を睨むようにかすつて消えた。

「あッ」

と、肩のうしろを振り仰ぐと、いつのまにか、内陣の御灯を横にうけて、一人の男が立っている。長やかな大小と、眉深に結んだ十夜頭巾、それは、まぎれもない孫兵衛の姿だ。

油がきれたか、格子天井の仏龕が、パツ、パツ……と大きな明滅の息をついて、

そこへヌツと反身そりみに立っているお十夜の影を、魔魅まみのようにゆらゆらさせた。

「おお、てめえはッ」

見るがいなや、万吉は床ゆかを鳴らして躍り立った。と一緒に、お綱もサツと飛びのいたので、膝ひざにのせていた手紙の反古ほごが、あたりへ白く散らばったが、もう拾っている間はなかった。

「邪魔だッ、おのれは！」

こう呶鳴なげつたのは孫兵衛の錆さびび声。足をあげて、躍り込んできた万吉を蹴返した。弾はずみくくつて目明しの万吉、ドーンと廻廊へ腰をついたが、その強敵を向うへ避よけて、

「早く！」と、お綱へ目くばせをした。

そうだ！こんな者にかまっていられる場合ではない、とお綱も覚さとつて、本堂の正面へ、バラバラと走りだしてゆくと、ちょうど廻廊の曲り角、太い丸柱の蔭から、

「待てッ——」と一本の白刃が出た。

それは旅川周馬である。

同じようにその廻廊を、裏手へ向って駈けだした万吉の前にも、いきなり、平青眼ひらせいがんの  
大刀が、ヌーと光をよじつてきて、かれの行く手をふさいでしまった。アツ——と欄干を

楯たてにして見透みすかすと、左の片腕を繻帶ほうたいして、白布で首に吊り下げている。これ、天堂一角であった。

「ビクとでもすると命がないぞ！ 動くな、そこをツ」

一角が片手に持った大刀は、ヌーと寄つて、相手の精気をすくませ、みるまに、その劍けん尖んさきに立つた者を、死相に変らせてしまふかと思われる。

「エエ、しまった！ さてはさつきからの様子を、残らず聞いていやがツたな」

と、おのれの油断に臍ほぞを噛みつつ、十手に必死をこめた万吉。——かれの切ツ尖さきが一寸寄れば一寸、二寸よれば二寸ずつ、ジリジリと、欄干に添つて後あとずさりした。

と——お綱もまた、廻廊の角かどで、旅川周馬の白刃さきに支えられたが、ハツと驚いたのは一時で、手に提ひげていた新藤五国光の鵜首うくびづく作りを、無意識に、サツと構えるなり、周馬の小手へ一閃せんくれた。

シュツと、青い火花が双方の目を射る。

その、無法な胆気たんきと、国光の五ごの目乱めみだれにおびやかされて、周馬は少し気を乱しながら、真ツ向まごひ兵字構ようじがまえに直つて、寄らば——と眼まなこをいからせた。

お綱もふだんのお綱ではなかった。

甲賀世阿弥という武士の血をうけている——と明らかに自覚したお綱。意気地を肌と一緒に研みがく江戸の女の氣質をも、多分にうけている見返りお綱だ。

永い間、甲賀家に仇なし、お千絵様に仇なしたニキビ侍の旅川周馬には、お綱の方から怨うらむべき理由がある。

だが——今はこんな者に、カケかまっている場合ではない。一刻も早く、阿波へ！ 阿波へ！ 遙かな空へ、お綱の心は急いでいる。

「お退どきッ——」

と横なに難ないで、小太刀の光と共に飛び抜けようとすると、その時まで、廻廊の真ん中に立つて、双方を眺めていたお十夜は、「これッ」と、お綱のうしろから抱きすくめた。

そして、無む碍げに利き腕きょうをねじあげようとするのを、お綱は振り払って、お十夜の影へサツと小太刀の光を投げた。——そして、素早く廻廊らんかんの欄干を躍ったかとみれば、翼をひろげた鳳凰ほうおうのように、一丈ほどな御堂の下へ飛び下りた。

「うぬ！」

「逃のがすな。お綱を！」

と、孫兵衛に周馬は、すぐ欄干へ足をかけて、お綱のあとから跳ぼうとすると、どこからか、轟然ごうぜんと夜気を揺すつて、一発の銃声、ズドーンと鼓膜こまくをつんざいた。

「や？ ……」

ぎよツとして、向うを見ると、その時、天堂一角が飛龍ひりゅうとみせて斬りつけた剣光の先から、万吉も、十手をくわえて観音堂から跳びおりた様子——と同時に、

「オオ、向うへ！」

と叫んだのは万吉の声。お綱の影と一ツになって、バラバラと、淡島堂あわしまどうの石橋を越え、お火除地ひよけちの桐畑へと走つて行つた。

「それツ、見失うな」

と、お十夜は真ツ先に、周馬と一角もその後から追いつづいたが、ふとみると、いつのまに横道から出てきたのか、二つの駕かこに、四ツ五ツの提灯ちようちんを振つて、先の者と後の間を、邪魔するように散らばつてゆく人数がある。

そして、その駕と提灯に添つてゆく中の一人が、足をとめて、こツちをふりかえつたかと思うと、チリチリと火繩ひなわの粉を赤く散らして、ドーン！ と短銃の関金せきかねを引き放した。

「あッ！」

後の者は三方に飛び別れて、思わず大地へ身をうツ伏せる。

そしてまた身を起こそうとすると、しばらくの間隔をおいて、さらに凄じい三ツ目の弾たまがうなつてくる。

そのまに、先の駕と人数と提灯とは、前へゆくお綱や万吉の姿をも引つくるんで、無二無三に、桐畑の坊主林ぼうずばやしを走りぬけ、どこへともなく急ぎに急いだ。

虎口をのがれたお綱と万吉も、それが、誰の人数か、提灯の印しるしが何かも気がつかずに、一本道のつづく限り、その人々の中にまぎれて走つたが、やがて、下谷の四ツ目よめの辻新堀端つじんぼまでできた時に、ヒョイと道を交わそうとすると、

「万吉、もう少し先まで」

と、短銃を持った侍が言った。

何を問うまもなく、ふたたび駆けだした駕と人数は、堀端の施行小屋せぎようの前から横道へ  
そして、佐竹ツ原の野中へグングンと入つて行つた。

朧夜おぼろよほどの空明りもないが、若草の匂いがどことなく漂ただよつて、わらじにふむ露湿りの感じも、夜ながら春らしい。

「もうこの辺でよからうから、駕を下ろしてお待ち申そう」

待つとは誰のことか分らないが、火薬袋の紐ひもをクルクルと短銃つつの筒に巻いて、打ッ裂羽さきば織おりの後ろへ差した最前の武士が、こういつて止め合図をかけると、その露をふくんだ春草の上へ駕尻軽く下ろされて、若党らしい者三、四名、小侍が二人ほど、小膝を折つて駕のまわりへズラリと休んだ。

ところで、お綱と万吉も、そこで初めてホツと息をつきながら、短銃たがさを携たがえていた侍の顔を見ると、なんと意外なことだろう？

それは、虎五郎が息をひきとつた際に、御徒士おかちの小池喜平と名乗つて長屋をおとずれ、その場でお三輪と乙吉の養育をひきうけて行つた、あの若党連れの侍であつた。

「おや、あなた様は？」

思わず目をみはると、その武士はニヤリと笑つて、

「先程は失礼いたしました。手前は松平左京さきよしのすけ之介の家臣で、さだめし御不審さびに思われようが、只今、あのお方が後よりまいつて、いずれ詳しいお話をしたことであろう」と、控え目にいつてそれ以上のことは口をつぐんでいる。

と、まもなく、佐竹ツ原の野道を、人影でも探すように歩いてくる武士があつた。

「おお、常木様、こちらにお待ちうけ申しております」と、声をかけると、深編笠のその影がツカツカと近づいてきたが、その時、驚いたのは万吉で、常木鴻山こうざんがどうしてここへ来たのか？ とただ不審に思っていた。

「大儀でござった」

鴻山は駕側かこわきの者をねぎらつて、少し離れた所に、茫然と立っている、お綱と万吉のそばへ寄つてきた。そして不意に、

「お綱殿——」と呼びかけた。

いつぞやこの人の紙入れを掏すろうとしたことから、身の素姓を話して、何百両の金まで恵まれている鴻山に改まつて、お綱殿と、丁重に呼ばれたから、ひそかに卑下ひげを持つかの女の心はハツとしたらしかった。

「万吉と一緒に、阿波へお渡りあるうという御決心、けなげに存ずる。で——鴻山が心ばかりの餞別はなむけ、おうけとり願ねがいたい」

と、唐突にいつて、懐中ふとこから取り出したものをお綱の手へ渡した。それは美濃の垂井たるいの宿、国分寺の割印わりいんを捺おした遍路切手へんろきってで、それを持って国分寺にゆけば、この三月の中旬に、阿波八十八カ所の遍路にのぼる道者船どうじやぶねの便乗をゆるされるということだ。

今、阿波二十七関は、一切、他領の者を入れぬが、宗しゅうほう法の者ばかりは、それを拒むことができないので、春と秋二度の道者船に限ってそれをゆるす掟おきてである——と、常木鴻山は、さらに詳しく説明した。

先に江戸を立つて行った法月弦之丞も、垂井の国分寺に行つて、ひそかに、それへ便乗する用意をしている筈、今から、道を急いで行つたら、或いはそこで落ちあうことができるであろう。——とも言い足した。

なお——今夜、自分がここへ来たことについては、こういつて、二人の不審を解いた。注意深い鴻山は、いつとなく、町年寄に頼んで、お綱の身の上を調べさせていた。そこへ、虎五郎の不慮の死を知つたので、代々木荘から松平家の者をやつて、龍泉寺町にすむ御おかち徒士といわせて、その身がらを引き取つてくると、ちようど、浅せん草寺そうじの闇の中に、お十夜や周馬や一角などが、何か待ち伏せでもしているようなので、あの観音堂の内陣の扉に隠れて、一伍ぶ一しじゅう仕しの様子を、のこらず聞いていたのだつた。

前に、五十間けんの町年寄から、お綱は甲賀という由緒ある侍の娘だということを、鴻山にいつてきてはあつたが、現在、阿波のかんじやろう間者牢まにやろうにいる世阿弥の血をうけたものとは、自分も、その時に初めて知つて、実に意外な心地がした——。とかれは感慨の深い面持ちで、

お綱の顔をしげしげと見なおした。

いくら早立はやだちといつても、まだ人影もない真夜半まよなか。

江戸から中仙道へ踏みだす第一関門、本郷森川宿もりかわじゆくのとある茶店をたたき起こして、そこに、一刻ときばかり前に佐竹の原にいたままの駕かこや人数が休んでいた。

「では万吉、道中必ず気を配つて、不慮のことがないように致せよ——、また弦之丞殿は何も知るまいから、落ちあつた節は、よく、その後の事情を話すがよい」

この、街道口まで、わざわざ見送つてきた常木鴻山は、いよいよ夜にまぎれて江戸を立つ二人の者へ、何くれとない注意を与える。

お綱は、姿なりも形もそのまま上に、寝ているところを起こした立場茶屋たてばから、笠とわらじと杖つえだけを求め、床しようぎ几を借りて、はきなれぬわらじの紐ひもを結んでいた。

支度しよどがすむと、やがて二人は笠を揃えて、常木鴻山こうざんの前に立ち、情け深い今日の取りなしに真心からの礼をのべる。

「おお、お綱殿にも堅固けんこにして、どうぞ、無事に、お父上に会われてまいるよう、鴻山も、蔭かげながら祈りますぞ」

「何から何までのお心尽し、たとえ、途中で阿波の土となりましようとも、決して忘れは致しません」

「なアに鴻山様、たとえ体が舍利しやりになつても、きつと、劍山まで行きついて、望みを達してまいりますから、どうか、御安心なすつて下さいまし」

「へんろ遍路切手がある以上は、関所や便船になやむことはあるまいが、飽くまでもと、そちや弦之丞殿をつけ狙っている者もあることゆえ、ひとたび江戸を踏みだした後は、いつそう油断をしてはならぬぞ」

「よく承知いたしております。では鴻山様、めでたく大事を成し遂げて立ち帰りました後に、また改めてお目にかかります」

「かしておお」と鴻山も、門出へ気味よくうなずいたが、

「お綱どの、一目別れを告げて行つたらどうじゃ」と、向うに据すえてある駕の垂たれをソツとめくつた。と見ると中には、お三輪と乙吉がグツタリと無心な顔をして眠り落ちている。「何も知らずにおりますから、このまま言葉をかけないでまいります」

「ウム。せつかく罪もなく、寝入っているものを起こして、また辛い涙をしぼらせるのも、心わづない業わざかもしれぬ。では、後々のことは案ぜられるな。殿も御承知の上、代々木荘で養

育して取らせい、とおつしやられたことでもあるから」

「ハイ、もうこれで、塵<sup>ちり</sup>ほども心残りはございません。ただ慾には、お千絵様に一目会つてまいりたいとは思いましたが……」

「そのお千絵殿も、今の容体では、まだ何を話してもお分りあるまい、いずれ病気が癒<sup>い</sup>えた後に、晴れて名乗りあう時節もござろう」

「じゃアお綱さん——」と促<sup>うなが</sup>しながら、万吉は笠の紐<sup>ひも</sup>を結んだついでに、今宵かぎりの江戸の空をふり仰いだ。

つるべ撃<sup>う</sup>ちに鳴った短銃が、観音堂の境内をゆすつてから、一刻ほどたった後だ。

しきりに、あつちこつちを見廻しながら、町人態<sup>てい</sup>の男が、バタバタとそのあたりを駆け廻っていたが、お堂の西側にしやがみ込んで、蟬<sup>せみ</sup>の裸<sup>はだか</sup>火<sup>か</sup>に顔を集めている三人の人影を見つけると、

「孫兵衛様で……」と身をかがめた。

「半次か」

三人の目が、一様にギラリとこつちへ向いた。最前、お綱が廻廊へ落していった反古<sup>ほご</sup>を

見つけて、ヒソヒソと読みあっていたところらしい。

「どうした、先の様子は？」

「佐竹ッ原までつけて行って、すっかり様子を見届けて来ました。案の定、邪魔をして行つた奴らは、常木鴻山の廻し者でさ。まアそれはいいが、愚凶愚凶していられなくなったのは、お綱と万吉の方で、あの二人はどうとう今夜かぎり江戸表にはいないことになりましたぜ」

「えッ、江戸におらぬと!!」

「鴻山の手から、阿波へ渡る遍路切手をうけとつて、中仙道から、木曾路の垂井へ急いで行きました。そこにや、先に姿を消してしまった法月弦之丞もいて、この春の道者船にのる支度をしているとかということですよ」

「あつ！」と三人は、あつ気にもとられたが、また躁狂として、一刻も早く、万吉とお綱の道をくい止め、弦之丞と合しぬうちに、非常手段を講じなければ——と騒ぎ立った。しかし、それは、あくまで弦之丞を討たんとする天堂一角と、あくまでお綱に執着をもつお十夜のこと、ひとり旅川周馬だけは、割合に冷淡であった。

かれが一頃野望の爪を研ぎぬいていた甲賀家の財宝は焼け尽し、お千絵様そのものは、

恋すべきようもない乱心の人となっている。

# 青空文庫情報

底本：「鳴門秘帖（一）」吉川英治歴史時代文庫、講談社

1989（平成元）年9月11日第1刷発行

2004（平成16）年1月9日第20刷発行

「鳴門秘帖（二）」吉川英治歴史時代文庫、講談社

1989（平成元）年9月11日第1刷発行

2008（平成20）年12月24日第22刷発行

※副題は底本では、「江戸《えど》の巻」となっています。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：トレンドイースト

2013年1月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 鳴門秘帖

## 江戸の巻

2020年 7月18日 初版

### 奥付

発行 青空文庫

著者 吉川英治

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>